

# 磯並遺跡

——静香苑進入道路第Ⅱ期工事に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

1987

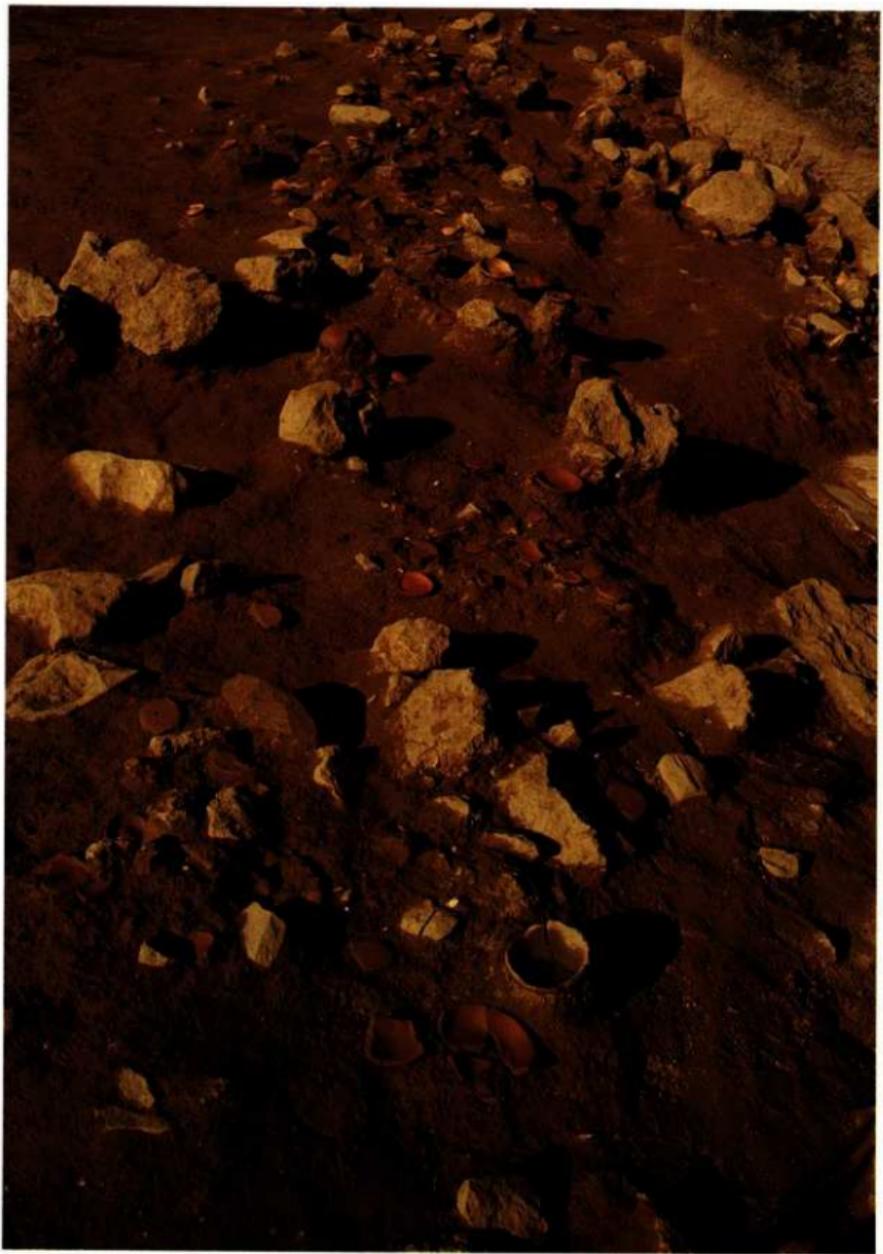
茅野市教育委員会

# 石磯並遺跡

—静香苑進入道路第Ⅱ期工事に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1987

茅野市教育委員会



基壇状遺構1のかわらけ埋り土器出土状態

## 序 文

このたびの磯並遺跡の発掘調査は、「静香苑」への進入路の第II期建設工事に伴い、茅野市富士見原行政組合の委託を受けて茅野市教育委員会が実施したものである。

西山と一般に呼ばれる守屋山麓には、諏訪大社上社本宮と前宮をはじめとする諏訪神社信仰関係の史跡が多い。特に高部は本宮と前宮へ連なる地であり、諏訪神社信仰関係の史跡のほか多数の古墳や古代集落遺跡が存在し、かつ神長官守矢家邸などの存在から、諏訪地方の古代・中世史上に重要な役割を果たした土地であったと考えられている。そしてそのことの一端は、昭和56年に行われた高部遺跡と狐塚遺跡の発掘成果からも十分にうかがうことができるのである。

さらにまたこのたびの発掘調査では、磯並社の境内に続く中世の基壇状遺構と建物址が多量のかわらけ等と共に発見された。そのことの意義については本書に詳しく記されているが、諏訪の中世史に限ってもひとつの大きな学術上の成果をもたらしたものと確信している。

発掘後、種々の事情により本書の刊行が遅れたが、幸い、行政事務組合と事業担当の茅野市市民課のご理解により、ここに本書の刊行となった。また、発掘から遺物整理、そして報告書の刊行までご尽力いただいた調査団の関係者に深く感謝申し上げる次第である。

最後に、本調査の調査団長であられた故宮坂虎次尖石考古館長は、昭和59年11月1日に不帰の客となられました。ここに記載された学術的成果は、先生の指揮により得られた不窮のものであります。ここに先生のご冥福を心よりお祈り申し上げ、本書の序文といたします。

昭和62年3月16日

茅野市教育委員会

教育長 小島 与四男

## 例　　言

1. 本書は静香苑進入路の第II期建設工事に伴う長野県茅野市磯並遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野富士見原行政事務組合からの委託を受け、茅野市教育委員会が磯並遺跡調査委員会を設置して行ったものであり、調査委員会組織等の名簿は発掘調査関係者名簿として別掲してある。
3. 発掘調査は昭和58年11月5日から12月3日まで行い、出土品の整理は昭和58年12月8日から昭和59年1月29日まで行った。また、報告書の作成は昭和62年1月6日から3月まで茅野市尖石考古館において行った。
4. 発掘現場における記録は主として鵜飼幸雄・守矢昌文が行った。なお、遺構の全測図は輸中央航業に航空写真測量を委託して実施した。遺物整理は田村和郎・矢島恵美子・矢崎つな子・原 敏江・宮坂浩樹・宮坂篤夫・柳平嘉彦・牛山市弥・守矢芳夫が行い、遺構実測図の整理及び遺物の実測と図版の作成は鵜飼と守矢が行い、これを伊東みゆきが補佐した。
5. 本書の作成は鵜飼と守矢が担当し、原稿は鵜飼・守矢・宮坂光昭の3名で分担執筆した。執筆の分担は次のとおりである。第I～II章鵜飼幸雄、第III～IV章鵜飼幸雄・守矢昌文、第V～VI章第1節守矢昌文、第VI章第2節～VII章宮坂光昭
6. 出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

## 発掘調査関係者名簿

### 1 調査委員会

委員長 茅野慶次（文化財審議委員長）

副委員長 平林正貴（教育委員長）

委員 矢崎孟伯（文化財審議副委員長） 大久保啓立（文化財審議委員） 北原 昭（文化財審議委員） 小平重紀（文化財審議委員） 長田太郎（文化財審議委員） 宮沢 伝（文化財審議委員） 竹村美幸（文化財審議委員） 武居幸重（文化財審議委員） 岡川 岩藏（市議会社会文教委員長） 小島与四男（教育長） 宮坂和茂（社会教育課長） 原充（市民課長） 五味 清（財政課長） 宮坂虎次（調査団長） 宮坂光昭（調査団副団長）

会計監事 平林正貴 五味 清

### 2 調査団

調査団長 宮坂虎次（茅野市尖石考古館長・日本考古学協会員）

調査副団長 宮坂光昭（日本考古学協会員）

調査員 鵜飼幸雄（茅野市教育委員会学芸員・日本考古学協会員） 白田武正（茅野市永明小学校教諭・日本考古学協会員） 守矢昌文（茅野市尖石考古館学芸員）

調査補助員 柳沢土郎（長野県考古学会員） 矢島恵美子（長野県考古学会員） 矢崎つな子（長野県考古学会員） 山田周平（長野県考古学会員）

発掘参加者 矢崎 勝 守矢芳夫 岩崎治郎 藤森一郎 増沢 洋 原 敏江 守屋かの 岩波  
けさえ 原 とめ 小林シマ 牛山たてみ 牛山ます 小林 幸 牛山みえ

### 3 事務局

事務局長 小島与四男（教育長） 事務局次長 宮坂和茂（社会教育課長） 事務局係長 細田正和・伊藤修平（文化財係長） 局員 鵜飼幸雄（文化財係） 池田文子（社会教育係）

# 目 次

序文	
例言	
第Ⅰ章 調査経緯	1
第1節 調査にいたるまでの経過	1
第2節 発掘調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡概観	5
第1節 遺跡の地理的環境	5
第2節 遺跡の歴史的環境	5
第3節 遺跡の現状と範囲	7
第Ⅲ章 遺跡の層序	10
第Ⅳ章 遺構	14
第1節 中世の遺構	14
1. 基壇状遺構 1 とその内部の遺構	14
1) 基壇状遺構 1	14
2) 碇石をもつ建物址 1	19
3) 溝 1	20
4) 溝 2	20
5) 階段状遺構	20
6) 石組み状遺構 1	22
7) かわらけ溜り	22
8) 土坑 1	25
9) 石列 1	27
10) 石列 2	27
2. 基壇状遺構 2 とその内部の遺構	27
1) 基壇状遺構 2	27
2) 集石 1	28
3) 石列 3	28

4) 石列 4	30
5) 石列 5	30
6) 土坑 2	30
<b>第V章 遺物</b>	<b>31</b>
<b>第1節 縄文時代の遺物</b>	<b>31</b>
<b>第2節 平安時代の遺物</b>	<b>33</b>
<b>第3節 中世の遺物</b>	<b>33</b>
1. 土器	33
1) かわらけ	51
2) 中世陶磁器	59
2. 金属製品	60
1) 鉄釘	60
2) 留め金具状鉄器	64
3) 板状鉄器	64
4) 模状鉄器	64
5) 鉄滓	65
6) 飾金具状銅製品	65
3. 錢貨	65
1) 中世錢貨	65
4. 石製品	66
1) 延石	66
2) 砥	67
<b>第4節 近世・近代の遺物</b>	<b>67</b>
1. 土器	68
<b>第VI章 調査の成果と課題</b>	<b>71</b>
<b>第1節 磯並遺跡出土のかわらけについて</b>	<b>71</b>
<b>第2節 磯並神社と祭式</b>	<b>75</b>
<b>第VII章 結語</b>	<b>81</b>

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/5000) .....	6
第2図 遺跡周辺の地形と発掘区 (1/2000) .....	8
第3図 遺跡を中心とした小字図.....	9
第4図 遺跡の層序 (1/60) .....	11・12
第5図 発掘区内遺構分布図 (1/160) .....	15・16
第6図 碓石をもつ建物址1、溝1、溝2、石組み状遺構1 (1/60) .....	17・18
第7図 階段状遺構 (1/60) .....	21
第8図 かわらけ溜り (1/60) .....	21
第9図 かわらけ溜りの遺物出土状況.....	23・24
第10図 石列1、石列2 (1/60) .....	26
第11図 石列3、石列4、石列5、集石1、土坑2 (1/60) .....	29
第12図 出土土器 (1/3) .....	31
第13図 出土石器 (1) (1/3) .....	31
第14図 出土石器 (2) (2/3) .....	32
第15図 出土石器 (3) (1/3) .....	32
第16図 出土土器 (1/3) .....	33
第17図 出土土器 (1) (1/3) .....	34
第18図 出土土器 (2) (1/3) .....	35
第19図 出土土器 (3) (1/3) .....	36
第20図 出土土器 (4) (1/3) .....	37
第21図 出土土器 (5) (1/3) .....	38
第22図 かわらけの器形分類 (1) (1/3) .....	52
第23図 かわらけの器形分類 (2) (1/3) .....	53
第24図 かわらけの法量 (1) .....	56
第25図 かわらけの法量 (2) .....	56
第26図 かわらけ底部 (1/3) .....	57
第27図 かわらけの出土重量分布.....	58
第28図 出土土器 (1/3) .....	59
第29図 出土鉄製品 (1) (1/2) .....	61
第30図 出土鉄製品 (2) (1/2) .....	62

第31図 鉄釘出土分布.....	62
第32図 出土金属製品（1／2）.....	65
第33図 出土錢貨（1／1）.....	66
第34図 出土石製品（1／3）.....	67
第35図 出土土器（1／3）.....	68
第36図 I群かわらけの法量比較.....	71
第37図 他遺跡出土の手捏ねかわらけ群（1／3）.....	72

## 表 目 次

第1表 出土石器一覧表.....	32
第2表 かわらけ観察表.....	39
第3表 かわらけの器形別出土状況表.....	49
第4表 出土鉄釘一覧表.....	63
第5表 出土錢貨一覧表.....	66
第6表 出土砥石一覧表.....	67
第7表 出土近世・近代陶磁器一覧表.....	69

## 写真図版目次

- 卷頭図版 1 基壇状遺構 1 のかわらけ溜り上器出土状態
- 図版第 1 1 遺跡近景(南方向から) 2 調査区全景(北方向から)
- 図版第 2 3 調査区航空写真(基壇状遺構 1) 4 調査区航空写真(基壇状遺構 2)
- 図版第 3 5 基壇状遺構 1 全景 6 碓石をもつ建物址(北東方向から)
- 図版第 4 7 基壇状遺構 1 斜面部の状態(北方向から) 8 基壇状遺構 1 斜面部の状態(東南方向から)
- 図版第 5 9 基壇状遺構 1 斜面部葺石の状態 10 基壇状遺構 1 斜面部の大石と裾部の石列 1
- 図版第 6 11 階段状遺構(東方向から) 12 階段状遺構(西方向から)
- 図版第 7 13 基壇肩部のかわらけ溜り 14 かわらけ溜りのかわらけ出土状態
- 図版第 8 15 土坑 1 16 石組み状遺構 1
- 図版第 9 17 基壇状遺構 2 全景(北西方向から) 18 集石 1
- 図版第 10 19 石列 5 全景(東方向から) 20 石列 5 近景
- 図版第 11 出土上器(1)
- 図版第 12 出土上器(2)
- 図版第 13 出土土器・石器
- 図版第 14 出土鉄製品・錢貨 かわらけ底部の圧痕
- 図版第 15 かわらけの整形痕

## 第Ⅰ章 調査経緯

### 第1節 調査にいたるまでの経過

茅野市市民課より、斎場静香苑進入路の第Ⅱ期工事に伴う埋蔵文化財の有無についての調査依頼があったのは昭和58年5月であった。このため茅野市教育委員会では6月に入って予定地内の試掘調査を実施したところ、磯並社に接する下方一帯のルート内からかわらけの出土することを確認した。この事実と合わせ、付近には小袋石・磯並社等の鎮座する諏訪大社の社地があり、この一帯は諏訪信仰史跡としても重要な場所であるとの認識から、ルート内の埋蔵文化財の保護についての具体的な協議を行った。

その結果発掘調査の必要性が確認されたものの、実際に発掘調査に入れるようになったのは10月下旬であった。しかも年内には現地での調査を終了することが要請されたため、茅野市教育委員会では11月初旬に磯並遺跡調査委員会を設置して調査団を編成し、11月5日から約1ヶ月の予定で発掘調査に入った。

### 第2節 発掘調査の経過（調査日誌）

11月5日（土） 午前中に機材を運搬し、午後グリッドを設定する。グリッドは、市道5ブロック76号線に続く地番625から御手洗川を挟んだ地番576-1までの道路中心線を基線とし、市道側から北へ向かって1~30とする。

11月7日（月） 宮坂虎次調査団長あいさつの後発掘作業を開始する。市道側から御手洗川間の表土除去作業と、層位確認のためE-3・F-4を深掘りする。F-4では第5層からかわらけの小破片と宋銭が出土する。

11月8日（火） 調査の中心を御手洗川の北側へ移す。この部分はやや小高く平坦な地形となっており、地表面でかわらけの小破片が採集できる。H-20から礎石様の平坦面をもつ礎を検出するほか、各グリッドからかわらけが多く発見される。それらのかわらけは小指大の摩滅したものから完形のものまで様々なものがあり、H-19・20では比較的完形に近いものが出土する。また東側の斜面の性格を調査するためE・D-19を発掘する。

11月9日（水） 平坦部と東側斜面の表土剥ぎを行う。H-18・19に検出された礎石様礎の配列する内側にもかわらけは多いが、その周辺では摩滅した皿類の出土が目立つことが多い。一方、斜

面部のD-18では碟の平らな面を貼り付けて積み上げた状態を示す葺石が検出され、D-23では小碟を多量に雜然と積み上げた集石状の遺構が検出された。

11月10日（木） 午前中小雨のため発掘作業は中止し、午後になって作業を始める。昨日に引き続いて平坦部の肩部から斜面にかけてのD-19~24、C-19・23の調査を行い、特に斜面の葺石の検出を進める。

11月11日（金） 斜面の葺石状遺構のプランの追求と斜面裾部のC-18~22を調査する。この結果、葺石は基壇状を呈する小高い地形の東側斜面を、D-17からD-25まで現地形にそくしてほぼ直線的に延びていることが判明し、さらにE-26方向へ曲がっていくことが予測された。また斜面裾部の平坦面にも石列が発見される。

11月12日（土） 御手洗川に接する基壇状遺構の南コーナー部と、葺石下段の北側へ広がっていく平坦面の検出作業を行う。午後は雨のため作業中止。

11月14日（月） 基壇状遺構下段の北側に広がる平坦面を調査する。C・D-25~27にかけての表土層下には、黒褐色でジャリを含む平坦な硬い面が確認され、この面を中心かわらけ・釘が数点出土する。

11月15日（火） 基壇状遺構の上段平坦面を精査する。E-20・21・22の西壁側にかわらけが集中して出土する。小破片は少なく比較的完形に近いものでまとまっており、炭化物も集中している。また、G・H-18に小豎穴を検出し、それを中心とする建物址一帯のH・G-19にはかわらけの指頭大の小破片の他、炭化物も比較的多くみられた。

11月16日（水） 昨日に引き続いて建物址周辺とかわらけ集中個所の精査を進める。

11月17日（木） 午前中雨で作業中止。午後小雨の中作業を行う。基壇状遺構上段の建物址から南側部分を掘り下げ、G-16を中心に石組みとそれに伴うとみられる小豎穴を検出する。

11月18日（金） 御手洗川に接する基壇状遺構の南側プランの検出作業を行う。また、E-18~21の平坦部の肩部に堆積する、木炭やかわらけの小破片を含む黄褐色土を取り除く。一方、E-21・22を中心に帯状に検出されているかわらけ集中区の範囲を確定する作業も進める。

11月19日（土） D列に検出されている葺石状遺構の細かな露出作業、及びかわらけ集中区実測

のためヤリ方測量の準備を行い、午後実測を始める。

11月21日（月） かわらけ集中区の清掃作業と写真撮影の後、遺物のレベリング作業を行う。また、土坑1・石組み状遺構・清1のセクション図を作成し、写真撮影の後B-25~27、A-26・27を調査する。

11月22日（火） 基壇状遺構の清掃作業を行い写真撮影を行う。また、26・27列を中心に昨日検出されていた石列を精査する。C-D-26・27を中心に釘が出土したほか、砾石等も発見された。

11月24日（木） 朝小雨のため作業ができるか心配であったが開始する。途中小雨となるが次第に回復する。27列以降の廃土置場に新たにグリッドを設定し、表土剥ぎを始める。地形の傾斜も手伝って作業は進み、A・B列に検出されていた石列が続いて検出される。またD-28・29にも石列が検出された。出土遺物では釘の出土が目立つ。

11月25日（金） 昨日検出された石列の精査とその周辺の調査を進める。また、E-26周辺の基壇状遺構の斜面部を精査し、露出不足であった葺石を露呈させる。

11月26日（月） 基壇状遺構全景の写真撮影のため清掃作業を行い、全景、建物址等の写真撮影を行う。また、C-26を中心にその周辺を一部掘り下げる。上部に遺存する礫を取り除くと、下部からはかわらけ片等が出土する。遺構の調査は本日で一応終了するため、調査終了後道具の片付けを行う。本日は茅野市郷土研究会の現地見学会が行われた。

11月28日（水） 写真測量に備えて全体の整備作業を行う。中央航業来跡して測量の基点設定作業を行う。これに合わせ、セクション、エレベーションポイントに標示板を設定する。その後、建物址を中心にエレベーション実測を行う。

11月29日（火） 霧柱の片付け作業は10時頃までかかる。11時には遺跡調査委員会の視察があり、視察後の委員会協議の結果、遺跡名を高部遺跡から磯並遺跡に変更すること、I-19周辺を拡張し、建物址の性格をより明らかにする作業を行うことを決定する。これを受け、発掘作業を進めたところ建物址に関わる礫石の一部と集石・かわらけが検出された。発見されたかわらけには重なった状態で出土したものもある。27~30列の写真測量実施。

11月30日（水） 天候不順の中写真測量を継続。これに伴い全面の清掃作業を行う。測量実施中に雨となる。

12月1日(木) エレベーション図の作成と集石1を半裁し、その性格を検討する。またI-18~20の拡張部について、先日検出された集石周辺の精査と平板測量を行う。

12月2日(金) 拡張部の写真撮影を行い、明日の航空測量に備えて対空標識の確認を行う。全面を清掃した後機材を撤収する。

12月3日(土) 午前10時30分に航測実施。測量完了後発掘区の再点検を行い、調査をこれで終了する。

## 第Ⅱ章 遺跡概観

### 第1節 遺跡の地理的環境

赤石山脈の北端を形成する守屋山・入笠山の山塊は、諏訪盆地を問にはさみ、その北にそびえる車山を主峰とする霧ヶ峰山地と対峙している。諏訪盆地の南西部に壁のように連なるこの守屋・入笠山系は、諏訪では一般に「西山」と呼ぶことが多く、その山腹は伊那谷側の南斜面と比べ急峻な地形となっている。その急傾斜な斜面を構成する筋の山脚は、フォッサマグナの西縁を画する糸魚川-静岡構造線の断層運動により、先端近くにやや平坦な地形を部分的に残し、その末端は断層崖となって諏訪盆地へにつきている。そしてそれらの山脚の間には、山腹に発する短い河川によって形成された小扇状地が、盆地の沖積地と接して各所に形成されている。西山の遺跡は、このような扇状地や盆地に近い断層崖上の平坦地に残されている場合が多い。

磯並遺跡や高部遺跡が位置する高部の扇状地は、守屋山を水源とする下馬沢川によって形成された、西山の扇状地としては比較的奥行の深い地形となっている。磯並遺跡はその扇頂部付近、谷の奥まった西側山脚のやや東に傾いた山裾に位置している。標高は約880mであり、ここからは谷のあいまに諏訪盆地の南東部から永明寺山・桑原山とさらにその先の霧ヶ峰の山塊が望まれる。

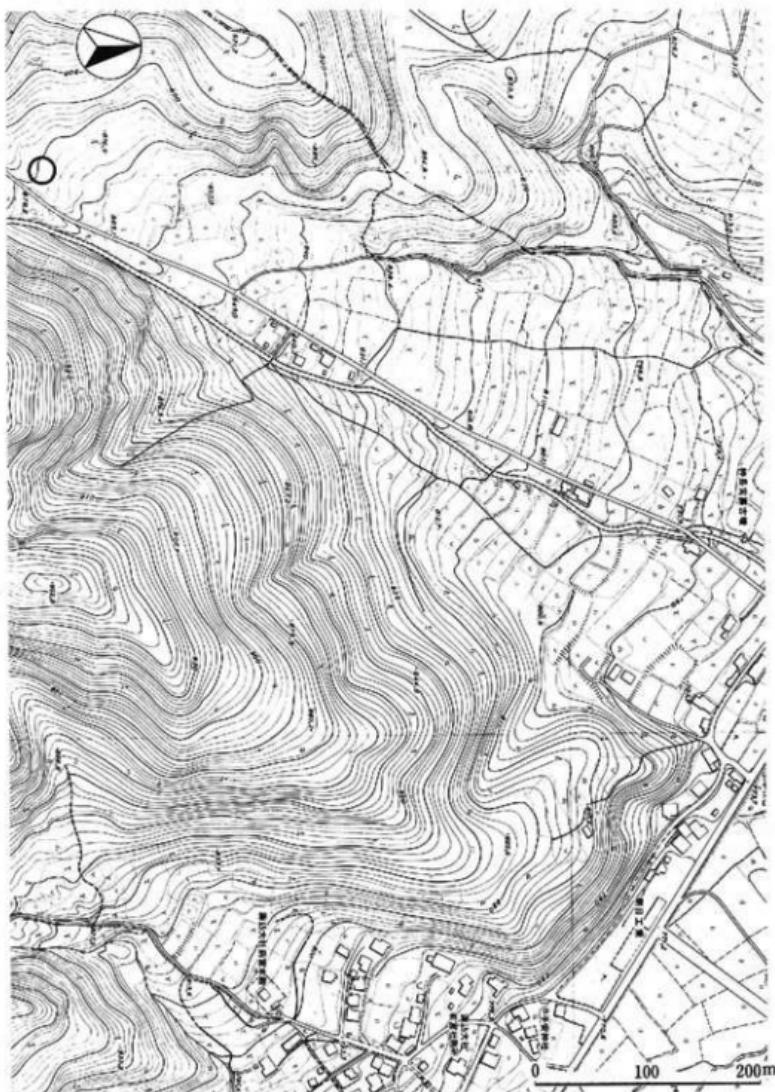
磯並遺跡は、一般に西山の遺跡が発見されている地形上の位置とはだいぶ異なった場所にある。そこは北に開けた山腹斜面の、しかも谷奥の急傾斜な山地を背負う傾斜地であり、日照時間も短く、やや薄暗い感を受ける人里離れた場所である。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

磯並遺跡が位置する高部の扇状地は、同じ守屋山麓の山裾に鎮座する諏訪大社上社本宮と同社前宮の、地理的にちょうど両者の中間の位置にあたる。上社本宮は、西側の山脚に形成された武居丘陵を越えた位置にあり、同社前宮は東側の火焼山を越えた前宮の小扇状地に位置している。

この高部の扇状地の扇端中央部には、諏訪神社上社の5官の筆頭であった神長官守矢家邸があり、かつてはその周辺に権祝・擬祝などの各祝家も居を構えていたといわれる。今でも守矢家と御頭みさぐじ社のほか5官祝家のみさぐじ社が祀られており、また顕堂には近世以降の大祝家の墓地、神長家の墓地、権祝家の墓地などがある。

一方、扇頂部の、今回発掘調査のなされた一帯は諏訪大社上社の末社磯並社の境内であり、境内には磯並社のほか穗股社、玉尾社、瀬社などが祀られている。また、磯並社の境内よりさらに南の奥深く入った西側の山腹には磯並山社が祀られており、これと下馬沢川をはさんだ対岸の山裾には神長官守矢家の夏直路の墓地がある。このほか磯並社の西山腹には小袋石が存在する。



第1図 遺跡位置図 (1/5,000)

小袋石は別名を舟つなぎ石とも言う鳥帽子形を呈した巨岩であり、磐座信仰の遺跡であると考えられている。高部にはもう1つの諏訪の原始信仰に関わる遺跡地がある。それは高部の扇状地と前宮の扇状地を画する火焼山の中腹山頂にある峰の漢であり、そこでは漢の神事が行われた。

ところで、この高部の扇状地周辺は以上のような史跡のほかにも遺跡や古墳の密集している地域である。昭和56年に行われた進入路の第Ⅰ期工事に伴う扇状地中央部の発掘調査では、绳文時代・古墳時代・平安時代を中心とする住居址群が発見され、おもに绳文時代中期と平安時代の集落の一部が明らかにされている。また、同年秋に行われた火焼山の峰の漢付近の発掘では、5世紀代の古墳と平安時代の墓塚が発見され、この地が古代の墓域であったことが明らかとなった。同様に、諏訪市域に入る西側の武居丘陵上も原始・古代・中世と続く良好な遺跡地である。

古墳は既に湮滅したものも含め、高部地区には9基の存在が知られている。火焼山の狐塚古墳を除くそれらの古墳は、ほぼ7世紀末から8世紀の初頭に位置するものであり、このうち神長官裏古墳は市の史跡に指定されている。

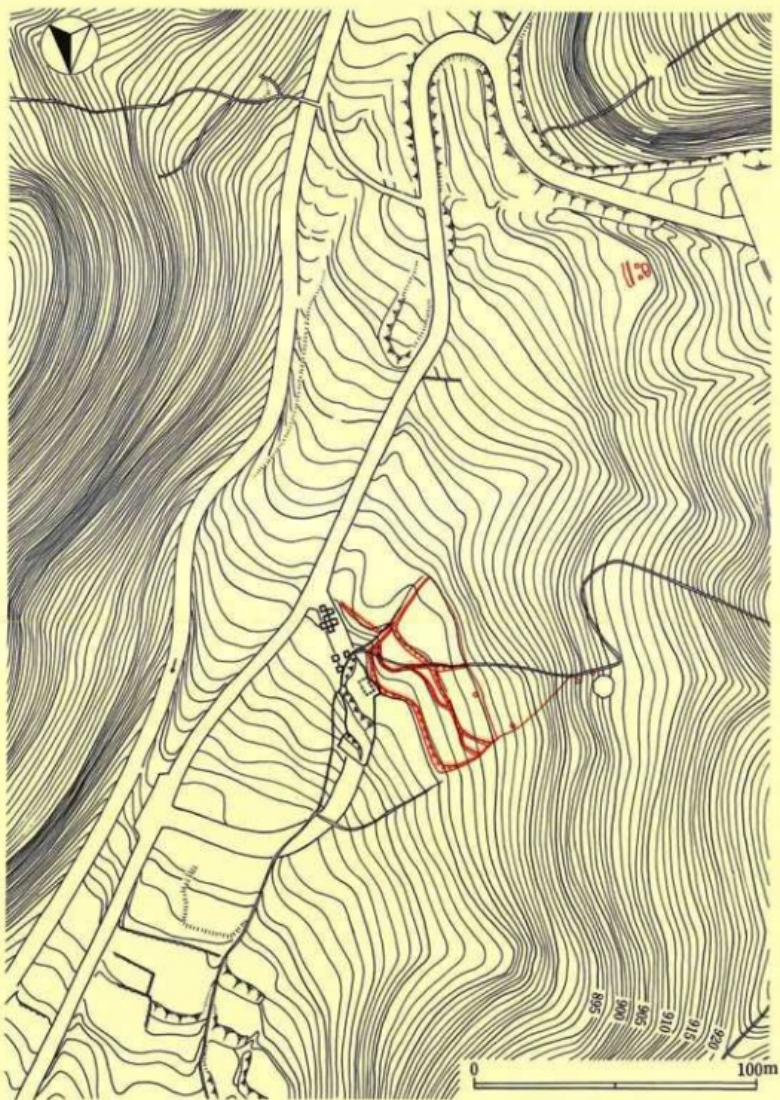
このように、高部の地は原始から人々の生活の場とされてきた土地であったが、古代以降は特に諏訪神社との関係が密接であった。かつ古東山道の枝突峠の直下に位置していることからも、古代から中世にかけて、諏訪の歴史上に重要な位置を占めた土地であったことがうかがわれるものである。

### 第3節 遺跡の現状と範囲

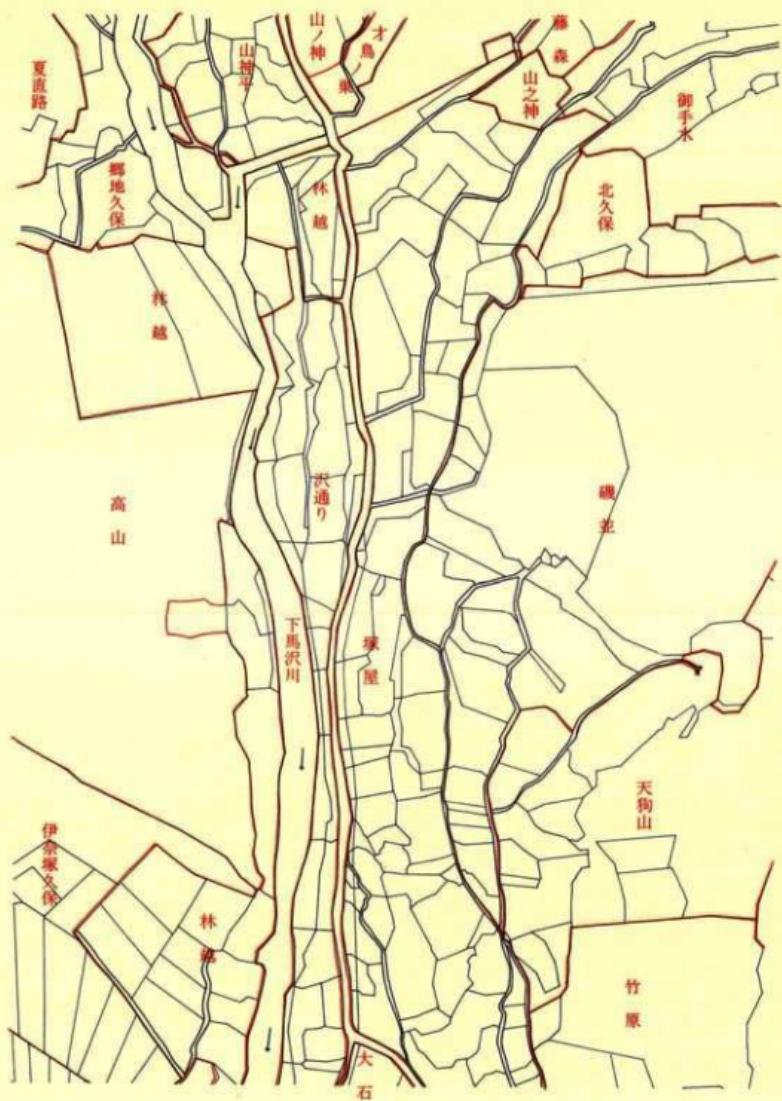
磯並社の鎮座する諏訪大社の社地には、長方形を呈する平坦な地形面が階段状に数段造成されている。それらの平坦な地形のあり方は、かつての地割の痕跡をとどめるものであろう。今回発見された基壇状遺構のあり方は、その点においても注目される。

ところで、基壇状遺構の裾を流れる御手洗川は、発掘区の北端付近で湧き出す水を集め、さらに小袋石付近から流れ出す水流と合して西沢川となって北流していく。この御手洗川と一方の小川で画された範囲は、小袋石や磯並社の鎮まる諏訪大社の社地を中心とする部分であり、磯並という小字名をもつ区域である。かつ平坦な段状を呈する地割状の地形を残す磯並社の境内地もこの区域の中にある。湧き水の集まる発掘区北端から下方の合流点付近は、既に水田として造成されていたこともあるが、遺物が発見されなかったことをみると、磯並遺跡の主体部は、2つの小川で画された区域の、段状の地形を残す場所を中心とする一帯が相当するものと思われる。

そのことと関連して注目されるのは、現況では確認できなかったものの、公園にある道の存在である。この道は西沢川に沿って登る高速道の枝道であると思われ、御手洗川を渡って磯並社の境内地へ行き着いている。今回発見された基壇状遺構と建物址は、この道の行き着いた場所に接続する南側の土地である。したがってこの道のあり方と遺跡の主体部との関係で示される一定の範囲は、天正の占園に描かれた建物群で構成される空間的な広がりと、あるいは重なる蓋然性もあるのではないかと思われる。



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区 (1 / 2,000)



第3図 遺跡を中心とした小字図

### 第III章 遺跡の層序

層位は地番625付近と地番576-1付近においては御手洗川を境に異なっている。それは地番625付近が下馬沢川により形成された扇状地形に含まれるのに対し、地番576-1付近は西側山脚の東麓部に当たることにも基づいてよい。

セクション観察は、御手洗川を挟んだ南側では地番625においてE-3北壁面、F-4南壁面で行った。

第1層……表土層で現在の耕作土層に当たる。

第2層……礫を混入する赤茶褐色土層で、径約5cm大の礫が混入する。土層の状態から流土により形成された層である可能性が強い。

第3層……暗黄褐色土層で、第2層に比べ礫の混入も少なく、その大きさも指頭大以下のものである。粘性を有し、炭化物粒子を含有する。

第4層……黄褐色砂礫土層で、指頭大前後の小礫・砂を含有する。粘性はなく、ザラつく感を受ける土層である。

第5層……砂礫の混入のない黒色土層である。上層内よりかわらけ小片、天祐通寶、元符通寶が出土している。出土した天祐通寶(1017年初鑄)、元符通寶(1098年初鑄)から、第5層以降は11世紀以降に堆積した層であるとみられる。とくに中世の遺物包含層である第5層は西側へ薄くなり、御手洗川につづく地番623-3では検出されていない。

第6層……第2層と同様な性質をもつもので、色調は茶褐色を呈する。

第7層……茶褐色土層である。土層下部に径約10~40cm大の礫が堆積しており、あるいはこの層が地山層となるのであろうか。

地番625は高部扇状地の扇頂部付近に位置している。第2・4・6層からは、これらが氾濫等により形成された土層であるとの所見を得た。そして基盤と思われる層までは、これらの土層の間に遺物包含層を挟んで約140cmと厚い土砂が堆積していた。第2・4層は第5層から古錢が出土しているため、中世以降の土砂堆積層と考えられる。遺物の含有層は第1層と第5層で、第1層から近世染付磁器片、第5層から中世錢貨・かわらけが出土している。この他にも第3層に炭化物の混入が見られる。出土遺物はないが、第3層もあるいは何かからの文化層として捉えるべきであろうが、その性格は判然としない。

地番576-1においては地番625と異なって土層堆積が約20cm前後と薄かった。基本層序の観察はH・G・F・E・D・C-18北壁、E-16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27西壁付近で行った。

第1層……表土層。色調は黒褐色を呈し、小礫・かわらけ小片を含有する。

880.35



E-3 - F-4

880.15

2

5

C-H-18

3

4

1

2

879.5

2'

1

2

E-16-27

E-16-27

879.16

1

2

C-E-21

2'

1

C-F-27

## E-3 - F-4 セクション

1. 表土層
2. 赤茶褐色土層（流土）
3. 暗黄褐色土層（炭化物を含む）
4. 黄褐色砂礫土層（流土）
5. 黒色土層（かわらけ・宋銭を出土）
6. 茶褐色土層（流土）
7. 茶褐色土層

## C-H-18, E-16-27, C-F-27, C-E-21セクション

1. 表土層
2. 黄褐色土層
- 2'. "
3. 明褐色土層（埋土）
- 3'. "（埋土、3層より黒味が強い）
4. 埋層（表詰め焼）
5. 黄褐色土層（埋土）
6. 黑黄褐色土層（埋土、5層より黒味が強い）

0 2m

第4図 地質の層序 (1/60)

第2層……黄褐色土層。色調は黄色の強い黄褐色を呈する。小礫やかわらけ片を含有し、E-20・21・22グリッドに位置するかわらけ集中区もこの層内に包括される。

第3層……第2層よりも黄色味の少ない明褐色土層である。小礫の含有は部分的に異なり、D列では含有量が少なく、E列では多い。小礫の他にかわらけ小片をわずかに含む。

第4層……径約5~10cm大の礫で形成される土層である基壇状造構の土止め石列の裏詰めに關わるものと思われる土層である。

第5層……黒色土の微少ブロックを混入する黄褐色土層である。粘性が強く炭化物の微粒子も若干含有している。

第6層……第5層よりも黒色が強いものである。この付近はちょうど遺構が検出された部分に当たり、第1・第2層を除き、第3~6層については基壇状造構の構築に關わる人工的な土層である。

遺物の含有層は第2層で、かわらけ小片が多量に含まれていた。第3層にも若干のかわらけ片が検出されたが、これらは基壇状造構の構築に關わる盛土内に混入したものとして捉えられよう。

## 第IV章 遺構

### 第1節 中世の遺構

発見された遺構は、礎石を持つ建物址、石開い遺構、土坑、石列、円形集石、かわらけ溜り、基壇状遺構等である。これらの遺構の個々がすべて同時に存在したものであるかについては不明な点もあるが、基壇状遺構に付随する形で構成されているそれら各遺構の全体的な方から推察すると、各遺構は各々に独立した存在としてではなく、基壇状遺構を中心とする構築物全体の各部分、ないしは施設としては捉えられよう。したがって石列についても基壇状遺構を構成する1つの遺構として取り扱う。この基壇状遺構の構築により地割りされた平坦面は、大きく2つの基壇面に分けることができ、以下、基壇状遺構1と基壇状遺構2の各基壇面ごとに説明を加えることにする。

#### 1 基壇状遺構1とその内部の遺構

基壇状に構築されている最も広い区域である。平坦な削平面は10×16mの不整長方形の平面形を構成し、面積は約160m<sup>2</sup>ある。平坦面には礎石をもつ建物址1、溝1、溝2、かわらけ溜り、土坑1、石組み状遺構1が構築されている。

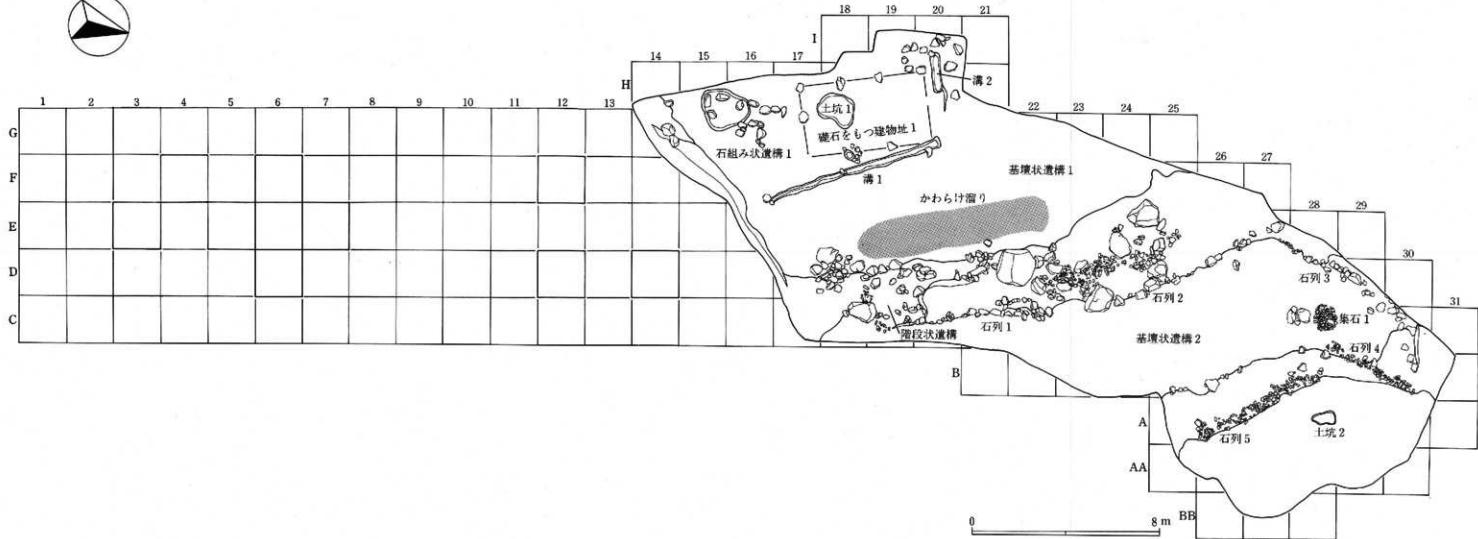
##### 1) 基壇状遺構1（第5図 図版第3）

**検出状況** E-16~F-24グリッド周辺に比較的平坦な地形面が残されており、南側から東側へまわって続く段状の地形と関連して人為的な地割りがなされていることがうかがわれた。遺構確認のために表上剥ぎを行ったところ、当初の予測どおり、全面が人為的に構築された基壇状の地割り遺構が検出された。

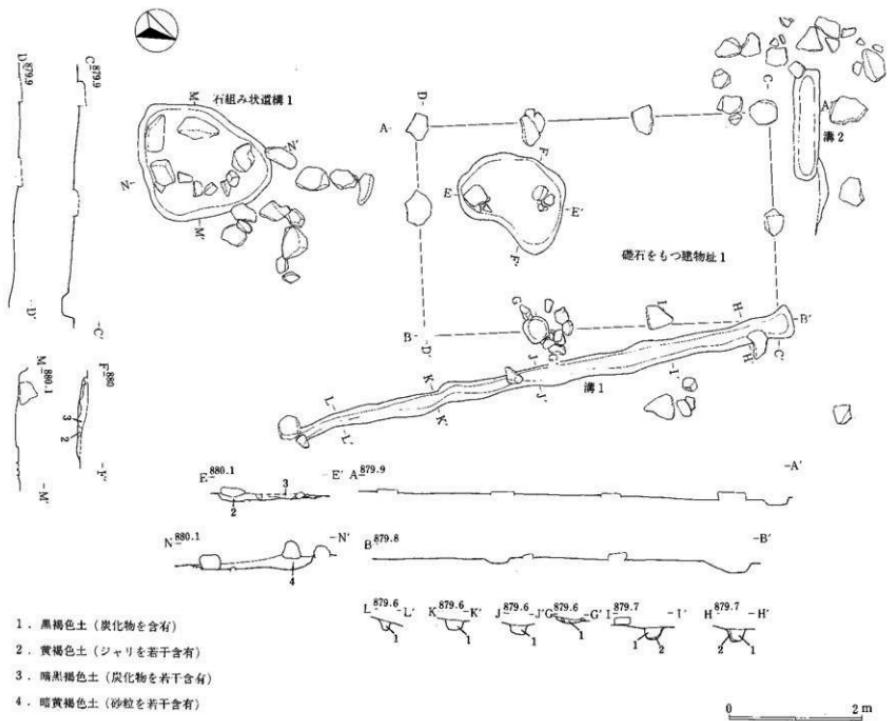
**遺構の構造** 平坦面は10×16mの不整長方形を呈し、面積は160m<sup>2</sup>を測る。検出された2枚の平坦面の内では最も広い。西南側が山腹となるため、東北側に開けた緩やかな傾斜をもつ。また南東側の裾部は御手洗川となるため傾斜している。

平坦面は山腹から延びる山裾の緩斜面を削平し、さらに下面の傾斜部に明褐色土（基本層位の第3層）を盛土して土壌を構築している。

また、土壌斜面の崩落を防ぐために、斜面裾部に石列を設けて土止めとし（石列1・2）、さらに斜面部に比較的平坦な礎を貼り付けるように積み上げながら配し、斜面部の葺石としている。特にD-18・D-23グリッド周辺にこの傾向が顕著である。土壌斜面部にみられる巨岩は周辺に産出する礎岩が多い。直接地山より露出しているものもあるが、浮いている状態のもの、また人為的に斜面部に移して土止め石として利用したことがうかがわれるものもある。殊にC-18グリッドの巨岩は裏詰め石が認められるものであり、相当に大規模の土木工事が行われたことがうかが



第5図 発掘区内遺構分布図 (1/160)



第6図 磚石をもつ建物址 1、溝 1、溝 2、石組み状遺構 1 (1/60)

われる。このような土壇の構築方法をとる遺跡として、近くでは源訪市旧御射山遺跡の土壇状遺構を指摘できる。

**遺物の出土状況** 半坦面からは、かわらけを中心多くの遺物が検出されている。

E-20・D-26・C-26 等より縄文時代の遺物が若干検出されているが、これらは土壇構築時に混入したものと考えられ、山裾に位置していた縄文時代の遺跡を中世の遺構が破壊した結果として生じたものであろう。かわらけ・鉄釘等遺物の分布状況については後章で述べるが、基壇状遺構1の平坦面からは多量の遺物が出土している。特にそれらは建物址を挟んでその前面と背後の位置に集中する傾向がみられた。

## 2) 碓石をもつ建物址1 (第6図 図版第3)

**検出状況** H-18・G・H-20グリッドより不整四角形で平坦面をもつ礎が検出され、これらが礎石ではないかと思われた。そして周辺の精査の結果、他にも礎石が検出され、ここに礎石を有する建物址が存在したことが確認された。しかし建物址の一部が調査用地外にまで延びており、建物址の規模については不明であった。11月29日の遺跡調査委員会において建物址の範囲確認の必要性が協議され、I-19・20グリッド周辺を拡張した結果、桁行、梁行の把握をなしえた。なお、建物址の礎石の一部はすでに耕作等により抜き去られていたが、遺存するものから建物址の規模等については推定が可能である。

**遺構の構造** 建物址の規模は桁行3間(5.3m)、梁行2間(3.1m)、長軸方向N-27.5°-Wで、長軸は基壇状遺構の長軸方向とはほぼ一致する。さらにこの長軸方向、すなわち基壇状遺構の長軸方向も地形のコンタに沿っていることも付記しておきたい。この建物址の土台構造は礎石と掘立柱穴とを併用したものである。検出された礎石は全部で7個あり、そのうち東辺の中央部のそれは移動している。礎石はすべてこの付近より产出する、平坦面をもつ礎を利用しておらず、柱を据える面にこの比較的平坦な面を利用している。礎石の据え付けは比較的簡単なようで、根詰めの繩等は検出されなかった。礎石の他に掘立柱穴が1ヶ所検出されている。P<sub>1</sub>は35×40cm、深さ5cmの割合浅めのものである。柱底の検出はできなかったが、柱穴内には木炭粒等を含有する黒褐色土が堆積していた。また、柱穴の脇には柱穴を支えるために集められたものであろうか、9個の礎が半円形に並べられていた。

所謂天正の古図には、礎並社の周辺に舞屋・五間廊等かなりの数の建築物が描かれており、今回発見された建物址も、あるいは天正の古図に描かれたそれらの建築物に関わる遺構である可能性もあるのではなかろうか。

**遺物の出土状況** 建物址と直接関連づけられる遺物は検出されていないが、I-18グリッドよりI-20グリッドにかけては、かわらけの出土量が多い。それらは上層では摩滅したかわらけの小破片が著しく、下層になると量的には少なくなるが、やや完形に近いものが出土するという状況を示していた。またH-19グリッドからは正位の状態でかわらけの壊が出土しており、その状態はあたかも建物址の床下に埋置された状態を思わせるものであった。また、かわらけの分布

状態をみると、建物址の内側には比較的稀薄であるが、建物址の全面と背後に出土が多いのであり、かわらけは建築址の外側に集中している傾向がある。一方の鉄釘は、建物址と離れた位置ではなく、むしろ礎石付近に集中して出土している。

### 3) 溝1 (第6図 図版第3)

**検出状況** 建物址周辺を精査中、木炭粒子・かわらけ小片を含む黒褐色土の落ち込みが、G-20からF-17にかけ帯状に延びているのが検出され、本址の存在が明確となった。

**遺構の構造** 溝はN-36°-W方向に走り、基壇状遺構及び建物址の長軸方向とは若干ずれている。溝は西側が高く東側に低くなり、ちょうど御手洗川に向かい傾斜していく形となっている。溝の幅は30cm、深さは20cmを測り、全体に一定した掘り方で構築されている。溝1はその西端が建物址礎石列の北隅と位置的に重複する関係にある。礎石が失われているため新旧関係を把握することはできなかった。しかし溝1は後述する溝2と共にL字状の配置を構成しており、かつ建物址の外周に位置することから建物址に関わる施設であることは確かであろう。長軸方向に若干のずれが生じている点については、建物址の建て替えを示すものと考えられ、その点において溝1・2は旧建物址に伴う遺構である可能性が考えられるのである。

**遺物の出土状況** 溝からは器形をうかがえるようなかわらけ等の遺物は出土していない。遺物はすべてかわらけの小片である。

### 4) 溝2 (第6図 図版第3)

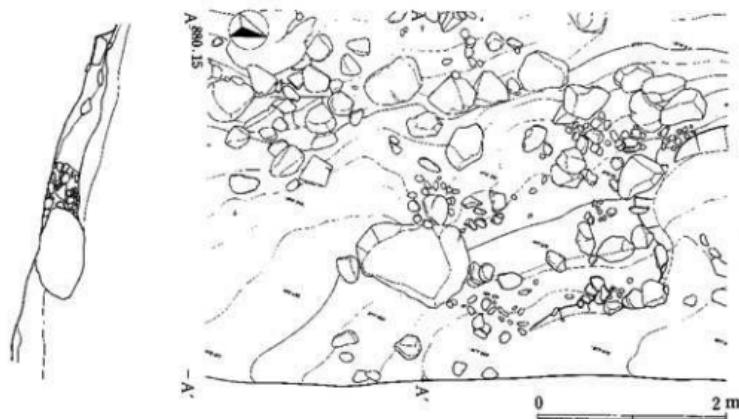
**検出状況** 建物址の範囲を確認するために拡張されたI-20グリッドに、他の部分よりも色調のくすんだ落ち込み部分が帶状に検出され、本址の存在が明らかとなった。

**遺構の構造** 溝は建物址の西辺に沿っており、基壇状遺構、及び建物址の長軸とほぼ直行する形をとる。最大幅40cm、長さ1.7m、深さ15cmで、プランは溝1に比べるとやや幅広で短く、かつ深さも浅い。溝は南西側に高く北東側にわずかに傾斜する形をとり、ちょうど溝1に向かって低くなるように設けられている。溝1の項で記したように両溝の位置関係から考えると、溝1・2は別々の遺構としてではなく、両者一体となってL字形を構成するものとみることができよう。建物址との関連については溝1の項で記してある。

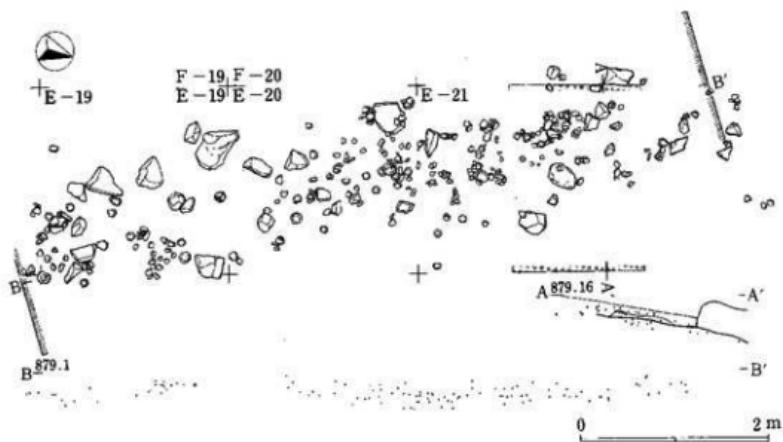
### 5) 階段状遺構 (第7図 図版第6)

**検出状況** 基壇状遺構の斜面部東側隅の大礎と、D-19グリッドに位置する基壇状遺構肩部にやや大きめの礎が直線上に並んで検出された。そのため、この部分について注意深く調査したところ、基壇状遺構の斜面部が他の部分とは異なり、傾斜しながら階段状に構成された若干の張り出しをもつことが確認された。

**遺構の構造** 本址は基壇状遺構の基壇斜面の東側でややコーナーに寄った位置に設けられている。基壇の斜面部を部分的に地山まで抉るように削り出し、土を盛って小礎を詰め、1.5×2.0mの方形の張り出しを作る。斜面部の削り出しは張り出し部の北東側が特に顕著である。この張り出し部の斜面はやや大きめな礎を横に並べ4段の階段状に構築されている。基壇状遺構の肩部に



第7図 階段状遺構 (1/60)



第8図 かわらけ溜り (1/60)

位置する礫は最も整然と配されており、用いられている礫も径約50cm前後と比較的大形のものである。そしてそれらの礫は礫の長手部分を出すように据えられている。これ以下の3段は最上段ほど大形でそろった礫を用いておらず、かつその据え方も雑然としており、いかにも崩れたような状態を呈している。

この階段状を呈する遺構は、建物址の長軸方向に直行するようにその真正面に位置している。他の基壇斜面部にこのような遺構が検出されていないことから、この部分が基壇状遺構、あるいは建物址への出入口部として造られたものと捉えることができよう。

**遺物の出土状況** 本址に直接関わるような遺物の出土はないが、本址上の基壇肩部からかわらけが集中して検出されている。また、鉄釘数点が周辺から出土しており、本址に関わりをもつものであろうか。

#### 6) 石組み状遺構 1 (第6図 図版第8)

**検出状況** G-16グリッドを中心に礫がある程度まとまって検出された。そしてそれらの礫の配列にはある程度の規則性が認められたことから、石組み状遺構として取り扱った。

**遺構の構造** 山礫を円形に配し、偏平な面を立てるように据えて石囲い状を構成する。石組み下には不整形な浅い掘り方が検出された。掘り方の規模は1.8×1.9mで東側がやや張り出す不整圓形を呈する。深さは13cmと浅く、断面形は皿状を呈し、かわらけの細片を含む砂状の暗黄褐色土が堆積している。

なお、ピットの北側にも同様な配石様の礫が統一して検出されている。しかし、それらは基壇面に露出しているものであり、ピット上に設けられていた本遺構との関連性については判然としない。

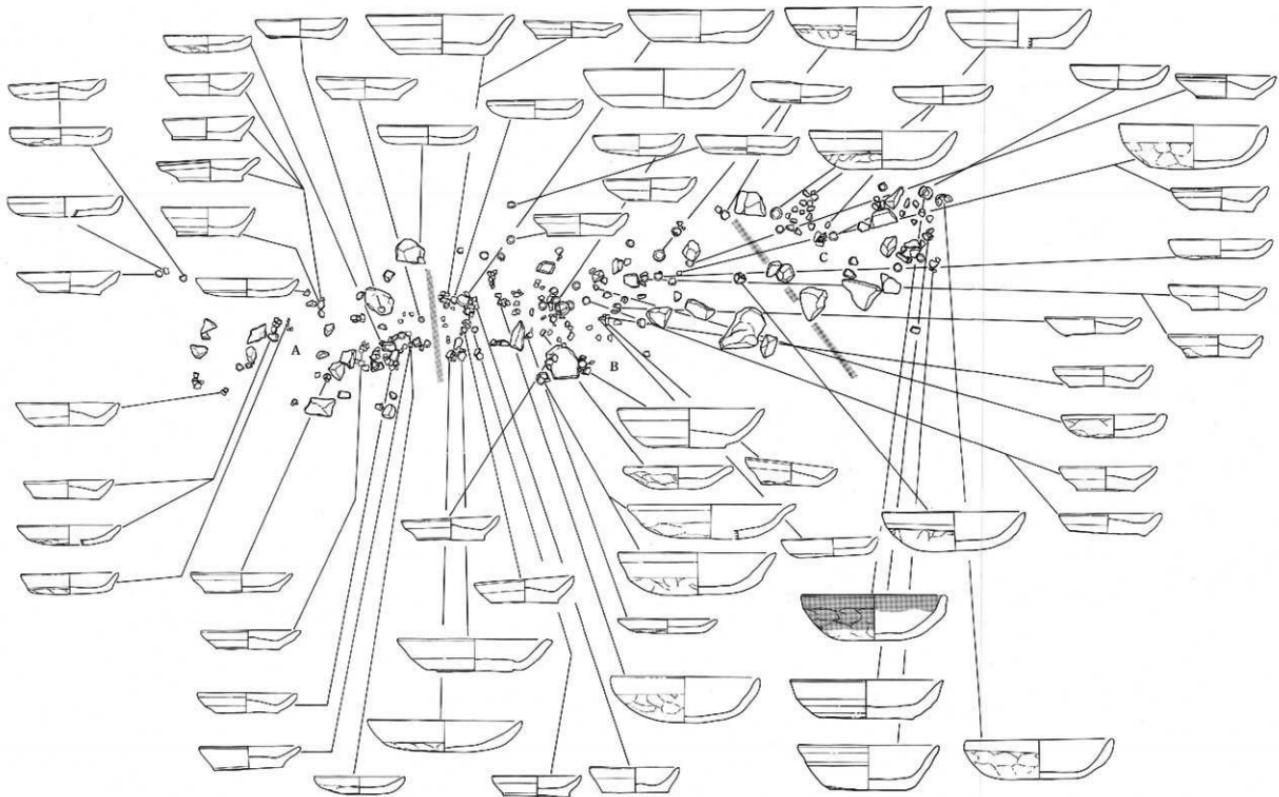
#### 7) かわらけ溜り (かわらけ集中区) (第8・9図 図版第7)

**検出状況** E-19、E-21グリッド周辺の第2層よりかわらけ細片及び炭化物が帶状に検出された。検出当初は遺構としての認定が難しく、基壇面まで掘り下げてその性格を明らかにすることとした。調査を進めたところ夥しい量のかわらけが礫と一緒に検出され、かわらけ溜りとして本址の存在が明確となった。

なお、検出当初は本址の名称を「かわらけ集中区」として取り扱ったが、報告書作成段階ではその性格から「かわらけ溜り」と改名した。かわらけの観察表等で集中区との記載のあるものは本址からの出土である。

**遺構の構造** 本址はE-19グリッドからE-22グリッドに及ぶ、1.2×7.5mの範間に多量のかわらけが礫や炭化物と共に検出されたものである。位置は建物址の前庭部で、基壇状遺構の肩部にあたる。かわらけ溜りの主軸方向はN-34°Wで建物址のそれとは若干ずれるものの、ほぼ並列するとみてよい。

調査当初、かわらけが累々と出土する状態から、この部分に構造の掘り方が設けられ、その中にかわらけが集積されたのではないかとの所見も得られたが、かわらけの集積状態が基壇の肩部



第9図 かわらけ遺跡の遺物出土状況

に向かいやや崩れている傾向を示す点、かつ土層堆積の状況等から掘り方はもたないものと考えられた。

**遺物の出土状況** かわらけと共に出土する礫は60点以上検出されており、それらはすべて付近に産出する小形の角礫である。かわらけとそれらの礫の出土状態は、かわらけが礫に押し潰された状況を示すもの、また逆に、かわらけがそれらの礫の上に乗るような状態をとるものなど、かわらけと礫と一緒に廃棄されたことをうかがわせるには十分な関係を示していた。なお、かわらけのうち完形に近いものは、不規則ではあるが累積した状態で出土しており、逆位のものに比べると正位の状態で出土しているものが多かった。

一方、かわらけ溜りの周囲には、これを囲むように比較的大形の礫が検出されており、あるいはこれらの礫のあり方が、かわらけ溜りの範囲をある程度示すものであるのかもしれない。

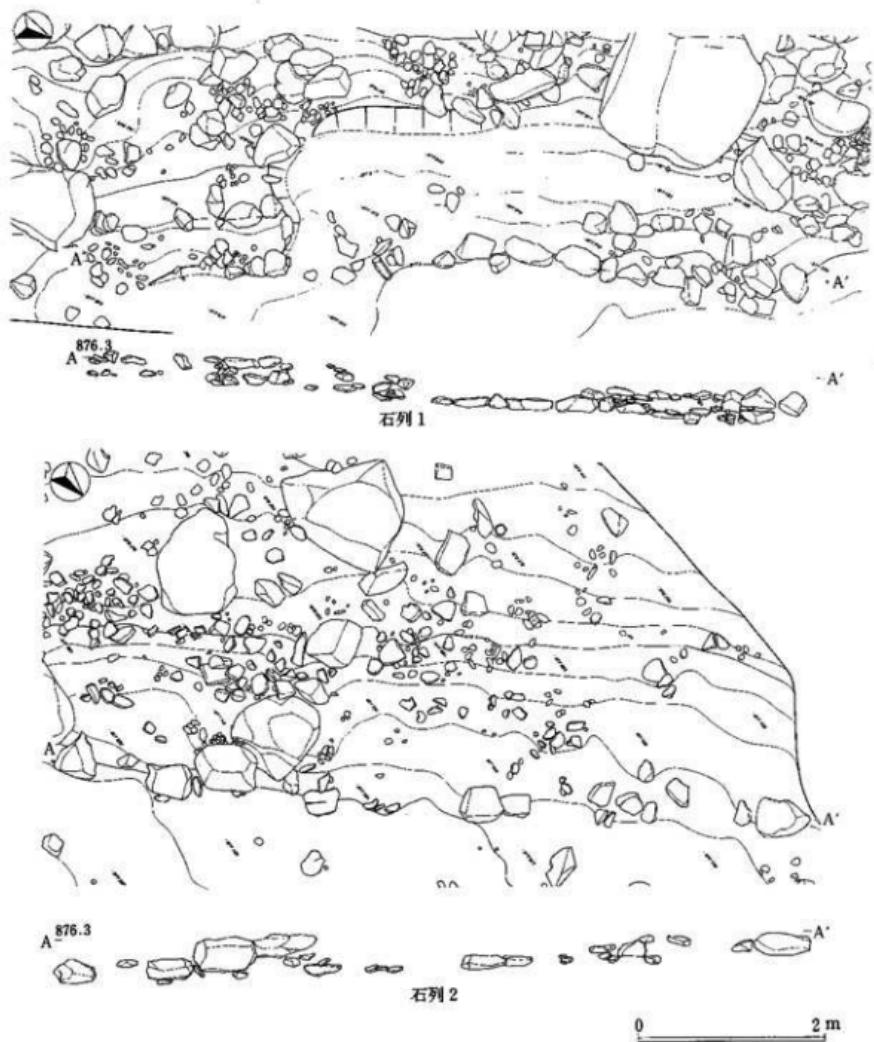
ところで本址からは約150個体以上のかわらけの破片が出土している。しかしあわらけ以外の遺物は一点も出土していないという特徴がある。本遺跡から出土したかわらけで、今回図示できたもののうちの96点がこのかわらけ溜りより出土している。したがってその点においても、このかわらけ溜りにいかに多数の完形に近いかわらけが遺存していたかがうかがわれる所以である。出土したかわらけの分布は大雑把に3グループに大別することが可能である。AグループはE-21グリッドを中心とする範囲であり、小形のかわらけ(B)で構成されている。手捏ね成形によるもの(I群)は少量であり、ロクロ成形によるもの(II群)が主体となる。BグループはE-20グリッドを中心とする最も広い範囲にわたっており、特に集中する部分が3ヶ所認められる。かわらけは大形のもの(A)と、小形のもの(B)が混在しており、かつ、手捏ね成形によるもの(I群)とロクロ成形によるもの(II群)も混在している。CグループはE-19グリッドに位置している。その規模はAグループと類似しており、その中でもかわらけは2ヶ所に集中して出土している。かわらけは大形(A)で手捏ね成形によるもの(I群)が中心となり、中には唯一使用痕(油煙)のみられるものが含まれる。

このように、かわらけ溜りは遺物の分布状態とそれを構成する器種のあり方から大きく3グループに分けてみることができるが、遺物の出土状況や遺物の状態等からみると、それらの3グループはそれぞれに大きな差を有するものとは考えられず、むしろ同時期に構成され、残された遺構である可能性が高いものと思われる。

#### 8) 土坑1 (第6図 図版第8)

**検出状況** 本址は建物址を精査中、G-18グリッドに炭化物を含むシミ状の掘り方が検出されてその存在が明らかとなった。

**遺構の構造** G・H-18グリッドに位置し、ちょうど建物址の南側内部に設けられた形となっている。平面形は $1.4 \times 1.6$ mで東側がやや突出する不整橿円形を呈する。土坑の掘り方は検出面から10cmと浅く、壁の立ち上がりも不明確である。覆土は若干の炭化物が混じる暗黒褐色土である。底面の北側には地山石が出ており、一方の南側には人頭大の角礫が検出面に頭部を出して



第10図 石列1、石列2 (1/60)

遺存していた。

土坑の位置から建物址の掘立柱穴に関わる掘り方ではないかと考えられたが、その位置と規模からみて柱穴とは異なるものであろう。また建物址の床下の何らかの施設とも考えられるが、石組み状遺構1とも関連しあるいは建物址とは時間差をもつ施設であるのかもしれない。

**遺物の出土状況** 遺物は出土していない。

#### 9) 石列1 (第10図 図版第4)

**検出状況** 基壇状遺構の北東裾部C-19~22グリッドにかけて、基壇裾部のプランを追求していく過程において検出された。

**遺構の構造** 本址は基壇状遺構裾部の外護列石状となる石列である。石列は50cm前後の長方形礫を一段の長手積みにし、南東方向から北西方向に向かい約10m続く。礫は基壇裾部に疊間の隙間を置かないようにして据えつけただけのもので、裏詰め石や掘り方等をもたないごく簡単なものであった。

**遺物の出土状況** 本址に直接関わるような遺物は出土していない。

#### 10) 石列2 (第10図 図版第2)

**検出状況** 基壇状遺構の北側裾部D-23~25、E-26・27グリッドに配列されたように点在する礫が認められ、これを本址とした。

**遺構の構造** 基壇状遺構の北側裾部に位置する石列である。石列1に比べると用いられている礫は不揃いで、かつ礫の配列も不規則であり、雑然とした感を受ける。しかし、礫の置き方は長手積みのようである。石列は南東方向から北西方向に約16m続くが、部分的に寸断されている。本址も石列1と同様に裏詰め礫や、掘り方をもたない簡単な構造のものである。

**遺物の出土状況** 本址に直接関わるような遺物の出土はない。

## 2 基壇状遺構2とその内部の遺構

基壇状遺構2は基壇状遺構1を取り巻くように、基壇状遺構1の北側の一段低い地形に構築されている。基壇状遺構1に比べると平坦面が狭く、全体としてL字形に近い平面形を呈している。基壇の平坦面は4×12mで、48m<sup>2</sup>を測り、この中に集石1、石列3、石列4、石列5が構築されている。

#### 1) 基壇状遺構2 (第4図 図版第2)

**検出状況** 基壇状遺構1の斜面裾部の精査に伴い、斜面の裾部から続く平坦な面が検出され、本址の存在が明らかとなった。調査前にも地形のあり方からこの部分については人為的な地割りがなされていることが想定されたが、調査の結果基壇状遺構1に関連するものであることが明らかとなった。

**遺構の構造** 基壇状遺構1が比較的広い長方形を呈すると思われる平坦面をもっているのに対し、本址はやや狭く帯状でL字形の構成を持ち、面積約48m<sup>2</sup>を測る。平坦面は山裾の斜面を削

り、基壇状遺構1と同様に一方の斜面に盛土をすることで平坦面を広く造成している。発掘区北東隅に位置する平坦面の北側は若干の傾斜をもち、この部分が入口状を呈している。土壇斜面の肩部と裾部には土砂の崩落を防ぐために石列（石列4・5）が設けられている。基壇状遺構1の斜面にみられたような葺石はみられず、基壇状遺構1に比べると基壇の構築は概して簡略化されているように思われる。

**遺物の出土状況** 遺物は平坦面の全域から検出されているが、平坦面中央から比較的多く出土している。中でも特に鉄釘はある一定の範囲に集中する傾向が認められた。このため建物址の存在も考えられたが、礎石や掘立柱穴等は検出されなかった。平坦面のかなりの部分が耕作等により攪乱されていることから、礎石はすでに抜き去られたものと考えられる。

## 2) 集石1（第11図 図版第9）

**検出状況** C-28グリッドに検出された。また、本址に接して南東側には径約60cmの扁平礎2点が敷かれた状態で検出されている。

**遺構の構造** 集石は径1mの円形を呈する。礎は基壇状遺構2の平坦面より20cmほど浮いた位置に検出され、この間には暗黒褐色土と砂粒を含む暗褐色土が堆積している。集石は径10cm前後の角礎によって構成されているが、集石中央部やや北寄りの位置には径30cm前後の人頭大の礎が1点置かれていた。集石は断面が皿状を呈し、平面形が整った円形を呈して崩れた状態にはないことからみると、集石は円形の掘り方に礎を集めた遺構であるともできる。なお、本址が基壇平坦面上に浮いた状態で検出されていることは本址が基壇に直接関わる遺構ではない可能性を示している。また、本址南東側の扁平礎の配石は、レベルからみて本址に伴うものではなく、むしろ基壇平坦面に伴うものと思われる。

**遺物の出土状況** 遺物の出土はない。

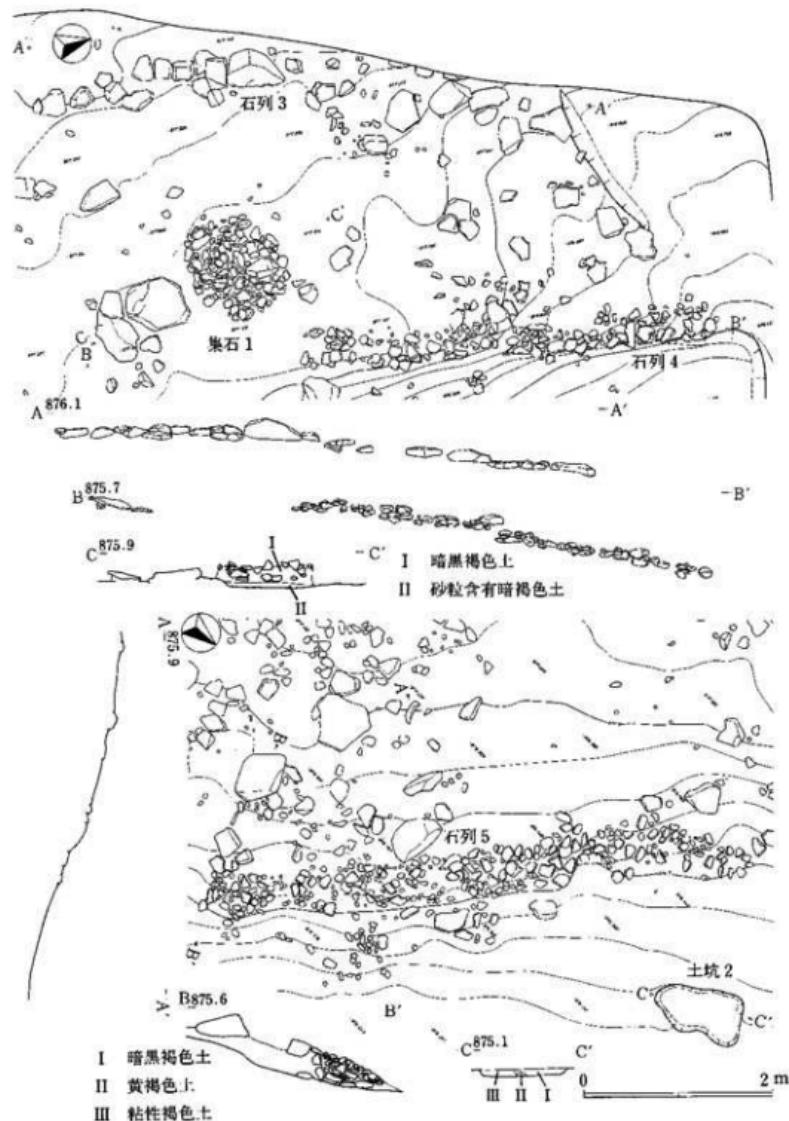
## 3) 石列3（第11図 図版第9）

**検出状況** 基壇状遺構の西側E-28からD-29、C-30にかけてやや不規則な石列が検出され本址の存在が明らかとなった。

**遺構の構造** 石列1・2・5が基壇状遺構の裾部に、そして石列4が基壇状遺構の肩部に位置していたのに対し、本址は明確な形で基壇状遺構に伴う石列としては確認されなかった。ただ調査区外に石列と平行するように地割り状の地形が認められることから、本址はこの地割り状地形の外護的な石列になるものと思われる。

石列は南北方向に約5.5m続く。礎は扁平な長方礎を用い、やや乱れた状態の長手積みが一段なされている。礎はその配置が列をなすよう直線的に置かれているが、北端部は攪乱のためか流れてしまっている。礎の据え方は礎の平坦面を直接基壇状遺構の面上に直接置いただけの簡単なもので、裏詰め礎等はみられなかった。

**遺物の出土状況** 本址に直接関わるような遺物は出土していない。



第11図 石列3、石列4、石列5、集石1、土坑2 (1/60)

#### 4) 石列4 (第11図 図版第9)

**検出状況** 本址は基壇状遺構の北西部平坦面を調査中、この部分の肩部より検出された。

**遺構の構造** 本址は石列3と平行し南北方向に約4.5m続き、北側へ傾斜している。石列1・2・5が基壇状遺構の肩部に構築された石列であるのに対し、本址は基壇状遺構の肩部に構築された石列である。また、石列1・2・3が比較的大きな長方形礫を長手積みにしていたものに対し、本址は石列5と同様に10cm大の小礫を帯状に集めて敷いたもので、礫の積み方に規則性はみられない。

本址は基壇状遺構構築の際にその肩部を保護する目的で設けられたものと思われる。掘り方は未確認であるが、やや浅い溝状の掘り込み内に礫を集めて構築したものと思われるのである。

**遺物の出土状況** 本址に直接関わるような遺物は出土していない。

#### 5) 石列5 (第11図 図版第10)

**検出状況** 基壇状遺構の裾部に位置している。東西約6mの石列であり扁平礫を敷いた上に石列4と同様に小礫を帯状に集積した遺構である。石列の構築は基壇状遺構の構築と同時に行われたようであり、石列1・2・3と同様に斜面部の埋め土の崩落を防ぐ役割を果たした施設であったと思われる。本址は割合丹念に構築されており、基壇状遺構の斜面造成時に裾部に浅い掘り方を設け、この中に扁平は礫を据え、さらにこの上面に小礫を詰めるという方法をとっている。

**遺物の出土状況** 本址に直接関わるような遺物は出土していない。

#### 6) 土坑2 (第11図)

**検出状況** 本址はA-28グリッドより発見された。

**遺構の構造** 0.6×1mの不整縁円形を呈し、深さは10cmと浅く、壁の立ち上がりも不明瞭である。内部には暗褐色土と粘性褐色土が自然堆積を思わせる状態にあった。

**遺物の出土状況** 遺物は出土していない。

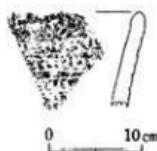
## 第V章 遺物

### 第1節 繩文時代の遺物

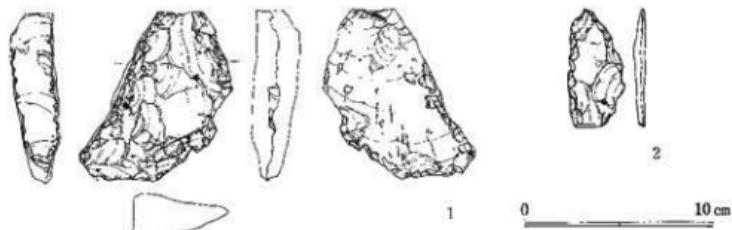
繩文時代の遺物は、繩文土器1、剥片石器2、石鏃1、打製石斧5、磨製石斧1が検出されている。すべて遺構に伴うものではなく、基壇状遺構の埋め土等より出土している場合が多い。これより推測すると、基壇状遺構を構築する際に繩文時代の遺物の包含層を破壊し、中世の遺構が構築されたと考えることができる。

#### 繩文土器 (第12図1)

口縁部破片1点がE-20より出土している。口縁部は平縁をなすと思われ、口唇部がやや厚くなる。文様は4条の半截竹管状工具による平行沈線を施し、後に竹管状工具を用いた爪形文を施している。色調は茶褐色を呈し胎土中には砂粒及び雲母を含む。文様等より繩文時代前期後半の諸磯期に比定される。



第12図 出土土器  
(1/3)



第13図 出土石器(1) (1/3)

#### 剝片石器 (第13図1・2)

2点出土している。1は幅のある縦長状の割合夾雜物を混入する黒曜石剝片を素材としている。母岩からの剝離角度は80度で、主要剝離面にポジティブなバルブを残す。刃部は剝片の一辺にある。刃部調整は丹念ではなく雑な感を受けるものである。刃部と相対する辺には截断されたような痕跡が見られる。この截断面は母岩剝離の際の打面より約90度転移した剝片末端に調整を加え打面を作り出し、剝離を行っている。剝離角度は59度を測る。重量は161gである。剝離全体に磨痕が見られ砂礫と一緒に流されてきたような感を受けるもので、所属時期は遺構等が伴っておらず不明である。

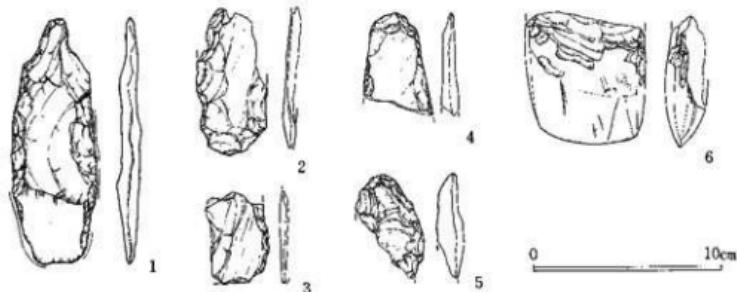
2は石墨片岩を素材としたもので、一部に自然面を残す。刀部は外彎しており、余り丹念な調整は行われていない。背部は直線状に仕上げられている。基部には折り取ったような剥離痕が残る。

#### 石鎌 (第14図1)

1点出土している。脚部の一部を欠損している。黒曜石製で、剥片石器と同様に剥離全体に磨痕が見られ、やはり流されてきたもの 第14図 出土石器(2) (2/3)  
の感が強い。形状は所謂無茎円基である。調整は丹念であるが、一部に自然面を残す。



0 5cm



第15図 出土石器(3) (1/3)

#### 打製石斧 (第15図 1-5)

破片も含めて5点が出土している。これらは第1層から第3層にかけて混然とした状態で出土したもので遺構等に伴うものではない。1点を除きすべて破損しており、平面形状等をうかがうことは難しいが、側縁部の状態よりみると、両側縁が平行をなすもの(1~3)と、両側縁が基部

第1表 出土石器一覧表 [単位cmおよびg。()内は現存値]

捕獲番号	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材
第15図 1	E-25	打製石斧	13.2	4.5	1.2	93	緑簾片石
" 2	D-26	"	(7.9)	(3.6)	(0.7)	(28)	石墨片石
" 3	C-27	"	(4.9)	(3.1)	(0.5)	(12)	緑簾片石
" 4	D-28	"	(5.5)	(3.6)	(1.0)	(23)	石墨片石
" 5	F-23	"	(5.5)	(3.2)	(1.4)	(27)	緑簾片石
" 6	C-26	磨製石斧	(7.0)	(6.4)	(2.1)	(167)	
第13図 1	D-27	剥片石器	9.0	7.1	2.3		黒曜石
" 2	D-25	"	6.3	3.0	0.6	11	石墨片石

より刃部へ開き「ハ」字状をなすもの(4・5)がある。

#### 磨製石斧 (第15図6)

基部を欠損したものが1点出土した。定角式のものである。側面等に調整剝離を残している。刃部は外彎しており細かな刃こぼれ状の痕跡が見られる。また、刃部付近には長軸に沿った形で擦痕が観察された。基部の欠損部は数回にわたる剝離が見られ、基部欠損後再製加工を行っていることがうかがわれる。

### 第2節 平安時代の遺物

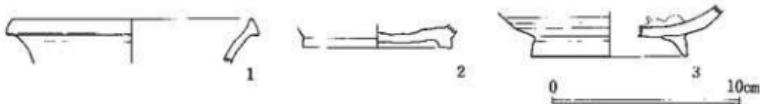
明らかに平安時代に属すると思われる遺物は、灰釉陶器3点だけである。遺構などに伴出するものではなく、1はE-25、2はC-24、3はC-26より出土しており、出土分布に一定の傾向を把握することはできなかった。また、出土層位についても他の中世遺物等と混然とした状態で出土しており、平安時代の遺物の包含層を把握することはできなかった。

#### 灰釉陶器 (第16図1~3)

3点が出土している。その内訳は、口縁部1、底部2すべて小形破片である。1は長頸瓶の口縁部である。口縁部で強く開き、口唇部で折返し直立するものである。胎土は内部に黑色粒子がとぶ灰白色を呈するもので堅緻なものである。

2は長頸瓶の底部と思われるものである。高台部はやや内彎気味になる。底部は回転窓削りによるものである。内面にロクロ成形の際の痕跡が残されている。胎土は灰色の強い灰白色を呈し堅緻である。

3は口縁部を欠損する高台付塊である。高台部は貼付け後加整形されており「ハ」の字状に外反し、断面形が三角形を呈する。体部大半は窓削りがなされており、整形は丹念な感を受ける。胎土は白灰色を呈し、密で、焼成は堅緻である。釉は内面に白色透明なものがかかる。これらの灰釉陶器は東濃産のものと思われ、平安時代末頃のものであると思われる。



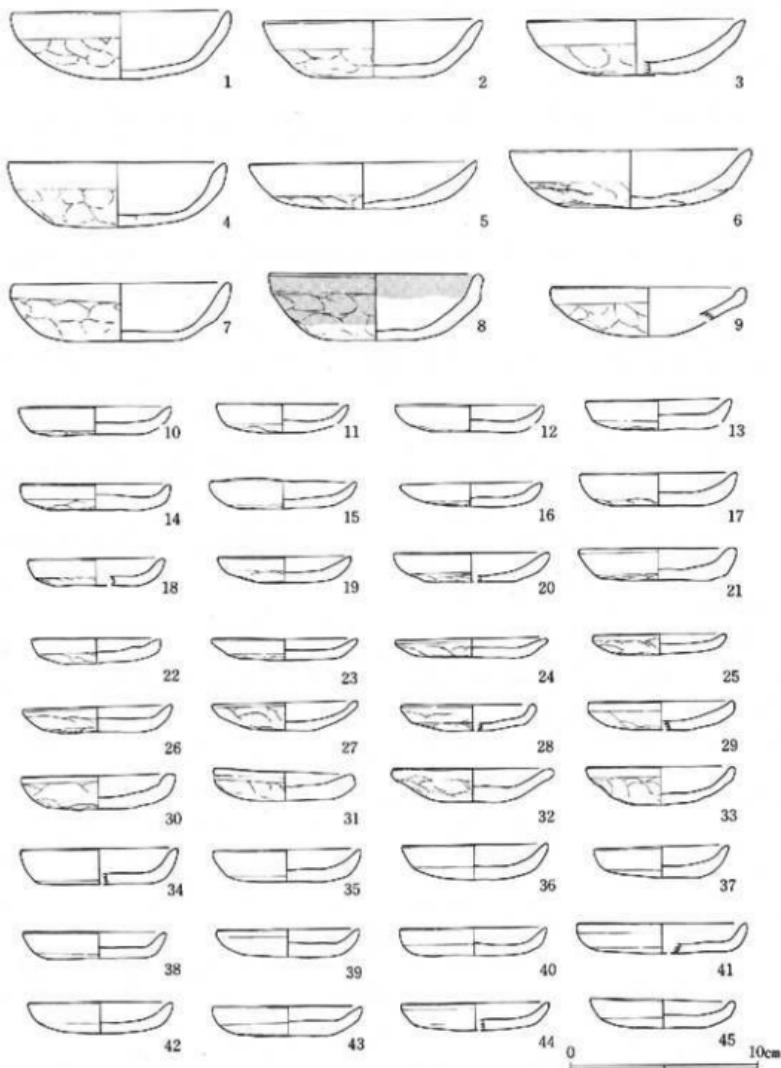
第16図 出土土器 (1/3)

### 第3節 中世の遺物

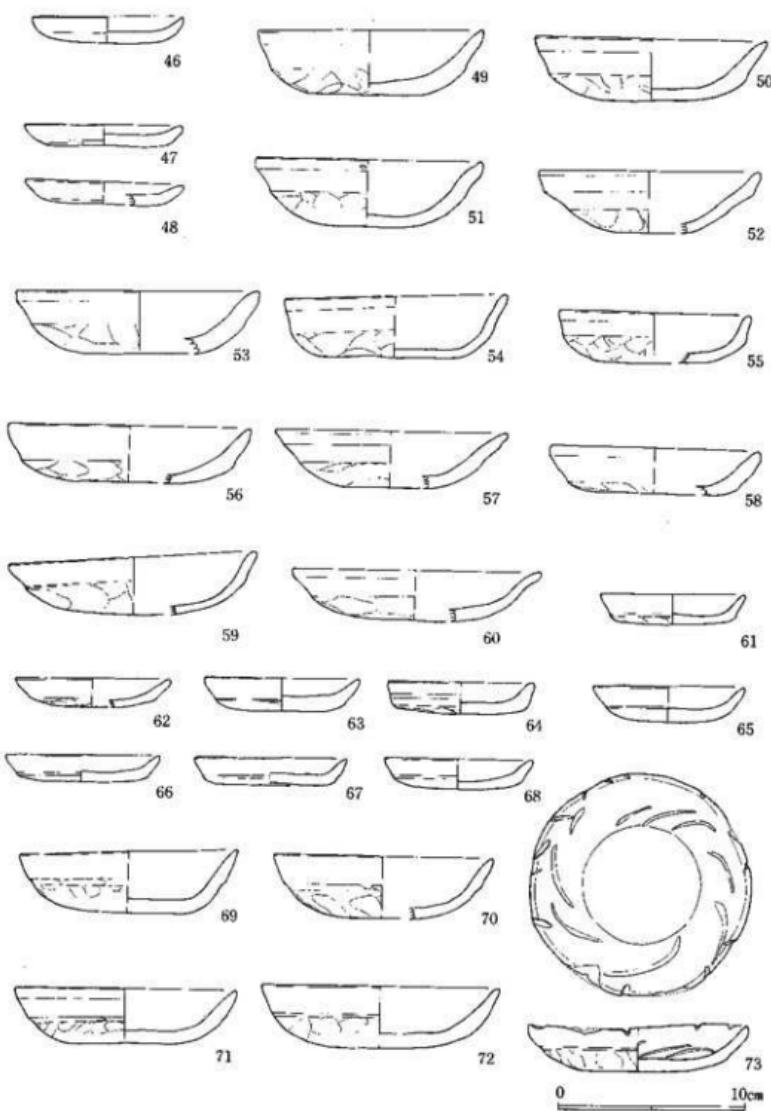
中世に属するものは、今回検出された基壇状遺構等に伴うもので、検出された遺物の大半はこの時期に属する。遺物はかわらけ、中世陶磁器、金属製品、錢貨等である。

#### 1 土器

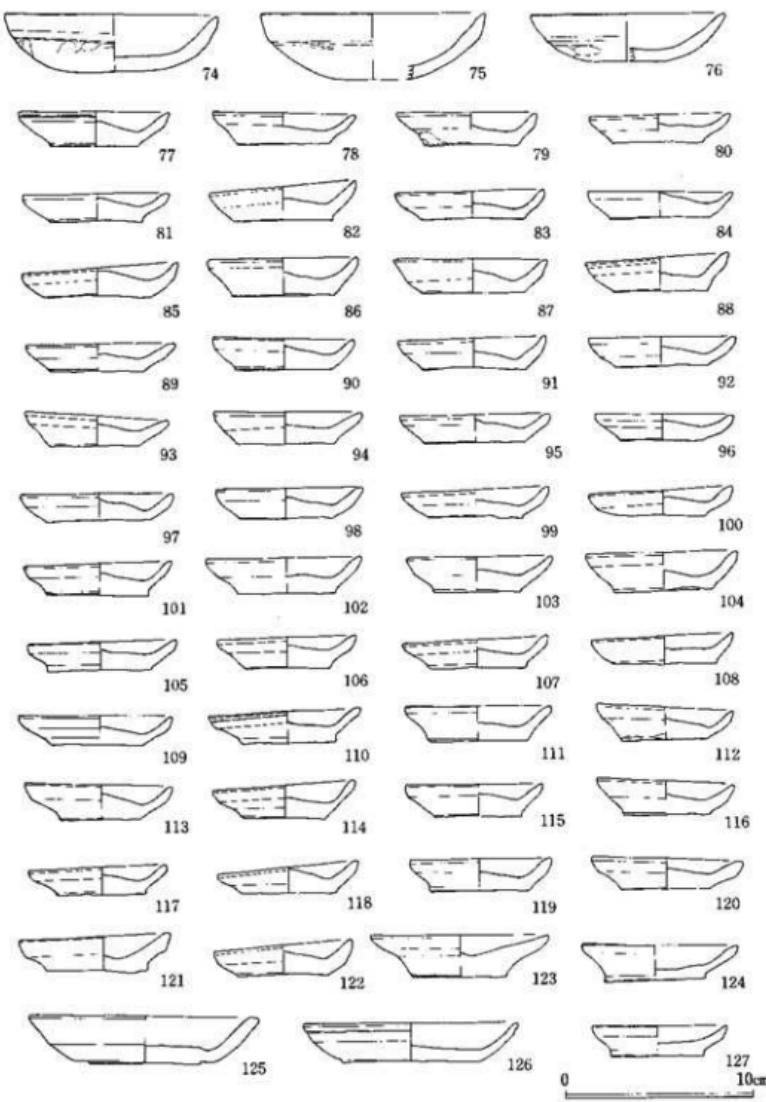
土器はかわらけ、中世陶磁器、合計9,175点が出土している。検出された土器のうち約99%がかわらけであり、中世陶磁器の出土は微々たるものであった。そのため時間的変化の少ないかわら



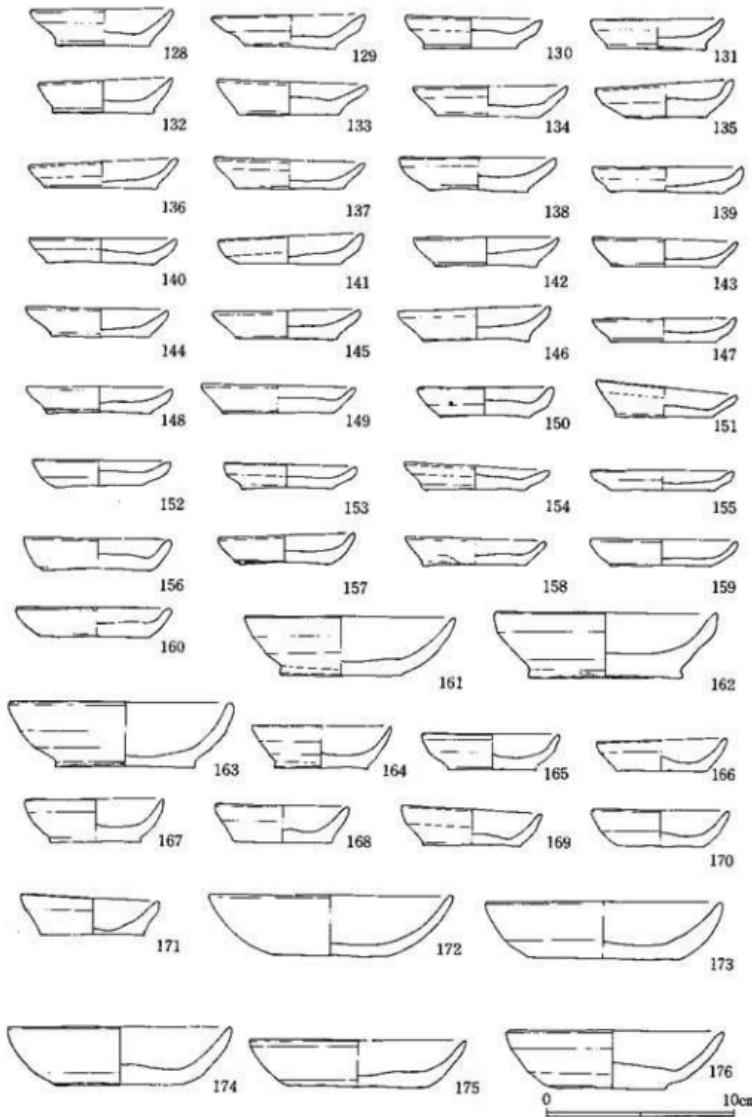
第17図 出土土器(1) (1 / 3)



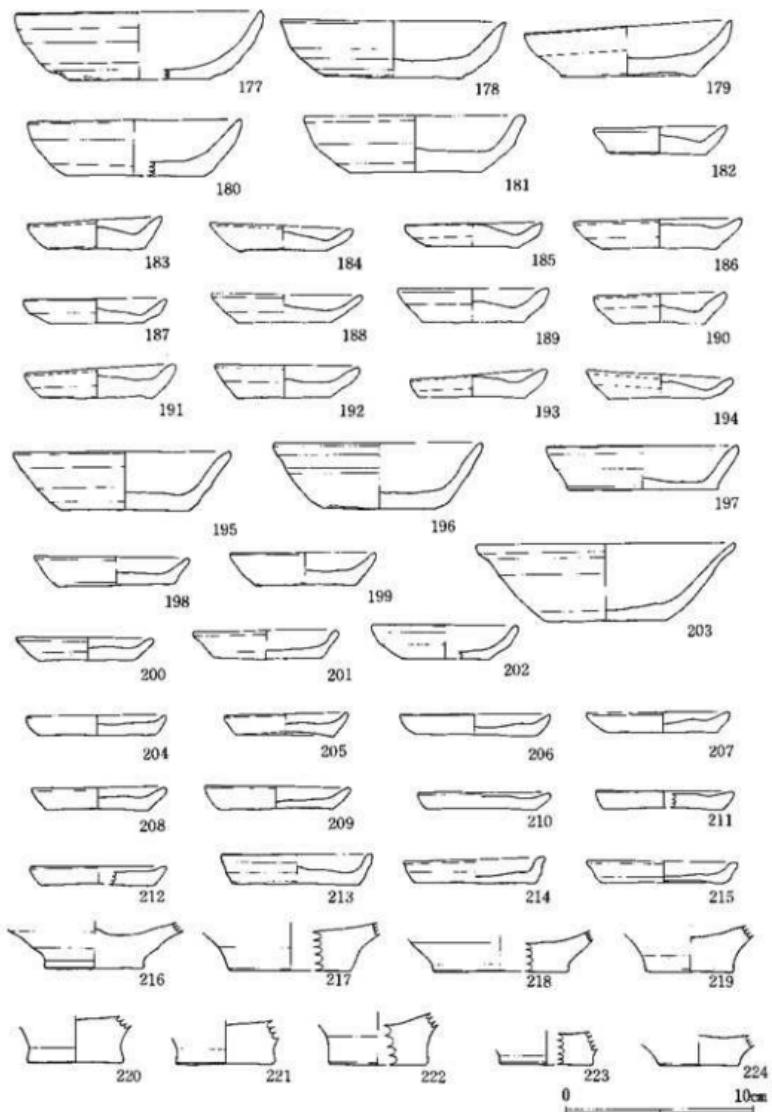
第18図 出土土器(2) (1 / 3)



第19圖 出土土器(3) (1 / 3)



第20図 出土土器(4) (1 / 3)



第21図 出土土器(5) (1 / 3)

第2表 かわらけ觀察表

標本番号	出上区	法 量 (cm)	口径 径 高	器 高	器形分類	直 部 成 形	直 部 切 面	指 頭 山 腹	外 面		内 底 面	色 調	燒 成 度	備 考
									輪 ナ ド	指 江 後 ナ ド				
第17回 1	集中区No.63	11.7	7.2	3.6	I A 1	○	○	指江後ナド	輪ナド	指江後ナド	輪ナド	褐色含有	褐色含有	2 / 3
2	集中区No.66	11.9	6.3	3.1	“	○	○	スノコ(山)底	“	スノコ(山)底	“	ハダ色	管通	1 / 2
3	E-19	11.6	6.3	3.0	“	○	○	指江後ナド	“	指江後ナド	“	褐色含有	褐色含有	“
4	集中区No.90	11.7	7.9	2.5	“	○	○	スノコ状山腹	“	スノコ状山腹	“	ハダ色	“	完形
5	集中区No.24	12.2	6.0	3.5	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	1 / 2
6	E-150a.3	12.7	7.5	3.1	“	○	○	指江後ナド	“	指江後ナド	“	ハダ色	“	2 / 3
7	E-18	11.5	6.9	3.1	“	○	○	スノコ状山腹	“	スノコ状山腹	“	褐色含有	褐色含有	はぼ完形
8	集中区No.28	11.2	7.1	3.5	“	○	○	指江後ナド	“	指江後ナド	“	ハダ色	“	“
9	E-25	10.2	5.2	2.7	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	2 / 3
10	集中区No.95	8.2	5.2	1.5	1B 1	○	○	少量の砂粒と有	少量の砂粒と有	少量の砂粒と有	少量の砂粒と有	カツツクコウ含有	カツツクコウ含有	はぼ完形
11	F-220a.1	7.0	3.2	1.6	“	○	○	岩手の正模	“	岩手の正模	“	褐色含有	褐色含有	完形
12	F-220a.1	8.0	4.1	1.4	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	カツツクコウ含有	カツツクコウ含有	はぼ完形
13	1-20	7.8	4.9	1.6	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	1 / 2
14	集中区No.3	8.0	4.8	1.4	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	2 / 3
15	集中区No.101	7.9	4.6	1.5	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	良質	良質	完形
16	集中区	7.6	4.8	1.3	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	カツツクコウ含有	カツツクコウ含有	はぼ完形
17	H-150a.4	8.4	5.3	1.8	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	1 / 2
18	G-22	7.3	4.5	1.5	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	“
19	集中区No.24	7.2	4.4	1.5	“	○	○	指江後ナド	“	指江後ナド	“	褐色含有	褐色含有	2 / 3
20	E-180a.3	8.4	4.8	1.6	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	少量の砂粒含有	少量の砂粒含有	1 / 2
21	集中区No.33	8.4	5.7	1.7	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	良質	良質	完形
22	集中区No.27	6.9	4.2	1.4	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	“
23	集中区No.59	7.8	5.1	1.1	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	2 / 3
24	E-20	8.2	5.3	1.0	“	○	○	指 圧	“	指 圧	“	褐色含有	褐色含有	“

細目番号	出 土 区	法 量 (cm)	口 径	底 部 形	器 高	器 分類	回 扇 切	指 刃 壁 等	外 表		形		胎 土	色 調	焼 成 潤	考
									輪ナデ	輪ナデ、指圧	内 容 面	輪ナデ	カッコウ含有	ハダ色	青 通	1 / 2
第17区 25	E-18	7.2	4.1	1.1	1.81	○			"	"	"	"	"	"	"	"
26	E-19	8.0	4.7	1.4	"	○			"	"	"	"	"	"	"	"
27	E-18	7.8	3.6	1.5	"	○			"	"	"	"	"	"	"	"
28	E-18	7.0	5.0	1.4	"	○			株ナデ、指圧	株ナデ	少量のカッコウ含有	褐色	"	"	"	"
29	E-20	7.8	4.5	1.6	"	○			株ナデ、指圧	株ナデ	若干の砂粒含有	褐色	"	"	"	"
30	集中区 No.78 E-20	8.3	4.6	1.8	"	○			株ナデ	株ナデ	砂粒含有	褐色	"	"	"	3 / 4
31	7.5	5.5	1.6	"	○			指 圧	指 圧	砂粒含有	褐色	"	"	"	1 / 2	
32	集中区 No.89 E3	8.6	4.3	1.8	"	○			指 圧	指 圧	砂粒含有	褐色	"	"	"	"
33	8.0	3.8	2.0	"	○				指 圧	指 圧	良 質	褐色	"	"	"	3 / 4
34	E-15	8.4	6.1	1.9	1.81'	○			指 圧	指 圧	砂粒含有	褐色	"	"	"	"
35	E-20	8.0	4.7	1.7	"	○			指 圧	指 圧	若干砂粒含有	褐色	"	"	"	1 / 2
36	集中区 No.19	7.8	4.2	1.8	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	はぼ光形
37	集中区 No.46	7.2	4.0	1.7	"	○			指 圧	指 圧	若干砂粒含有	褐色	"	"	"	完 形
38	E-22	7.6	5.4	1.4	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	1 / 2
39	集中区 No.42	7.7	4.7	1.5	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	はぼ光形
40	集中区 No.47	7.9	5.3	1.5	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	2 / 3
41	E-20	9.1	6.9	1.6	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	1 / 2
42	E-20	7.8	4.0	1.7	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	2 / 3
43	集中区	8.0	4.8	1.6	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	"
44	E-22	8.0	6.2	1.5	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	1 / 2
45	集中区 No.16	7.8	4.6	1.5	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	完 形
第18区 46	E-20	8.0	5.1	1.4	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	2 / 3
47	集中区 No.36	8.3	6.1	1.2	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	完 形
48	E-20	8.3	5.1	1.2	"	○			指 圧	指 圧	指 圧	褐色	"	"	"	1 / 2

地図番号	出土地区	法量 (cm)			断面分類	底面成形 目録番号	指標压痕	整 形			上 色調	焼成 時	考
		口 径	底 径	器 高				外 面	内 面	底 面			
第16図49	集中区	12.0	6.4	3.5	IA2	○	地圧後ナデ	地圧後ナデ2回焼	地圧後ナデ3回	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	はげ完形
50	集中区No.60 F-22	12.5	7.5	3.4	"	○	"	"	"	ハダ色	"	"	"
51	F-20	12.2	6.6	3.6	"	○	"	"	"	褐色	"	"	1/2
52	E-20	11.9	5.0	3.4	"	○	"	"	"	褐色	"	"	1/3
53	集中区	12.9	7.6	3.4	"	○	"	"	"	ハダ色	"	"	1/2
54	H-19No.10	11.9	7.6	3.3	"	○	"	地圧後ナデ、 地圧後ナデ2回 地圧後ナデ3回	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	はげ完形	
55	E-19	10.3	6.3	2.7	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	1/2
56	E-20	12.8	7.3	3.1	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	はげ完形
57	F-21 F-20	12.4	6.9	3.0	"	○	2	"	"	砂粒 合有	白褐色	青	"
58	E-23No.7	11.2	7.1	2.5	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	"
59	E-19,F-22	15.2	7.7	3.1	"	○	"	"	"	褐色	青	青	1/3
60	E-19,E-20	13.2	7.4	2.7	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	1/3
61	集中区No.66	9.7	5.8	1.6	IB2	○	地圧後ナデ	地圧後ナデ	地圧後ナデ	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	はげ完形
62	集中区No.8	8.1	4.2	1.6	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	1/2
63	E-20	8.3	5.3	1.8	"	○	"	"	"	褐色	青	青	2/3
64	E-20	7.8	6.9	1.7	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	"
65	I-19No.1	8.2	5.3	2.0	IB2	○	"	"	"	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	はげ完形
66	集中区No.14	8.1	5.3	1.4	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	1/2
67	集中区No.22	8.1	5.8	1.5	"	○	"	"	"	砂粒 合有	白褐色	青	完形
68	集中区	7.9	5.7	1.7	"	○	"	"	"	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	1/2
69	集中区No.10	11.5	6.4	3.2	IA3	○	地圧後ナデ	地圧後ナデ3回	地圧後ナデ	若干の砂粒 若干の砂粒	白褐色	青	完形
70	E-19	11.7	6.2	3.3	"	○	"	"	"	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	1/3
71	集中区No.105	11.7	5.9	3.0	"	○	"	"	"	砂粒 カッターコウ合有	白褐色	青	完形
72	E-20	12.6	7.0	3.3	"	○	"	"	"	ハダ色	青	青	1/2

構造番号	出土地区	法量(cm)	器高	器形	底部成形		底部切	指洞正規	外表面		内底面		形状	胎上色	焼成備考
					回転切	○			○	○	○	○			
第108873	E-20No.5	11.9	6.5	2.5	IA3	○	○	○	指圧後ナデ	指圧後ナデ	○	○	カツ鉄コワ含有	緑褐色	普通形
第108874	集中区No.104	11.3	6.1	3.1	○	○	○	○	若干の砂粒	若干の砂粒	○	○	若干の砂粒コワ含有	緑褐色	普通形
75	F-17	12.0	4.5	3.5	○	○	○	○	若干の砂粒	若干の砂粒	○	○	若干の砂粒コワ含有	緑褐色	1/2
76	集中区No.99	10.5	5.6	2.6	○	○	○	○	若干の砂粒	若干の砂粒	○	○	若干の砂粒コワ含有	緑褐色	普通形
77	集中区No.99	7.9	4.6	1.8	IB1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2/3
78	集中区	7.7	4.9	1.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ほぼ完形
79	集中区No.95	7.5	5.0	1.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
80	集中区No.10	7.5	4.9	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	E-21	7.7	4.9	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
82	集中区No.37	7.9	5.3	1.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
83	E-20	8.0	5.3	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
84	集中区	7.7	5.3	1.4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
85	E-21No.1	6.2	5.5	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	H-17No.4	8.1	5.5	2.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
87	集中区No.5	8.2	5.5	1.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
88	集中区No.98	7.7	5.1	1.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
89	集中区No.17	7.8	5.0	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
90	集中区No.33	7.6	5.2	1.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
91	集中区No.73	7.9	5.6	1.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
92	集中区No.20	7.8	5.0	1.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
93	E-19No.5	7.5	4.6	1.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
94	集中区No.33	8.0	5.3	1.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
95	D-21	8.0	5.4	1.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
96	E-20	7.4	4.4	1.4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

辨認番号	出土地区	法 量 (cm)	口 径 底 径	器 形 爲	器形分類	底 部 成 形	底 部 切 指紋压痕	底 部 压 痕 等		整 形		胎 土	色 调	燒 成	備 考
								外 面	内 面	胎 土	砂粒含有				
3019897	E-18	8.1	5.5	1.4	UB1	○		"	"	"	"	"	普通	2 / 3	達成形
98	E-20	7.9	5.0	1.6	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
99	集中区	7.8	5.0	1.4	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形
100	集中区No.3	7.7	4.6	1.3	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形
101	集中区No.6	7.7	5.3	1.7	UB1'	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
102	E-22No.1	8.4	5.2	1.9	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形
103	集中区No.77	7.8	4.6	1.9	"	○		"	"	"	"	"	"	"	3 / 4
104	1-19	8.1	5.3	2.0	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
105	集中区	7.8	5.4	1.5	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形
106	E-18	7.4	4.5	1.7	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
107		7.7	5.1	1.5	"	○		"	"	"	"	"	"	"	1 / 2
108	D-14	7.6	5.6	1.5	"	○		"	"	"	"	"	"	"	完形
109	集中区No.8	8.1	4.8	1.6	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
110	集中区No.12	8.2	5.1	1.7	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形
111	集中区No.21	7.8	5.2	1.9	"	○		"	"	"	"	"	"	"	完形
112	集中区No.23	7.4	4.6	1.8	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形
113	集中区No.25	7.8	4.3	1.8	"	○		"	"	"	"	"	"	"	完形
114	集中区No.31	7.6	4.3	1.8	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
115	集中区No.50	7.3	4.6	1.7	"	○		"	"	"	"	"	"	"	完形
116	E-15No.2	7.4	4.6	1.8	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
117	E-21No.37	7.3	4.7	1.5	"	○		"	"	"	"	"	"	"	完形
118		7.6	5.1	1.4	"	○		"	"	"	"	"	"	"	2 / 3
119	集中区No.51	7.5	5.2	1.7	"	○		"	"	"	"	"	"	"	完形
120	集中区	8.1	4.8	1.6	"	○		"	"	"	"	"	"	"	達成形

探査番号	出土区	法量(cm)			器高	器形分類	底部成形 固形切	指標計測	底面圧痕等	外表面	内底面	形	胎上色	色调	焼成	備考	
		口径	底径	器高													
第168号121	集中区	8.0	5.3	1.8	H B 1'	○			回転糸切ナデ消	横ナデ	突起	砂粒含有	褐色	青	普通	1 / 3	
122 G-208e.2		7.4	4.9	1.6	○				外周縫正直	○		○	褐色	褐色	褐色	完形	
123 G-22		9.4	5.0	2.3	○				回転糸切ナデ消	○		○	褐色	褐色	褐色	2 / 3	
124 集中区No.5		12.2	6.0	2.6	H A 2	○			見たる船ナデ	○		○	褐色	褐色	褐色		
125 P-125 No.4		11.4	7.3	2.0	○				機ナデ、突起	○		○	褐色	褐色	褐色		
126 E-20		8.4	5.3	1.9	H B 2	○			砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	1 / 2	
127 H-20		7.2	4.9	1.6	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色		
第20号128	H-17Na.5	7.7	5.0	2.0	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色		
129 集中区No.1		8.1	4.8	1.7	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色	2 / 3	
130 E-20		7.4	5.1	1.6	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	3 / 4	
131 集中区No.44		7.1	5.3	1.7	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色	2 / 3	
132 集中区No.12		7.2	5.5	1.7	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	
133									カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色		
134 H-208e.12		8.3	5.6	1.6	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色		
135 集中区No.88		7.4	4.3	1.8	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色	完形	
136 D-18		8.0	6.0	1.4	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	1 / 2	
137 集中区No.10		8.0	5.8	1.5	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色	3 / 4	
138 H-208e.2		8.5	5.4	1.7	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色		
139		8.0	6.0	1.3	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色	3 / 4	
140 H-188e.1		7.9	5.8	1.3	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	2 / 3	
141 D-198e.1		7.7	5.5	1.5	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色		
142 D-198e.1		7.8	5.5	1.5	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	
143 G-218e.7		7.7	5.6	1.5	○				カツ族コウ含有	○		○	褐色	褐色	褐色	3 / 4	
144 H-20		7.7	5.4	1.6	○				砂粒含有	○		○	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	

構造番号	出 土 区	法 量 (cm)	器 高	器 形	底 部 分類	底 部 成 形	指標止環	底 部 压 解等	外 面		形 内 底 面		胎 土	色 調	焼 成 備	考 査
									回転系切	外輪系切	底 部 内 部 ナ メ	砂粒含有				
第205a145	I - 19Nb.8	7.9	5.3	HB 2	○	回転系切	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
146	II - 19Nb.8	8.2	5.7	1.7	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	"
147	II - 19Nb.1	7.7	5.6	1.3	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
148	I - 19Nb.14	7.9	5.5	1.4	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
149	G - 16Nb.3	8.2	6.0	1.5	"	○	スノコ柱圧痕	スノコ柱圧痕	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
150	集中区No.94	7.3	4.8	1.5	"	○	回転系切	回転系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
151	集中区	7.6	5.2	1.6	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
152	集中区	7.4	4.5	1.4	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
153	B - 22	7.1	4.9	1.2	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
154	集中区No.41	7.8	5.5	1.3	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
155	7.6	5.5	1.1	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形	
156	I - 20Nb.3	8.0	6.8	1.6	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
157	集中区No.30	7.2	5.0	1.5	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
158	C - 25Nb.4	7.6	5.5	1.4	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
159	G - 16	7.8	5.4	1.4	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
160	8.4	6.0	1.5	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形	
161	I - 19Nb.2	11.1	6.5	3.2	II A 3	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
162	I - 20Nb.5	11.9	8.2	3.5	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
163	I - 20	11.8	7.5	3.5	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
164	集中区No.18	7.4	6.0	2.3	HB 3	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
165	I - 19Nb.3	7.4	4.8	1.9	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
166	集中区No.12	7.0	4.8	1.7	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形
167	7.5	4.9	2.3	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形	
168	集中区No.45	7.1	5.2	2.0	"	○	外輪系切	外輪系切ナメ有	"	"	砂粒含有	"	"	褐色	普通	はぼ完形

測量番号	出土地区	注 紙 (m)	器 高	器 形	底 层 成 形	底 部 在 前 等	外 面	整 形	胎 土	色 调	燒 成	備 考
測量番号	出土地区	注 紙 (m)	器 高	器 形	底 层 成 形	底 部 在 前 等	外 面	整 形	胎 土	色 调	燒 成	備 考
169 H-170a.1	H-170a.3	7.5	5.2	2.0	II B 3	○	スコット正頭	横ナデ	砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
170 H-170a.3	H-170a.3	7.3	4.5	2.0	"	○	回転系切	横ナデ、突起	"	褐色	"	2 / 3
171		7.5	5.6	2.0	"	○	回転系切	横ナデ	砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
172 F-22	F-22	12.9	6.0	3.3	II A 4	○	回転系切	横ナデ、突起	上質	褐色	普通	はぼ完形
173 集中区No.43	集中区No.43	12.7	8.1	3.1	"	○	スコット正頭	横ナデ、突起	カツツク含有	褐色	普通	はぼ完形
174 集中区	集中区	12.0	6.9	3.1	"	○	回転系切	横ナデ、突起	上質	褐色	普通	はぼ完形
175 雄山区No.43	雄山区No.43	11.5	7.4	2.5	"	○	スコット正頭	横ナデ、突起	カツツク含有	褐色	普通	はぼ完形
176 安田区No.66	安田区No.66	11.6	5.8	3.1	II A 4'	○	回転系切	横ナデ、突起	砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
第2圖 177 E-21	E-21	13.1	7.5	3.6	"	○	回転系切	横ナデ、突起	砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
178 集中区No.75	集中区No.75	12.0	7.4	3.0	"	○	横状正頭	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
179 I-200a.9	I-200a.9	11.0	7.2	2.7	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
180 集中区No.10	集中区No.10	11.3	7.5	3.0	II A 5	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
181 F-19	F-19	11.9	7.0	3.1	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
182 集中区No.8	集中区No.8	7.1	5.0	1.4	II B 6	○	外側縦正頭	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
183 F-21	F-21	7.2	5.3	1.6	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
184 集中区No.74	集中区No.74	7.6	4.7	1.3	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
185		7.4	5.0	1.2	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
186 集中区No.12	集中区No.12	9.0	6.2	1.5	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
187 集中区No.38	集中区No.38	7.6	5.0	1.3	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
188 E-190a.7	E-190a.7	8.1	5.0	1.5	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
189 F-18	F-18	8.1	5.5	1.8	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
190 F-23	F-23	7.1	4.8	1.5	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
191 集中区No.77	集中区No.77	8.1	6.0	1.6	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形
192 集中区No.92	集中区No.92	7.7	5.0	1.8	"	○	回転系切	横状正頭	"	褐色	"	はぼ完形

検討番号	出土区	法	量 (cm)	器形分類	底面成形 回転切削	底面成形 指印压痕	底面成形 外周輪圧痕	整 形		胎 土	色 調	焼成	備 考
								外 面	内 面				
第2圖 193	P-1886.1	7.4	5.7	1.2	UB6	○				砂粒含有	褐色	普通	2 / 3
194	G-2286.2	7.9	5.4	1.2	"	○				砂粒含有	褐色	普通	光 形
195	集中区No.41	11.7	6.8	3.2	UB7	○				砂粒含有	褐色	普通	2 / 3
196	集中区No.52	11.2	6.0	3.5	"	○				砂粒含有	褐色	普通	"
197	E-722	10.3	8.0	2.4	"	○				砂粒含有	褐色	普通	"
198	D-2786.1	8.3	6.2	1.6	UB7'	○				砂粒含有	褐色	普通	3 / 4
199	H-1786.1	7.8	5.3	1.7	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
200	E-2886.2	7.4	5.0	1.2	"	○				砂粒含有	褐色	普通	元 形
201	H-1986.2	7.7	5.7	1.5	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
202	I-1986.2	7.9	4.7	1.8	"	○				砂粒含有	褐色	普通	1 / 2
203	G-23	13.8	6.5	4.2	UB7	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
204	D-27	7.5	6.3	1.1	UB8	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
205		6.6	5.2	1.1	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
206	D-20	8.1	6.6	1.1	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
207	D-1986.2	7.6	5.8	1.1	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
208	E-24	7.2	5.5	1.1	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
209	E-20	7.8	6.0	1.2	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
210	C-29	7.2	6.0	0.9	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
211	D-28	7.4	6.4	1.0	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
212	C-29	7.4	6.1	1.0	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
213		8.0	6.6	1.6	UB9	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
214	C-21	7.6	6.6	1.3	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
215	D-27	8.0	6.5	1.2	"	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形
216	G-21	-	5.4	-	UB10	○				砂粒含有	褐色	普通	はぼ完形

調査番号	地土区	法 量 (cm)	高 度 器 高	底盤成形		回転糸切 指頭仔原	回転糸切ナメ 機ナメ	蓋 外 面		内底面	胎 土	色 調	焼 成	備 考
				高影分類	回転糸切			×	×					
第21回217	H-20	-	6.5	-	U A 10	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
218	E-23	-	7.3	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
219	E-20	-	4.8	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
220	E-21	-	5.2	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
221	E-22	-	5.3	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
222	H-17No.5	-	5.3	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
223	E-20	-	5.0	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好
224	D-21	-	4.4	-	"	○	-	×	×	×	×	×	×	良好

第3表 かわらけの地形別出土状況表

地名	地番	地形別出土状況												合計														
		IA1	IB1	IB1'	IA2	IB2	IB2'	IA3	IB1	IB1'	IA2	IB2	IA3	IB3	IA4	IB4	IA5	IB5	IA6	IB6	IA7	IB7	IA7'	IB7'	IA8	IB8	IA9	IB9
C - 21	26												1												1		1	
	29																										2	2
D - 14	18	1							1																		1	1
	19																											2
	20																											1
	21																											3
	27																											3
	28	3	4																									1
E - 18	19	1	1	2	3	4	1		3	1	1	1	10	9			2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	10	10
	20	3	7	6	4	1			3	11																		16
	21	1	3	4	1				1		6	3	1	2	2													65
	22	1		2					1		3	2	1	3	1												28	
	23																											19
	24																											2
	28																											1
F - 17	18																											1
	20																											2
	21	1																										1
	22																											3
	23																											1

G = 16		I A1	I B1	I B1'	I A2	I B2	I B2'	I A3	I B1	I B1'	I A2	I B2	I B2'	I A3	I B3	I A4	I A4'	I A5	I B6	I A7	I B7	I A7'	I B8	I A8'	I B9	I A10	H+
H = 14		19																									
		20							1																		
		21																									
		22								1																	
		22																									
		15																									
		17																									
		18																									
		19																									
		20																									
		1 - 19																									
		20																									
		9	22	15	11	3	4	7	24	21	2	30	3	6	4	4	2	12	3	5	1	8	2	9	207		

けでは、年代を把握することは難しく、また、中世陶磁器の出土数が少なかったことなどにより、これらとの共伴関係により時期的決定を行うことはできず、大雜把に中世という大枠の中でしか捉えることができなかった。

### 1) かわらけ (第17~21図1~225)

本遺跡において最も出土量の多い遺物はかわらけである。確実に遺構に伴出するものではなく、また、層位的にも把握できる資料はなく、所属時期決定のできる資料は少ない。図示し得た遺存部分が器形の3分の1以上のものは224点である。この他の細片に至ってはコンテナ5杯分が出土している。

かわらけの分類について かわらけの持っている特性上大きな器形変化等はみられず分類することに難をきたしたが、これらは、主に成形技法、法量、器形などの諸属性により以下のように区分が可能である。

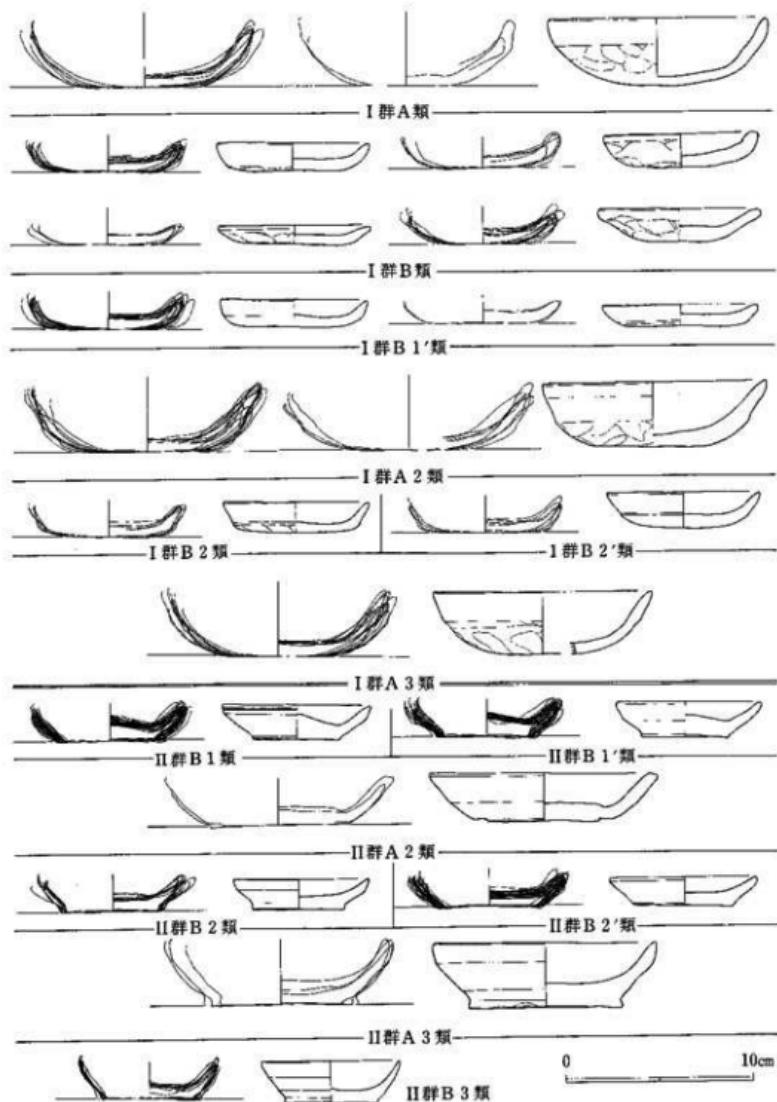
大きな差違は成形技法に見られる。底部が手捏ね成形により、所謂内型成形によるもの—I群と、底部に回転糸切り痕を残す、ロクロ成形によるもの—II群に区分される。この成形技法差によりI群とII群の間には基本的な器形差が生じている。I群は基本的には丸底の皿もしくは壺状、II群は平底の皿もしくは壺状を呈する。

I群 所謂内型成形かわらけである。法量により口径が10~15cm、器高が2~3.5cmの比較的大形のもの(A)、口径が6~9cm、器高が1~2cmの小形のもの(B)に区分される。これらは器形により以下のように分類する。

1類 体部約3分の1から中程まで指頭圧痕を残し、口縁部は横ナデが施される。口縁部のナデは1回のものが多く、割合強くナデを加える傾向がみられる。底部は丸底を呈し、全体がボール状となり、口縁部はやや内寄気味となる。若干ではあるが、口縁部の横ナデ整形により、口縁が外反気味に開くものもみられる。口唇部は肉薄で尖る傾向のもの—aが一般的である。見込み部の整形は内底面、内口縁部に施される。Bに属するものは比較的器高値の低い皿状のものが主体をなし、Aに属するものは、器高値の高い壺状のものである。

1'類 1類が指頭圧痕を底部に残すのに対し、全面に横ナデが施されているものである。小形のもの(B)しか検出されていない。器形はI群B1類と同様であるが、器高が1.2cmと大変浅い皿状のものが2点みられる(第18図47・48)。口唇部はやや肉厚となり、丸味をおびる傾向のもの—bが一般である。見込み部の整形は1類と同様で、割合丹念な整形がなされている。

2類 体部下約3分の1から中程まで指頭圧痕を残し、口縁部には横ナデが施される。底部は丸底を呈し、1類に類似する器形をなすが、口縁部横ナデ部分と、底部指頭圧痕部の境に低い棱をなし、口縁部が外反する。口唇部は肉薄で尖る傾向のもの—aが一般的である。口縁部ナデは、一回のもの—①、2回のもの—②がある。①は、Bの小形のものに集中し、②のものはAの大形のものにみられる。尚、②の場合口縁部は①のものに比べ、直に近い形で立ち上がる傾向がみられる。また、第18図58~60のような器高値の低い皿状のものも含まれている。見込み部の整形は、

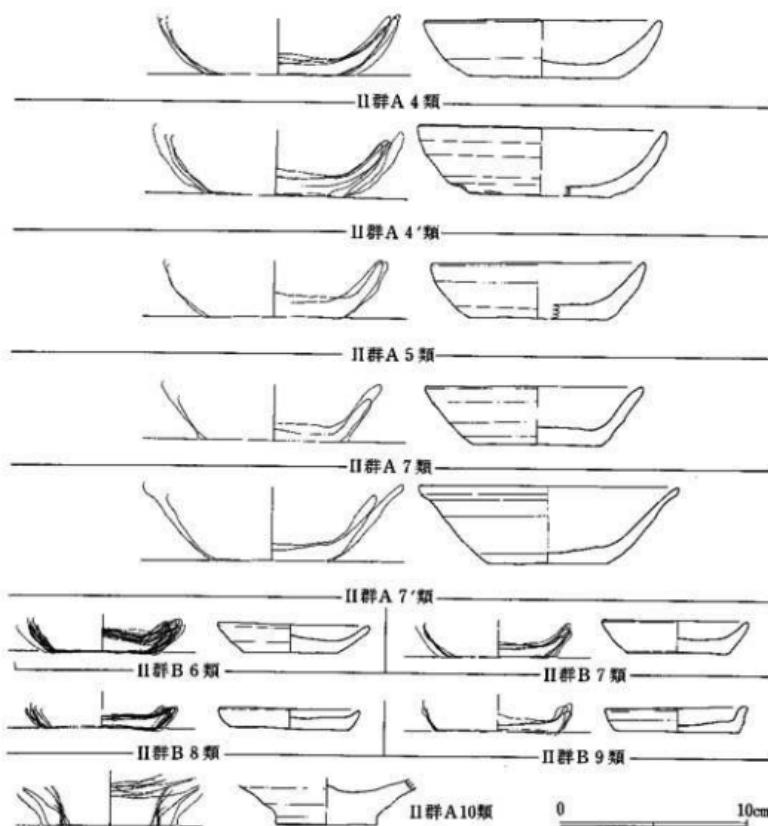


第22図 かわらけの器形分類(1) (1 / 3)

1類・1'類と同様な傾向である。

2'類 基本的にはI群B2類と器形は類似するが、底部整形に異なりがみられる。底部整形は指頭整形に異なりがみられ、指頭整形後、横ナデを加えて調整を行っている。見込み部の整形は2類と同様である。

3類 底部、口縁部の整形は1・2類と同様な傾向で、指頭ナデ整形による。しかし、2類にみられたような有稜はみられず、底部指頭整形と口縁部横ナデ整形の間に位置する体部中程は、箆または棒状工具による沈線状ナデにより有段状となる。2類に比べ口縁部がやや内巻気味で、1類のボーナー状の形状と類似する。口唇部は肉薄の先端部の尖るもの—aである。3類はすべてAに属し大



第23図 かわらけの器形分類(2) (1/3)

形で、規格的にも口径13cm、器高3.5cm以内の画一性の強いものである。尚、第18図73は他のかわらけとは異なり、器高2.5cmと皿状で、口唇部に刻み、見込み部には蓖または刷毛状工具による右回転の暗文？がなされている。

II群 ロクロ成形によるかわらけである。法量により口径11.0~13.0cm、器高が2.5~3.5cmの比較的大形のもの(A)、口径が7.0~8.5cm、器高が1.0~2.0cmのもの(B)に区分される。これらは器形により以下のように分類される。

1類 底部が若干張り出し気味に、比較的厚く切られており、底部際で体部が折れ、外反気味に立ち上がり体部中程で折れ、口縁部が内彎気味になる。口唇部は肉薄の尖るもの-aが一般的である。見込み部整形は行われておらず、円錐形状の突起を残す。底部は回転糸切りにより処理されている。一部に底部周縁が压痕状となるものがみられる。この類はBだけで、内容量の少ないものである。

1'類 器形的には1類と同様な傾向を示している。しかし、体部より口縁部にかけての状態が直線的に開く。口唇部は1類に比べやや肉厚となり丸味をおびる傾向である。この類は1類と同様にBだけで、内容量の少ないものである。

2類 基本的な形状は1類・1'類と同様な傾向を示す。底部は若干張り出し気味に、比較的厚く切られている。体部中程で折れ立ち上がるが、この折れ方は1類・1'類よりも緩やかで、口縁部が内彎する。口唇部は、肉薄の先端部の尖るもの-aであるが、肉厚の丸味をおびるもの-bもある。1類・1'類にはみられなかった内面のナデは、この類には顕著に見られるようになる。内面外周を指頭？により横ナデ整形を加え、成形時見込み部に生じた突起に指頭、刷毛状・板状工具などによりナデ整形を加えている。このため、1類・1'類に比べ内容量の多いものとなっている。この2類はA-Bの両者がみられ、Aは器高の低い皿状のものである。

3類 基本的な形状は2類に類似するが、器高値が2類より高く、塊形を呈する。また体部の立ち上がりは緩やかなカーブを描き、口縁部は内彎する。口唇部は肉薄の尖るもの-aが主体である。内面のナデは、2類と同様なものと、全くなされていないものとに分けられるが、後者の方が主体を占める。A-B両者のものもみられ、Aに属するものは、見込み部のナデがすべて行われている。

4類 1~3類に共通していた底部が張り出し、底部壁が厚い傾向が認められなくなる。体部は口縁部に向かって内彎気味に開く。口唇部はやや丸味をもち、肉厚な傾向を示すが、第20図175のような口唇が尖るものもある。内面のナデは、内面外周、見込み部に行われている。規格的にBに属するものはなく、Aのみが認められる。

4'類 基本的に器形は4類に類似するが、底部の状態、整形の状態等に差異がみられる。底部のあり方は、1~3類にみられたものに近い様相を呈しているが、顕著に張り出すとは言い難いものである。体部にはロクロ成形の稜を割合明瞭に残している。口唇部は肉薄の尖るものである。内面のナデは内面外周、見込み部にみられる。規格的にはBに属するものはなく、Aのみが認め

られる。

5類 底部より体部が直線的に立ち上がり、体部上半で内側に折れ、やや内反する。口唇部はやや肉厚となり丸味をおびる。体部にはロクロ成形の稜を若干残している。内面のナデは内外外周、見込み部にみられ、底部壁と器壁がほぼ等しい厚さとなっている。規格はAのみが認められる。

6類 底部より体部が直線的に立ち上がり、器高値の低い皿状の器形を呈する一群である。口唇部はやや肉厚でやや丸味をおびる。内面のナデは行われておらず、見込み部に成形時の突起を残している。第21図193のようにほとんど板状に近く、内容量のほとんどないものも含まれる。規格はBのみが認められる。

7類 器形等については6類とほとんど変わりがない。内面のナデは、内外外周、見込み部にみられ、6類にみられたような不整形の板状のものはみられない。規格はAとBの両者があり、Aは塊状のもの（第21図195・196）と、皿状のもの（第21図197～199）がある。Bはすべて皿状のものである。尚、Aに属するものは、ロクロ成形時の稜を体部に明瞭に残している。

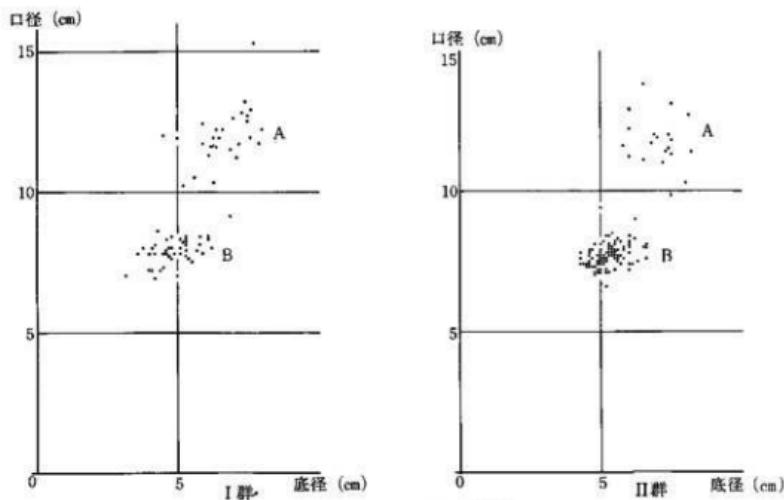
7'類 7類と同様に体部が直線的に開く塊形のものである。口縁部が外反するのが特徴的で、口唇部が肉薄となり尖る傾向がある。規格的にはAに属する。

8類 体部が直線的に外反し、器高が0.9～1.2cmの範囲に包括される器高値の低い皿状を呈する。中でも第21図210～212はその顯著なもので、ほとんど板状に近い形を呈し、口径と底部の差がほとんどない（底径が口径の82～87%）。口唇部はやや肉厚となるが、口唇端で尖る傾向のものである。規格はすべてBに属するものである。尚、第21図210～212は他の資料とは法量等に若干の差異がみられ、新たに一群を構成でき得る可能性がある。

9類 体部が直に近い形で立ち上がり、L形に近い形を呈する。口唇部はやや外反し、肉厚で丸味をおびる。口径と底径の差がほとんどなく、8類第21図210～212に近い数値を示すが（底径が口径の81～86%）、器高が1.2～1.6cmで、皿状を呈する。体部にはロクロ成形時の稜を割合明瞭に残している。規格はすべてBに属する。

10類 底部のみが検出されているだけで、器形全体の様相については把握されていない一群である。この一群の大きな特徴は、底部壁が分厚く、一見すると円筒形高台と思えるものである。底部壁に比べ器壁は薄い傾向を示す。体部は底部壁で強く折れ外反し、口縁部まで直線的に開く器形をなすようである。体部の開き方より、底径に比べ口径の大きいものが考えられる。規格はいずれもAに属すると思われるが、底径の状態より6.8～7.2cm、4.5～5.3cmの二群があるようで、分類が可能かと思われる。

以上のようにかわらけは成形枝法やかたち等により分類することができる。大別すると、手捏ね、ロクロ成形に分けられ、図示できたものの内、手捏ね（I群）が76点、ロクロ成形（II群）が148点で、II群が全体の約66%を占める。法量的には、I群では底径4.0～6.0cm、器高1.0～2.0cm、口径7.0～8.5cmの一群、底径6.0～8.0cm、器高2.5～3.5cm、口径11.0～13.0cmの一群が認め

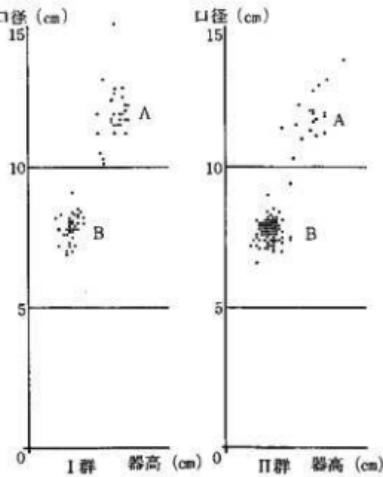


第24図 かわらけの法量(1)

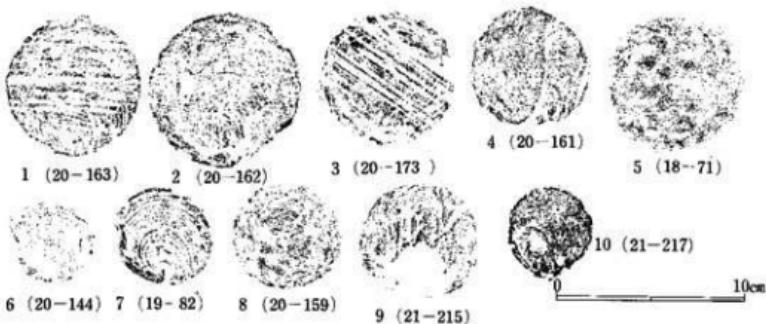
られた。II群では底径4.5~6.5cm、器高1.0~2.0

cm、口径7.0~8.5cmの一群、底径6.0~7.5cm、器高2.5~3.5cm、口径11.0~13.0cmの二群が認められ、I群と同様な法量であった。鎌倉周辺の遺跡より検出されているような口径が3~5cm程度の小さなものはみられず、I、II群共に大形、小形の二群が認められる。尚、I群A、B共に器形差によらず法量が類似しており、成形時の内型がある程度同規格のものを用いていることがうかがえる。II群の場合各類により口径、器高に差が見られたが、小形に属するもの(B)はII群B 8類、II群B 9類を除き底径が類似している。

底部処理は手捏ね成形による指頭整形(I群)、ロクロ成形による回転糸切り(II群)の両者が存在する。I群の場合手捏ね・指頭押圧成形により丸底を形成し、指頭等によりナデ整形を加えている場合が多い。I群B1類・I群B2類にみられるような指頭圧痕の凹凸をナデ消すものもある。II群の場合回転糸切りによるものである。まれに糸切り後にナデ整形をえたものが、II群B 2類・II群B 8類等に多く見られるが、



第25図 かわらけの法量(2)



第26図 かわらけ底部 (1/3) ( )内は実測図番号

II群B類の場合糸切り後故意にナデ整形を行っているというよりも、スレによるものとも考えられるものが多い。底部に圧痕等が観察されるが、I群の場合若干の資料にスノコ痕が認められる。II群の場合93%の資料に圧痕が認められる。圧痕は所謂スノコ痕(第26図1~3)と思われる割板の痕跡が主体を占める。また、スノコ痕の一一種と思われるが、底部外周縁に圧痕がみられるもの(第26図20~19)が数多くある。スノコ痕の他に第26図9に示したような簾状の褶物の圧痕が観察できるものもある。

内面整形は内面外周、見込み部に施されているものと、そうでないものとが認められる。内面整形は内面外周は横ナデ、見込み部には横方向のナデが施されている。この場合のナデ整形はナデにより平坦に仕上げるというよりも、製作時に見込み部に生じた突起を搔き取ったようなナデ整形もみられる。I群の場合すべて割合丹念な内面整形が行われている。II群ではII群B1類、I'類・3類・6類を除いたものに内面整形がみられた。内面整形の行われていないものは見込み部に突起が生じており、これにより内容量の少ないものとなっている。体部の整形はI群とII群では大きく分けられる。I群ではこの群の大きな特徴である指頭整形が底部より続き、多くが体部の2分の1付近より口縁部にかけて横ナデ整形が施されている。この指頭整形と口縁部にかけての横ナデ整形の範囲の関係は体部の立ち上がり方にも関係があるようで、横ナデ整形が体部の3分の2以上の場合は体部の立ち上がりが直に近い形を呈する傾向を示す。また、横ナデの仕方により口縁の様相に変化が生じている。II群は体部の中程が強く屈折するものと、曲線を描き丸味をおびて立ち上がるものの二者が基本的にはみられる。

胎土、焼成、色調についてはI群、II群共に様々なタイプがみられる。I群の場合大きく分けI群A1類とI群B1類・I群B1'類・I群A2類・I群B2類・I群B2'類・I群A3類の2グループに分けられる。便宜上前者をAグループ、後者をBグループとする。Aグループの場合胎土中に砂粒(長石と思われる)を割合多量に含み、粒子が粗くザラつく感じをもつ。BグループはAグループに比べ砂粒の含有が少なく、胎土粒子が粗いものはみられない。I群A3類の場合多

量の褐鉄鉱粒子を含有する傾向がみられる。I群A2類の一部には砂粒等の含有の少ない胎七の上質なものがみられ、他のものと若干の差異が感じられる。II群の場合もI群と同様にA・B両グループが認められるが、量的にはAグループが主体を占める。特にII群B1類・II群B1'類はすべてが砂粒を含み、II群B1類の場合同質の粘土を用いたと思われるようなものが数点存在している。BグループはII群A10類がこれに属する。胎土中に混入物が少なく上質で、褐鉄鉱粒子と思われる赤色細粒が若干含有されている。色調は橙褐色を呈するものが主体を占める。

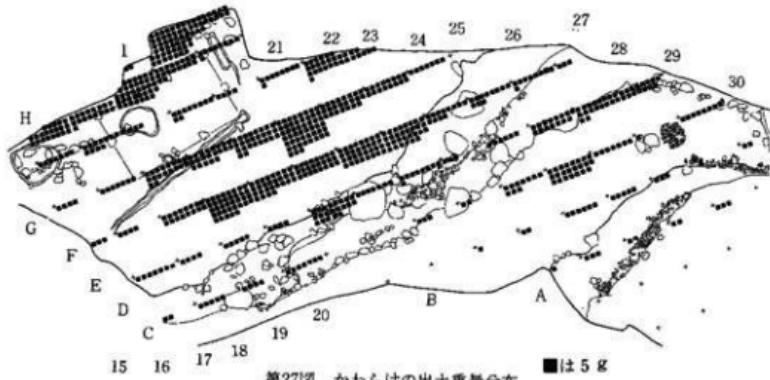
検出されたかわらけのうち油煙が認められたものは第17図8(I群A1類)のみで、このかわらけが精明皿として用いられていたことがうかがえた。他の資料についてはこのような痕跡を残すものは認められず、生活用具の性格を端的に表わしているものはなかった。

かわらけの出土分布について 今回の調査により検出されたかわらけの点数は9,170点である。これらの分布は調査区内においてある程度の偏在性がみられた。特に調査区の1~14列までについては総数の約2%が検出されたに過ぎず、そのほとんど(約97%)が基壇状遺構1・2の範囲に分布する。そのうち基壇状遺構1周辺では7,524点と最も多く、基壇状遺構2周辺は1,408点である。

基壇状遺構1の分布をみた場合大きく分けてH-18、I-19周辺のグループ、E-19~22、F-19~21周辺のグループの二つの分布が捉えられる。後者のグループは基壇状肩部に検出されたかわらけ溜り周辺に相当する。G-17~20、H-17~20の範囲に検出された建物址の範囲内についてはかわらけの集中する傾向はみられなかった。

基壇状遺構2周辺の分布はC-26、D-26~28周辺に集中する傾向がみられたが、基壇状遺構1にみられた分布よりも遺物数が少ない傾向を示し、全体的に密度が低い。

分類されたかわらけの群について分布をみると、若干ではあるが偏在性が認められる。I群についてみた場合E-18~22の範囲に集中する傾向がみられ、この群は基壇状遺構1の範囲のみに



第27図 かわらけの出土重量分布

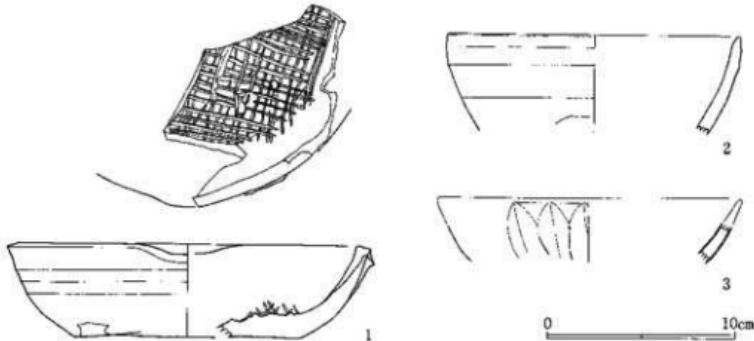
認められるものである。この他の群については特徴的な偏在性は認め難いが、II群A10類については若干ではあるが分布に偏りがみられた。II群A10類はE～20～22に集中する傾向が認められ、かわらけ窓の下層より出土している。

かわらけの年代的位置づけ 今回検出されたかわらけについて、層位的な面、陶磁器類との共伴関係等が不明確で編年的に編成することはできなかった。しかし、最近鎌倉、神奈川県方面を中心に中世における土器の研究がさかんで、編年が示されている。それによるとI群に分類した手捏ね成形のかわらけは鎌倉における編年に比定した場合13世紀前半より、13世紀後半にかけてみられるものようである。他のものについては、I群のもののように大きな特徴を捉えることができず、編年の位置を明確にすることはむつかしい。尚、II群A10類についてはかわらけ窓の下層、基壇状遺構の造成土内より出土しているため、より古い様相のかわらけとして捉えることができよう。

## 2) 中世陶磁器 (第28図1～3)

中世陶磁器は5点出土している。遺跡の主体が中世のわりにはその点数は非常に少ないと見える。器種は塊2点、卸し皿1点を判別し得た。塊1点を除きすべて陶器である。

1は卸し皿である。H-19・G-20・F-21出土。器形は体部下半から内側気味に立ち上がり、口縁端部が斜状に切り落とされている。口縁部はそのためにやや外反する。口唇部の断面は方形でやや凹みをもつ。口縁部の一部はおさえにより片口状を呈している。底部は回転糸切りにより処理され、その後平坦面に置かれたためか底部周縁に平坦な压痕が残る。卸し目は部分的に雜な部分も見られる。刻みは深めで鋭利な範囲工具により付けられたものと思われる。素地は白灰色を呈し堅緻である。釉は灰釉が表裏両面に施釉されており、その色調は淡緑色を呈し部分的に橙色の斑点を有す。釉全面には細かな貢入が見られる。釉の状態・形状等より美濃系のものであると考えられる。



第28図 出土土器 (1/3)

2は大振りの深めの塊である。C-30出土。体部が外反気味に立ち上がり口縁部でやや内側するものである。素地は灰白色を呈しやや軟質である。釉は淡緑色を呈する灰釉が裏面、表面体部の上部に施釉され、腰部は露胎となる。釉には細かな貫入が見られる。瀬戸または美濃系に属するものであろうか。

3は青磁の破片である。C-23出土。細片であるために器形等については推定の域を脱しないが大振りの碗になる様である。碗に比定すればこの破片は体部中程に当たる。体部外面には半肉彫り状の蓮弁文を有している。素地は灰青色を呈し密で堅緻である。釉色は淡灰青色を呈し表裏面に均一に施釉され、部分的に貫入が見られる。釉色、文様等により龍泉窯系に属するものであろうか。

中世陶磁器の分布について 出土数が少ないため、分布状況をみた場合まばらな状況を示しており、かわらけの分布等と若干のズレがみられ重複しない。第28図1に示した鉢皿はF-21、G-20、H-19よりのものが接合し、付近に位置する建物址に関わるものと思われる。他の陶磁器については、そのほとんどが細片であり、器面にスレによる擦痕が認められることにより、他の地点より流出してきた可能性が強い。

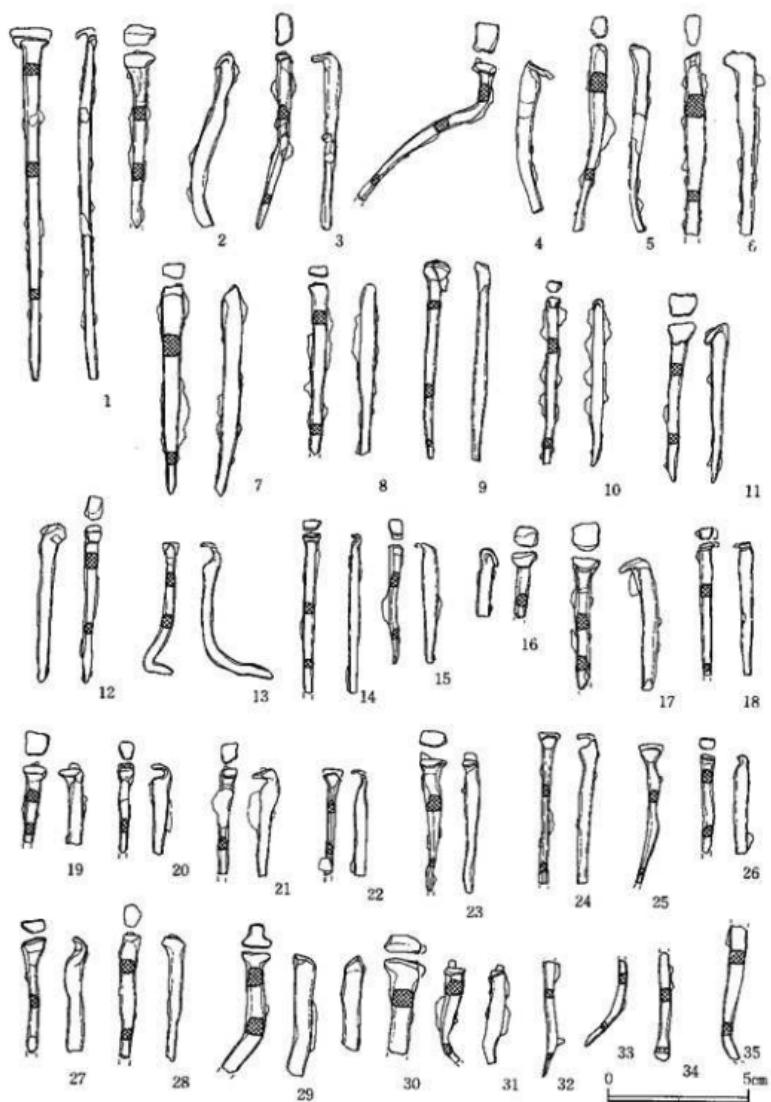
## 2 金属製品

釘類を中心に、板状鉄器、鉄滓、鎧金具状銅製品、留め金具状鉄器、模状鉄器などの46点が出土している。層位的に混然とした状態であったために所属時期は明確ではないが、中世の遺構である基壇状遺構を中心とした範囲より出土しているため、中世遺物として取り扱う。

### 1) 鉄釘 (第29・30図1~41)

金属製品の中で最も出土量の多いもので、完形のものは8点ある。33点についてはその一部が欠損しているもので、頭部欠損4、先端部欠損18、頭部・先端部欠損11で、先端部を欠損するものが最も多い。

鉄釘の分類について 鉄釘はすべて角釘で、断面形が長方形または正方形を呈する。41点が検出された。これらは脚部の長さ、頭部の形態等により分類が可能である。まず脚部の長さによって分類した際4群に分類することができた。I群は10cm以上のもの(1)、II群は6~7cmの範囲のもの(2~9)、III群は5~6cmのもの(10~14)、IV群は4~5cmのもので、脚部の長さが5~7cmの長さを呈するものが主体を占める。これを曲尺でみると2寸、1寸5分のものの二者が存在するようで、長さのバラつきは製作時の鍛え方により若干の相違が生じたものである。断面の厚さはI群からIV群まで0.3~0.7cmの間に包括され、0.4~0.5cmを呈するものが主体を占める。断面形は四角形を呈するものが主体を占めるが、22~24のように三角形に近い形を呈するものである。頭部形状は折曲げ方等によりA~E類に分類可能である。AからCは扁平に鍛え伸ばした頭部を折り曲げるものでその状態により分類される。A類は軽く頭部を叩いた後90度頭を折り曲げるものである(2・10・11・16)。B類は頭部を板状に伸ばした後に「ア」の字状に折り曲げたものである(1・3・15・17~19)。C類は伸ばした板状のものを脚部に付く形で折り曲げたものである

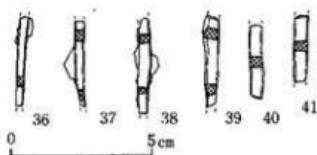


第29図 出土鉄製品 (1 / 2)

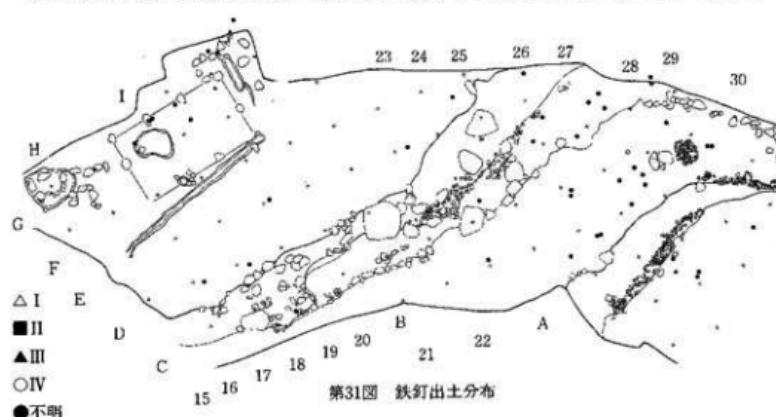
(4・12~14・20~27)。D類、E類はA~C類と頭部形状が異なる。頭部を鍛える行程において頭部を形作り折り曲げる行程を行ってはいない。D類は頭部を鍛えることにより、「状をなすようにしておき、基本的にB類に近い形をなすものである。また、8のように脚部と頭部の区別のつきにくいものもある(5~8・28)。

E類は頭部をT字状に鍛えているものでD類同様折り曲げ行程を行ってはいない(29・30)。

以上のように鉄釘は頭部の形態、長さにより分類することができた。これによると、長さが6



第30図 出土鉄製品(2) (1/2)



第31図 鉄釘出土分布

~7 cm前後、頭部形態はA~C類の頭部を折り曲げるものが中心となり、特にC類の頭部をすべて折り曲げてしまうものが主体を占める。頭部の分類においてA~C類に形態により細分を行ったが、基本的には頭部が折り曲げられている点では同類である。また、鉄釘が打ち込まれる際に折り曲げの形狀は変化すると考えられ、頭部の折り曲げの差は直接的に鉄釘の差として捉えることはできないであろう。I群に属する第29図1のような全長が12.2 cm以上の長い鉄釘はまれに検出されているようで、II群・III群などとは長さの点よりその性格に違いが感じられる。

**鉄釘の分布について** 鉄釘の分布は第31図に示したようにある程度偏在性が認められた。大別すると基壇状遺構1内の建物址1周辺と、基壇状遺構2の北西範囲である。前者をAグループ、後者をBグループとする。Aグループの場合鉄釘は、建物址の礎石周辺、建物址西側の石組み周辺に散在する。鉄釘はII群に属し、頭部を折り曲げるものが中心となる。BグループはC-26・27グリッドを中心に散在する。Aグループでは割合完形品が検出されたのに対し、Bグループでは欠損品、特に頭部を欠損するものが多く、どのような種類が主体を占めるか捉えることはできなかった。Aグループの鉄釘の分布は建物址1に伴うもの、Bグループは鉄釘の集中度より建物址の存在が考えられ、これに伴うものとして捉えることができよう。

第4表 出土鉄釘一覧表〔単位cm、( )内は現在値〕

捕獲番号	出土地区	釘型式	長さ	幅	重量(g)	備考
第29図 1	E-24 №8	I B	(12.2)	0.6	1.5	頭部欠損
2	I-20 №8	II A	(6.5)	0.6	5.5	先端部欠損
3	C-24	II B	(6.4)	0.5	5.5	
4	F-24 №16	II C	(7.1)	0.6	8.5	先端部欠損
5	H-17 №13	II D	(6.7)	0.7	8.0	"
6	I-20 №11	"	(6.5)	0.7	8.0	"
7	I-20 №10	"	7.5	0.7	8.5	
8	I-20 №1	"	(6.1)	0.5	8.5	先端部欠損
9	E-28 №32	II	7.1	0.5	8.0	
10	I-20 №3	III A	5.9	0.5	4.5	
11	H-19 №10	"	5.7	0.4	4.5	
12	I-20 №4	III C	5.6	0.5	6.0	
13	F-20 №11	"	6.2	0.5	4.5	
14	D-21	"	(5.7)	0.4	4.5	先端部欠損
15	№6	IV B	4.3	0.5	4.0	
16	B-25 №37	A	(2.4)	0.5	3.0	先端部欠損
17	D-24 №1	B	(4.7)	0.6	6.0	"
18	H-19 №15	"	(4.7)	0.4	3.0	先端、頭部欠損
19	D-19 №14	"	(2.8)	0.5	4.0	先端部欠損
20	D-28 №32	C	(3.3)	0.5	3.0	"
21	B-26 №20	"	(3.8)	0.4	4.0	"
22	C-19 №17	"	(3.6)	0.4	3.0	先端、頭部欠損
23	H-18 №37	"	(4.8)	0.6	4.0	先端部欠損
24	H-18 №9	"	(5.3)	0.4	3.5	先端、頭部欠損

挿図番号	出土地区	釘型式	長さ	幅	重量(g)	備考
第29図	D-28 №35	C	(4.9)	0.4	3.0	先端、頭部欠損
	C-28 №26	"	(3.5)	0.4	2.0	先端部欠損
	№2	"	(4.1)	0.4	3.5	"
	H-19 №7	D	(4.5)	0.5	4.5	"
	№1	E	(4.4)	0.7	8.0	"
	C-28 №33	"	(3.4)	0.7	6.0	"
	E-27 №19		(3.5)	0.7	4.0	"
	№3		(4.1)	0.4	2.0	頭部欠損
	F-25		(3.5)	0.3	1.5	"
	D-26 №18		(3.8)	0.4	2.0	"
第30図	F-23 №12		(4.9)	0.5	3.0	先端、頭部欠損
	A-28 №24		(3.1)	0.3	1.5	"
	C-28 №27		(2.8)	0.4	2.0	"
	A-30 №31		(3.4)	0.4	2.5	"
	№5		(3.3)	0.6	2.0	"
40	A-26		(2.6)	0.5	1.5	"
41	F-25		(2.4)	0.5	2.5	"

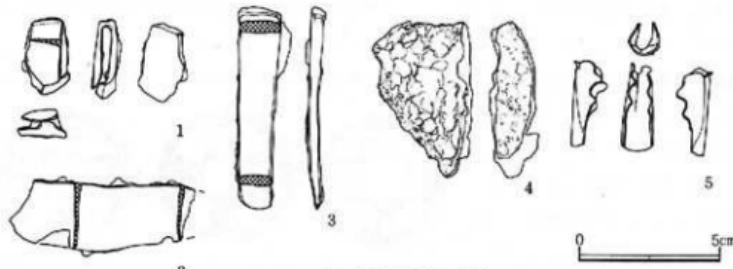
## 2) 留め金具状鉄器 (第32図1)

C-30出土。断面形が三角形を呈する鉄片を折曲げO状にしているものである。製作工程は最初鉄片末端をL字状に折り、この端にもう一端が付くような形で折り曲げを行っている。形状等より鉄器の着柄部分に関わる留め金具であると考えられる。

## 3) 板状鉄器 (第32図2)

G-17出土。厚さは1~2mmで一辺が外側する。これに相対する辺は直線状をなし、平面形状を見ただけでは刀子の一部かとも思われるものである。しかし、薄手で外側している辺は刃部のようには見えない。

## 4) 横状鉄器 (第32図3)



第32図 出土金属製品 (1/2)

C-30出土。厚さ0.9cmを測る。板状で断面形は楔形を呈する。側面形はやや彎曲を呈する。頂部は厚めになっておりやや潰れたような感を受ける。

### 5) 鉄滓 (第32図4)

F-22出土。平面形が $5.6 \times 3.5\text{cm}$ の楔形を呈し、厚さは1.5cmを測る。表面には気泡状のふくらみがみられる。側面は切り取られたような痕跡がみられる。このような形状を示すものが高部遺跡からも検出されている。重量は41gである。

### 6) 飾金具状銅製品 (第32図5)

C-26より出土したもので、長さ3.1cm、幅1.2cmの断面形がU字状を呈するものである。製作は側縁を波状に成形した幅2.9cm×長さ3.1cmの鋼板の一方を狭く折り曲げている。どのような性格のものか判然とはしないが、形状より考えると棒状のものを巻く金具と考えられる。

金属製品の分布について 鉄釘を除く留め金具状鉄器、板状鉄器、楔状鉄器、鉄滓、飾金具状銅製品について分布状態をみた場合、基壇状遺構1に伴うものと、基壇状遺構2に伴うものとに分けることができる。分布の状態は鉄釘の分布に類似し、建物址の存在が考えられる範囲付近に集中する傾向がみられる。

## 3 銭貨

唐・北宋錢が5点出土している。1点は腐蝕が激しく判読が不可能である。判読できたものは開元通寶(621年初鑄)、天禧通寶(1017年初鑄)、天聖元寶(1023年初鑄)、元符通寶(1098年初鑄)の4種類である。

### 1) 銭貨 (第33図1~3)

1は鋳造の悪い鉄錢の開元通寶である。書体は楷書体であるが鋳造、腐蝕のため明確でない。特に開の字体は鋳潰れた状態である。

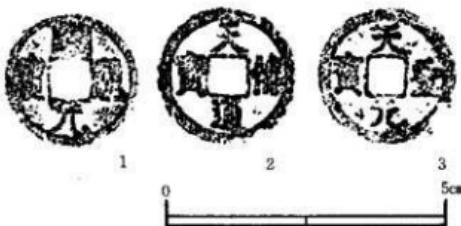
2は銅錢の天禧通寶である。鋳造は良好で、また書体もしっかりした楷書体である。

3は銅錢の天聖元寶である。鋳造、書体(楷書体)共にしっかりしているが、聖の字体については鋳潰れか手ズレ等による摩滅のため、やや不明瞭な字体となっている。

元符通寶については遺存状態が悪いために拓影を示すことができないが、書体等については判

別できる。書体は行書体でしっかりしている。鋳造も良好であるが腐蝕によりボロボロとする状態である。

銭貨の分布について 銭貨は基壇状遺構1内に集中する傾向がみられる。特にI-20グリッドを中心とした建物址1の北東隅に集中する傾向がみられる。出土状態は他の遺物と同様で特異な出土状況を示すものはない。銭貨が建物址付近より出土した点などにより奉斎銭的な性格を有するものとして考えられよう。



第33図 出土銭貨 (1/1)

第5表 山土銭貨一覧表 [単位:cm]

挿図番号	出土区	錢名	破損度	外径	郭内径	厚さ	備考
第33図1	F-24	開元通寶	完形	2.3	0.8	0.1	楷書体、郭抜け、摩滅
2	F-4	天禧通寶	〃	2.5	0.8	0.15	楷書体、郭がややズレる
3	I-20	天聖元寶	〃	2.4	0.75	0.1	楷書体
	F-4	元符通寶	大破				行書体
	I-20	口口元口	〃				楷書体

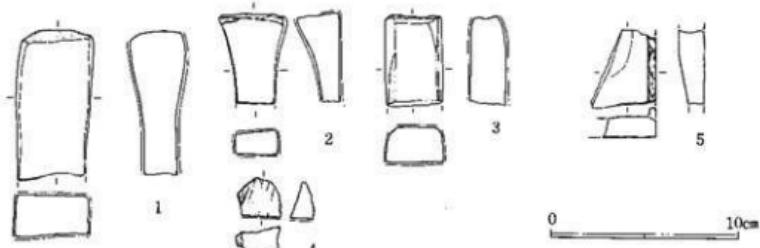
#### 4 石製品

砥石、硯の2種類5点が出土している。所属時期については不明であるが一応中世の遺物として取り扱っておく。

##### 1) 砥石 (第34図1~4)

4点が出土している。調査面積のわりにはその出土数は多く様々な種類のものが出土している。砥石の分類について 砥石はその機能部である研ぎ面による分類、石材による分類等を考えられるが、今回検出された砥石はすべて粘板岩系の石材を用いているため、研ぎ面により分類すると、4面を研ぎ面とするもの(I群)3点、1面を研ぎ面とするもの(II群)がみられる。I群の場合形状は長方体を呈し、上下端を除いた4面を研ぎ面とする。上下端は自然面を残すものと、人為的に折断したものがみられる。II群は類例の少ないものである。素材裸の一端だけに研ぎ面を有し、規格も小形のものである。

1・2は摩耗により彎曲しており、一方の端部が欠損している。断面形は角のある不整四角形



第34図 出土石製品 (1/3)

を呈する。端部には自然面を残している。

3は断面形か蒲鉾状をなすもので、側面の一部に自然面を残す。一方の端部を欠損しており、もう一方は、製作の際に折断されたような痕跡が見られる。

4は素材課の木口部を平坦な研ぎ面としているもので、研ぎ面以外は自然面が残されている。

## 2) 砥 (第34図5)

破片1点が御手洗川の川底より採集された。両端及び縁を欠損しており、陸部の一部が残存しているに過ぎない。陸部は使用による磨耗が見られる。全体の形状については欠損部が多く推定の域を脱しないが、長方形を呈するものであろうか（所属時期については不明である）。

石製品の分布について 砥については御手洗川よりの採集であるため、出土地点の明確な砥石について考える。砥石はすべて基壇状遺構1内より検出されている。特にH・I-20グリッドに3点が検出され、集中する傾向が取看できる。このH・I-20グリッドは建物址1の北西隅側に当たり、何らかの形で建物址に関わるものであろう。この分布を砥石の形態別でみると、偏在性は認められなく、同一の範囲より検出されている。

第6表 出土砥石一覧表〔単位cm、( )内は現存値〕

捕獲番号	出土地点	長さ	幅 最大・最小	厚さ 最大・最小	長さ	使用面数	石材	破損
第34図1	I-20	(8.1)	3.9 3.6	2.8 1.7	120	4	粘板岩	一端欠損
2	D-27	(4.8)	3.6 2.1	2.3 1.0	36	4	"	"
3	G-21	(4.9)	3.0 2.9	1.9 1.6	55	4	"	一端折断
4	I-20	2.0	2.2 1.0	1.3 0.2	8	1	"	完形

## 第4節 近世、近代の遺物

明確な層位的把握ができず、また筆者の力量不足などにより、この時期の遺物については近世から近代というような大まかな時間枠でしか捉えることができなかつた。しかし、遺物のあり方

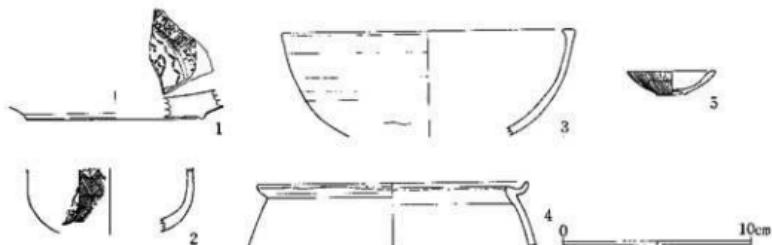
よりみると大抵に近世末の遺物と近代初期～中期頃の遺物に分けることができると思われる。遺物は近世・近代陶磁器、近代ガラス器など出土している。

## 1 土器

近世・近代陶磁器が36点出土している。(このうち1点は現代陶器であるため除く。) 検出された土器はすべて施釉がされている陶器、磁器等で、土器質のものは検出されていない。土器とは若干異なるが、近代の型押しによるガラス小鉢破片も出土している。

### 1) 近世・近代陶磁器 (第35図1～5)

近世・近代遺物の中心となるものは陶磁器であり、35点が出土している。このうち磁器は22点、陶器が13点である。磁器の場合そのほとんどが呉須の発色による藍系統の染付を有する茶碗、皿である。呉須の藍色には淡い青色を示すものと、コバルトブルーを示すものがある。また、染付の状態についても手描きによるもの、版型による摺込み等によるものが認められる。版型による



第35図 出土土器 (1/3)

摺込み等によるものは概してコバルトブルーの発色を呈する藍が染付され、手描きのものについては淡い青色や、線描がぼけた染付がなされている。

陶器は灰釉と鉄釉を施釉するものの二者に分けられる。器種には茶碗、小甕がある。これらの陶器はその特徴より瀬戸窯のものと思われる。

1は内面に波状の文様を摺込みにより施す。染付の藍色はコバルトブルーを呈しややぼけた。器形は大皿を呈すると思われる。底部は厚く削り出しによる低い高台を有する。釉は淡い青味をおびたもので、底部を除き均一にかけられている。素地は白色を呈し、緻密で焼成も堅緻である。底径9.4cm。

2は外面に区画文を染付したもので、染付の色調は淡い藍色を呈す。器形は茶碗となるものであろう。素地は白色を呈し緻密で焼成は堅緻である。

3は口唇部が若干内凹する茶碗である。釉は表裏両面に鉄釉が施されているが、腰部にかけては露体部がみられる。表地は白黄色で黒色粒子がとぶ。口径15.8cm。

4は小甕の破片と思われるもので体部が内凹気味に立ち上がり口縁部にて外側に折れ蓋の受け

第7表 出土近世・近代陶磁器一覧表

掲図番号	種類、器種	出土区	残存部	施釉、文様
第35図 1	磁器 大皿	E - 5	底 部	滑り込み、青海波文？
	“ 小皿	F - 4	口 緑 部	“ 、花文
	“	G - 17	体 部	“ 、花文？
	“ 茶碗	F - 27	口 緑 部	“ 、花文？、麻の葉文
第35図 2	“ “	D - 6	体 部	手描き
	“ “?	F - 4	口 緑 部	“ 、横線
	“	E - 5	体 部	“ 、花文？
	“	“	“	“ 、 “ ?
	“ 茶碗	G - 19	“	“
	“	D - 18	“	“
	“ 茶碗	A - 28	口 緑 部	“
	“	B - 30	体 部	“
	“ 茶碗	D - 23	口 緑 部	“ 、花文
	“	F - 27	体 部	“
第35図 5	“ 紅皿	E - 5	1 / 2	型抜き放射状沈線
	“	“	体 部	
	“	F - 4	“	
	“ 茶碗	F - 6	底 部	
	“ ”	“	口 緑 部	
	“ ”	“	体 部	
	“ ”	D - 28	“	
	“ ”	H - 15	“	
	陶器 茶碗	E - 3	口 緑 部	灰 釉
	“ ”	E - 5	“	“

挿図番号	種類、器種	出土区	残存部	施釉、文様
第35図 3	陶器	E - 5	体 部	灰 艹
		"	"	"
		F - 6	"	"
		"	"	"
	甌	H - 16	口 緑 部	"
		C - 30	"	"
	茶 塙	D - 28	"	"
		E - 17	体 部	"
		E-19, G-19 C-23	口 緑 部	鉄 艹
	"	D - 28	体 部	鉄 艹、横位、櫛齒状沈線

部を作り出している。釉は蓋受け部を除き表裏共に灰釉が施釉されており、貫入が見られる。素地は灰白色を呈し割合緻密である。焼成は良好。口径14.5cm。

5は紅皿である。体部が緩やかな丸味をもちやや内側気味に立ち上がるるもので、口唇部はシャープな断面を呈す。型押しによるものと思われ、低い不明瞭な高台を有す。体部には放射状の沈線が施される。釉は白色のものが内面、口縁部に施されている。素地は混入物の少ない白色を呈し、堅緻である。器高1.3cm、口径4.6cmである。これに類似する紅皿が松本市新村秋葉原遺跡より出土している。

陶磁器の分布について 近世・近代陶磁器は大きく三つの分布をもつ。E-5、F-4、F-6グリッドを中心とする範囲(Aグループ)、御手洗川に沿ったE-17、G-17、H-15グリッドの範囲(Bグループ)、調査区北東隅のD-28グリッド周辺(Cグループ)がこれに相当する。B・Cグループはある一ヶ所に集中する傾向ではなく、ある程度の範囲に散在する分布状態を示すが、Aグループについては、他のグループに比べある程度集中する傾向が認められた。特にこのグループには磁器が集中する傾向がみられる。

これらの陶磁器類はその大半が明治以降の近代陶磁器が主体を占め、種類のわりには細片が多く生活址に伴う遺物としてよりも、むしろ畑作の堆肥に混入するものや、ごみの廃棄に伴うものとして捉えることができよう。

## 第VI章 調査の成果と課題

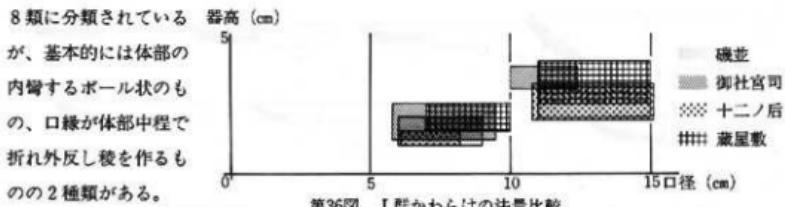
### 第1節 磯並遺跡出土のかわらけについて

#### 1 はじめに

磯並遺跡からは多量のかわらけが検出されている。これらはその様式的な特徴から中世のはば全般にわたるものと思われ、したがってその内容も複雑な様相をもつものである。また、貿易及び国内産陶器との伴出例がなく、かつ出土層位が混然としていたことなどより、ここでは一定の様式としてのまとまりをもつI群（手捏ね技法）のかわらけとII群A10類のかわらけ群（擬似高台かわらけ）について若干の考察を加えたい。

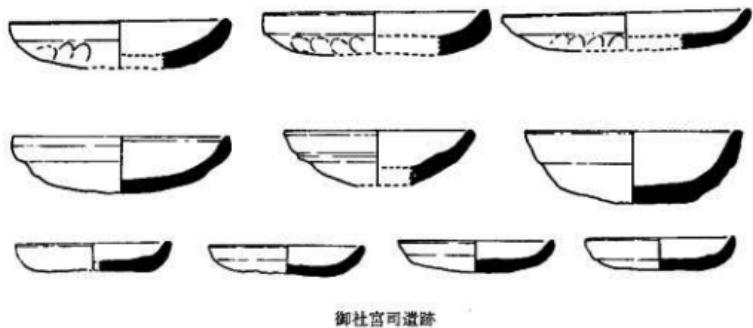
#### 2 手捏ね技法によるかわらけ群（I群）

器形と法量 いわゆる内型成形、手捏ね成形によるかわらけ群である。今回検出されたかわらけの内この群に属するものは全体の約30%である。基本的に成形は粘土紐の巻き上げによるものようで、第17図6に示すように接合痕を残すものもある。この群は法量、器形により大きく8類に分類されている 器高(cm)

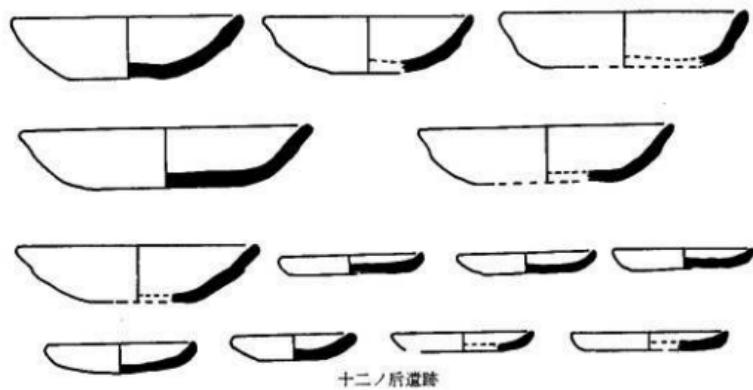


このような手捏ね技法によるかわらけは、現在のところ茅野市御社宮司遺跡（小林・他 1982）・諏訪市十二ノ后遺跡（鈴木・他 1976）・諏訪市旧御射山遺跡（金井 1965）・東部町古屋敷遺跡（小林・他 1986）などより検出されており、特に諏訪地方を中心とした地域に集中する傾向がみられる。これらの遺跡のかわらけも、基本的に本遺跡にみられる器形の範疇に入るものである。

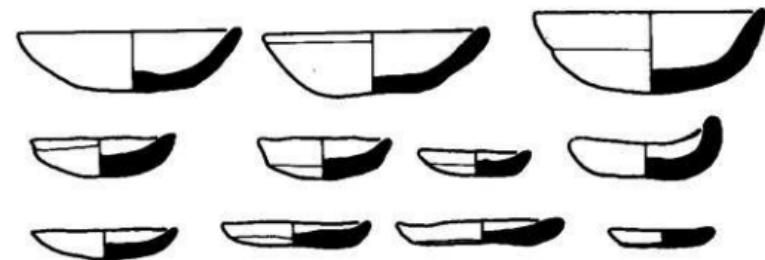
法量には大形と小形の両者がみられる。手捏ね技法によるかわらけが検出されている他の遺跡をみると、茅野市御社宮司遺跡では大形のもの口径10.0~12.4cm、器高3.0~3.8cm。小形のもの口径5.8~9.5cm、器高1.2~2.5cm。諏訪市十二ノ后遺跡では、大形のもの口径10.8~15.1cm、器高2.9~3.2cm。小形のもの口径6.1~8.2cm、器高6.1~8.2cm、器高1.0~1.5cm。諏訪市旧御射山遺跡では、大形のもの口径10~11.5cm、中形のもの口径7~10cm。小形のもの口径5~7cm。諏訪市藏屋敷遺跡では、大形のもの口径11~15cm、器高2.5~4cm。小形のもの口径7~10cm、器高



御社宮司遺跡



十二ノ后遺跡



旧御射山遺跡

第37図 他遺跡出土の手捏ねかわらけ群 (1 / 3)

1.5~2.5cm。本遺跡では、大形のもの口径10~15cm、器高2.5~4cm。小形のもの口径6~9cm、器高1~2cmである。このように遺跡別にみても法量の相違はあまり認められず、このことは内型の型にある程度の規範があったと考えるべきであろう。また、流通の問題も考慮しなくてはならないであろう。

**時間的位置づけ** 今回検出された手捏ねかわらけで、貿易及び国内産陶磁器との共伴による時間的位置づけができる資料は皆無であり、実年代を想定することはできなかった。そこで他遺跡との相対的関係を求め、時間的位置づけを行いたい。県内において、中世土器の研究をみた場合、その内容は未整理の状況にある。その中で1978年に調査が行われた茅野市御社宮司遺跡は、中世遺構の把握と土師質土器や内耳土器の位置づけ等に新見地を与えた。今回、かわらけの分類作業をする上で御社宮司遺跡の土師質土器の再検討を行ったが、その結果土師質土器ⅢE・Fが礎並遺跡のI群（手捏ねかわらけ）と同様な一群であることが明確となった。このかわらけについて、報告書の中で小林氏は出土層位より15世紀中葉以降の年代を与えている。しかし、御社宮司遺跡の手捏ねかわらけの出土遺構は、中世遺構のなかで最も古い段階に属する土壤第I群（5号土壇内より小形手捏ねかわらけが7点出土している）であること等を考慮すると、むしろ15世紀以前に位置づけられ、御社宮司遺跡土壤群の形成された第1段階（13世紀末~14世紀前半）に相当するものであろう。また、最近神奈川県方面を中心に盛んに行われている中世における在地系土器の研究（服部 1984・神奈川考古同人会 1986）によれば、このような手捏ねかわらけは13世紀中葉から13世紀後半に多出する特徴的な一群として捉えられている。これらのことより、本遺跡においては手捏ねによるかわらけの一群を13世紀中葉から13世紀後半に属するものとしてとらえたい。

### 3 模似高台かわらけ群（II群A10類）

**器形と法量** ロクロ成形のかわらけのなかで、高台部が肥厚し円筒形を呈する特徴的な一群がみられる。検出された資料はすべて底部破片のみで全体の様相を把握することはできなかったが、若干遺存する体部より考えると体部が直線的に開く器形が推定できる。法量は大形を呈すると思われるが、底径のあり方よりみると6.8cm~7.2cmの一一群と、4.3~5.3cmの一一群がみられ、大形の他に中形の法量を有する一群が存在するようである。底部は、大形と中形では若干の相違がみられる。中形のものは、大形に比べ模似高台が垂直に立ち上がり、大形のものは、中形のものよりわずかに外傾する。底部厚は1.5~2.4cmで、底部周縁がやや張り出す傾向のものが主体である。底部処理は、いづれも回転糸切がなされており、糸切後ナデを加えている。

**胎土と色調** このかわらけの一群は器形等に大きな特徴をもっているが、その他に胎土等にも特色がみられる。胎土は既して混入物の少ない上質なもので、赤色細粒（褐鉄鉱粒子）を含有し粉性の胎土である。色調は橙褐色を呈するものが主体である。

**時間的位置づけ** この一群のかわらけについても他のかわらけと同様に直接的に時間的位置を明確にすることはできなかった。そこでこのかわらけ群の大きな特徴である模似高台に着目

し、他の例をみると、このような高台を有する土器は茅野市高部遺跡（鵜飼 1983）・岡谷市橋原遺跡（岡田 1981）・山梨県笠木地蔵遺跡（長沢・他 1985）等より検出されており、平安時代末期から中世初頭にかけての土器の一様相であることが指摘されている。

今回検出されている擬似高台かわらけの器形は坂本氏の分類（坂本 1986）によると柱状高台III類に類似しており、このような群は12世紀中葉から12世紀末葉に位置づけられている。また、鎌倉におけるかわらけ編年（服部 1984）の第I期（12世紀末から13世紀初頭）の様相、「(1) 体部内外面及び内面見込みにロクロ痕を残す。(2) 底部が高台状に残り体部下位に屈曲をもつ。(3) 底部壁が体部壁に比べ著しく厚手である。」にも類似している。今回検出された擬似高台をもつかわらけはこれらの諸系に属するものであり、平安時代末期より続く擬似高台付土器のなかではより新しい段階、中世初頭のかわらけの古い段階に属するものであろう。これを裏づけるように擬似高台をもつかわらけ（II群A10類）が基壇状遺構1の盛り土内、かわらけ溜りの下層から出土している点より、基壇状遺構1上から出土したかわらけ群よりも古い様相のかわらけと考えることができよう。

#### 4まとめ

今回、礎並遺跡から検出されたかわらけのなかでも最も特徴的である、手捏ね技法によるかわらけと擬似高台をもつかわらけについて若干の考察を加えてきた。それによると擬似高台をもつかわらけはより古い様相をもつもので、平安時代末期の擬似高台をもつ土師器の諸系を引くかわらけ群として捉えることができた。手捏ね技法によるかわらけ群は、その特徴的な成形技法により13世紀の一群であることが、他の遺跡との相対関係から明らかとなった。しかし、他ののかわらけ群については、実年代を想定し得る資料の欠除、筆者の力不足により、時期的な編成を行うことができなかった。稿を改めて論ずる所存である。

鵜飼幸雄 1983 「平安時代の住居址と遺物」「高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」「高部遺跡」茅野市教育委員会

岡田正彦 1981 「平安時代以降の遺物」「橋原遺跡における古代以降の様相」「橋原遺跡」岡谷市教育委員会

金井典美 1965 「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡調査概報」「考古学雑誌第46巻第1号」

小林秀夫 1982 「中世以後の遺物」「中世・中世以後の遺構」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—」長野県教育委員会

小林真寿 1986 「平安時代以降の土器」「不動坂遺跡群II古屋敷遺跡群II」東部町教育委員会

坂本英夫 1986 「柱状高台の皿・壺について」「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」「神奈川考古第21号」神奈川考古同人会

佐沢 浩 1976 「中世の遺構と遺物」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—徹訪市その4—」長野県教育委員会

- 長沢宏昌 1985 「平安時代・中世・近世」「まとめ」『笠木地蔵遺跡』 山梨県教育委員会  
服部実喜 1984 「調査の成果と問題点、中世」「藏屋敷遺跡」 錦糸駅舎改築にかかる遺跡調査会  
服部実喜 1984 「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」「神奈川県考古第19号」 神奈川考古同人会

## 第2節 磯並神社と祭式

磯並社は諏訪神社上社の攝末社とされているが、磯並社は諏訪上社の「上十三所」のなかの一つである。上十三所名帳（信濃史料第八卷元正元年十一月）をみると、すでにこのころ、本地垂迹説が採りこまれ、本地仏が定められている。しかしそれより以前から存在したと考えられている神であるが、祭神については判っていない。地元の研究者は、在地の神であるとみている人が多い。上十三所の外に、中十三所と下十三所名帳があるが、ここでは省略しておく。

上十三所名帳によると、大祝居館である前宮所在地の小町屋地籍に6社、守矢神長官屋敷所在地の高部地籍に4社。そのほかは前宮から離れて、大歳社が茅野（駒前）、千野河社が西茅野、楠（葛）井社が上原地籍である。

磯並社は高部地籍にあるが、高部には玉尾社、穂股（股）社、瀬社があって、磯並社をとりまくように位置している。磯並社は磯並社大明神ともいわれ、本地仏は千手観音とされている。

磯並社は玉尾、穂股、瀬の各社に比較すると、10倍も大きい石祠が建立されているが、石祠の西背後は斜角50度くらいの急山腹になっていて、そこを約50m登ると、玉尾、穂股、瀬の三社が点在しており、さらに尾根筋の西側に小袋石、あるいは舟形石と呼ばれる三角錐をした巨岩が屹立している。小袋石の位置からみると、ほぼ真東に磯並社があることになる。

磯並社が史料に現れるのは、嘉祐4年（1238）の「諏訪上社物忌令」に、十三所名帳がみられる。では磯並社はどんな役割をしたのか、文献からうかがってみよう。

**大祝即位と十三所社參** 諏訪上社の大祝は、代替りして位につくことを「位付」、「位次」、「位立」、「位ニ即ク」と書き、「職位」または「即位」と呼んでいる。大祝の即位の原初的な姿は、大祝有貝のときに添書にみられるが、山鳩色の袍衣をぬぎ着せ、「祝ハ神明ノ垂迹ノ初メ御衣ヲ八歳ノ童男ニキキセ給テ、大祝ト称シ、我ニ於テ体ナシ、祝ヲ以テ体トス」と述べて、いろいろ守矢神長家が、即位の秘法を伝えその任に当たってきた。大祝即位の記録は守矢家に伝わり「大祝職位事書（諏訪史料叢書八）」としてまとめられている。

即位についての文献の古い方は、貞応2年（1223）の「諏訪信時、諏訪社上社大祝ノ位ニ即ク。貞応2年12月13日 大祝立給信時ノ即位法 奉授神長頼実神事例式。（信州諏訪詞文書）」がみられる。また暦元年（1238）「諏訪信重、諏訪社上社ノ大祝ノ位ニ即ク。大祝立給信重ノ即位秘法奉授神長政真大祝職位事書、（諏訪史料叢書八）」などからうかがうに、大祝即位のさい神長からの即位秘法と、また即位神事がすでに例式化していたことが判る。

即位の神事を応永4年(1397)「源氏有職源氏社上社大祝ノ位ニ即ク」の例をみよう。

神殿の終の下に源氏社があり、社前の石上にて大祝即位の儀式が、神長の主導により行われる。大宮(上社本宮)に御参りをし、御宮(前宮)に参る。御宝殿(内御魂殿)を称宣に開けさせ七度拝礼し、のち御門戸屋にて神事、のち大祝は神前に例の如く詣である。これがすむと小宮巡りがある。若御子(若宮)・磯並・玉尾・穂俣(殿)・瀬大明神・所政殿・荒玉とまわるが、これが十三所行事である。そして下道より大御門戸にきて、乱ちょう(鉦や鼓と喚声)にはやされ、神殿のまわりを三まわり(御手取道を三巡する事)して後、内御玉殿にて申立をする。我身は次の大明神の御正体になったとして、清器の儀を行い、酒宴がある。そのあと溝上・前宮・久須井(高井)・大歳・千野河に御詣りがある。大祝信有の嫡子有職9歳のとき位についた記録である。

時代が下って文明年間(1484)の二つの記録により大祝即位の概要「大祝職位事書(源氏史料叢書八)」をみると、大体同じであるが、文明17年の記録には、「下宮御参候」とあるのが異なるだけで、また前に記した応永4年の即位の儀式と、十三所御社參はほとんど同様であるから大祝即位の儀式・神事が成立している、強固な伝統を保ってきたことがうかがえる。

大祝即位における十三所社參のうち、磯並社の神事について『大祝職位事書』によってみると、「大祝殿に神長御幣、御手樂をもたせ、神長十三所御即位法授職大法申(文明16年)」とあって、大祝即位のさいの磯並社の神事は、主として御幣、御手樂、大法にあるから、道具の使用は少なかったとみられる。

上　十　三　所			
	神　社　名		所　在　地
一 番	所 大 明 神	阿 弥 陀 女 神	小 町 尾 前 宮
二 ニ	前 宮 大 明 神	如 意 輸 觀 音	〃
三 ニ	磯 並 大 明 神	千 手 觀 音	高 部
四 ニ	大 歲 大 明 神	地 藏 菩 薩	茅 野 町
五 ニ	荒 玉 大 明 神	弁 財 天	小 町 尾
六 ニ	千 野 河 大 明 神 (龜 石 明 神)	文 珠	西 茅 野
七 ニ	相 手 大 明 神	虚 空 嶽	小 町 尾 前 宮
八 ニ	若 御 子 大 明 神	勝 軍	〃
九 ニ	橘 井 大 明 神	薬 師 女 神	上 原
十 ニ	溝 上 大 明 神	聖 觀 音	小 町 尾 前 宮
十一 ニ	瀬 大 明 神	勢 勤	高 部
十二 ニ	玉 尾 大 明 神	愛 染 女 神	〃
十三 ニ	穂 俣 大 明 神	釈迦 如 来	〃

上社春祭りと冬祭り 磯並社の毎年行われる祭りは、上社春祭と冬祭のさい、磯並神事として取り行われている。『源氏大明神絵詞』(神長本)によると、春祭りは「三月一換 十三ヶ日神事

相続ス」とあって、この祭りを諏訪社上社の最大の祭りとし、「一の祭り」とされ「御頭祭」とも、また西の日に行われる内県・大県・大御立座神事から、「西の祭り」「御頭祭」とも呼ばれてきた。

春祭りは三月初午の日（午の日が3回あるときは、中の午の日）から始まるが、中世の例をみてよう。初午の日には、外県大御立座神事（ほほ上伊那地方）のため、童男が神使いとして定められ、御杖柱・大鉢（鉄錫）を持って、前宮での神事のあと出立し、その後「平出泊」（辰野町平出）となり、7泊6日の巡神と称される神事に従う。「一の祭り」最大神事は、「西の日」に行う。内県（茅野市内一部）と、大県（諏訪盆地東北部）大御立座神事が前宮神殿を中心に行われている。その盛儀のありさまは、「絵詞」に詳細に記述されている。13日間の一連の春祭りの最後は、午の日に磯並神事が行われる。

春祭りの磯並神事は「絵詞」によると、「彼社ノ拝殿ニシテ饗膳如常。歩射廿番、切的ヲ用ル、帰路ニ草花ヲ結ヒテカツラトシテ、人コトニ頬ニカケテ家ニカヘル」とある。また、宮地直一博士は、「先ソ磯並社ノ拝殿ニ饗膳アリ、其ノ儀常ノ如シ、（次ニ山神・小袋石ニ御手幣・御酒・御贋、

月 日	神 事	過 渡 神 事		
		外 県 神 使	内 県 神 使	大 県 神 使
3月午日	外県御立座神事	平出泊		
未日	一之祭所政殿神事	小河内泊		
申日	擬祝家入家の神事	真木泊		
酉日	内県・大県御立座神事	伊奈船泊	千野泊	上原泊
戌日	内県宮付御頭	御蘭泊	古田泊	下桑原泊
亥日	大県介御頭	前洲泊	尖崎泊	友之町泊
子日	權祝殿御神事	沢底泊	栗林泊	小井河泊
丑日	前宮御神事	帰着	堤着	真志野泊
寅日	国祭			帰着
卯日	祝日御頭			
辰日	縁宜家入家の神事、野炎神事			
巳日	新申シ、奉祝殿御神事			
午日	磯並御神事			

御穀・瓶等各一前ヲ尊ス） 次ニ廿番ノ歩射ヲ行ウ 其儀切的ヲ用キル（帰路人毎ニ草花ヲ結ヒテ  
「髪トナシ之ヲ掛ク」）（『諏訪史2巻後』）とある。これによると磯並社の拝殿において、前例通りの酒食の宴が行われ、歩射つまり歩いて的を射る競技が行われた。祭りは旧暦3月で今の4月にあたり、祭りが終わると参詣の人たちは下馬沢川、御手洗川の川辺に咲く春の野の草花、ふきんとう、たんぽぽなどを編んで髪に飾ったり、首にかけて、春を弄しながら帰って行く。磯並社の神事の費用は、「神田八反を当られた。但し永録下知状には竹居庄に領田五段をもって勤め」（『諏訪史2巻後』）とあるから、盛大に行われたとみられる。したがって磯並社春祭りにおいては、酒・御穀・

肴などが容器に盛られ、前宮における御頭祭のようにかわらけも沢山用意されたものとみられる。

12月22日より冬の大祭が、8日間にわたって続く。これは上社春祭りと対応するものである。

12月 22日	一之御祭所政殿神事
23日	擬祝殿神事
24日	大海祭
25日	むさての神事
26日	瑞宣殿神事
27日	剛祝殿神事
28日	磯並御神事

これを『絵詞』でみると、「一ノ御祭は大祝以下の神官、所政戸社ニマウツ、行列例ノ如シ、饗膳ノ儀又常ノ如シ、同日御室入。大穴ヲ掘テ、其内ニ柱ヲ立テ、棟ヲ高メ蓋ヲ高テ、軒ノタル木土ヲササエクリ。今日第一ノ御体ヲ入奉ル」とあって、御室入神事がはじまる。その後一連の神秘な神事がつづき、28日は磯並神事が行われる。『絵詞』には「瓶子調へ。神官氏人乱舞興宴アリ。」とあって、宮地博士は「旧記によるに、之を春季の例により、同様饗膳の後、山神・小袋石にも奉幣する。」(『諏訪史2巻後』)と述べ、磯並社における神事に引きつづき、御室の行事として瓶子そろへ、神官・氏子乱舞すると述べている。冬祭りの磯並社祭が春祭りと同様とすると、酒・御穀・御贋を奉げ、相嘗のためのかわらけも用意されたとみられる。

**上社花会** 「花会」の記録の出てくるのは、13世紀末からで、「諏訪社上社 高井郡中村郷並ニ井上郷ヲシテ 本年花会御堂頭番役ヲ勤仕セシム」(守矢文書)応永4年とみられる。また『絵詞』の諏訪祭春上2月15日には、「下宮・神宮寺ニシテ 常楽会舞樂アリ。駕專涅槃ノ令節ヲ迎ヘテ神明結縁ノ大会ヲ行フ。四月十八日ハ、上宮ニシテ花ノ会アリ」とあって、上社において花会の行われていたことが判る。

花会とは祇迦誕生を祝う祭りで4月8日に行われており、降誕会、灌仏会、仏生会、龍華会とも呼ばれており、日本では季節的に花祭りとして喜ばれ、東南アジア各地にも広範に親しまれた祭りである。一方下社の常楽会は、祇迦入滅の日として涅槃会とも呼ばれる祭りで、諏訪神社上下社が神仏混淆になって、「両社相對シテ如来設化ノ始終ヲツカサドル」(『絵詞』)とされるようになってきている。

上社で行われた花会の次第は、4月7日大宮(本宮)花会があり、これに当る頭役は宮舞頭である。宮地博士によると、大祝以下神官・社僧・氏子の多数が着座、饗膳、引物の分配の後、頭人が金・銀・絹布・白紙等を神前に捧げるとある。楼門前の廊下においては、「都鄙令人会合ス」と表現されたように、都の舞人、楽師の米社もあって、舞踊、楽隊演奏に盛大な人気があったようである。

翌8日は神宮寺花会として、役には御堂舞頭があたるが、御堂舞頭とは花祭りの主役である、祇迦を入れる花で飾った花御堂を経営するを主としたのであろう。宮地博士の記述をみると、堂

前中央に高座2台を置き、講師と問者の席とされて、法花講論を行う。大祝以下神官・両頭らも参會して席に座す。講論が終わると氏子、子供らは花箱をもち、楽隊がつき大行進を行う。この祭りは諏訪人にとっては上社の見なれた、武術・大追物・相撲などの武骨な祭りと異なり、花の行列、舞楽の演奏、酒と菜魚の酒宴が終日はなやかにつづく楽しい春の祭りであった。つづいて9日は磯並神事が行われ、頭役は磯並頭があたる。この日は前宮神事も行われるが、これは前日に引きつづき前宮、磯並社において、舞樂御頭の役により、正式な舞樂、御児之舞を奏するが、例外として巫女の舞も行われた。磯並社においては饗膳が行われ猪・鹿を供えたとある。

華やかな一連の上社花会もその終宴は、磯並社に参って行うが、神宮寺花会の饗膳には菜魚とあるのに、磯並社では獸であって何となく、華やかさと田舎臭さの対比がうかがえる。この磯並社の饗膳にさいしても、当然、饗膳の席と酒食の用器が揃えられたであろう。

**磯並社の境内** 磯並社の境内の様子については、大祝即位式の十三所社參の記録からうかがうと、磯並一（小袋石）—玉尾—穗股—瀬社とめぐるが、現在の配置は発掘された、基壇状造構1の西上の平坦面は中央に磯並社の石祠がある。この磯並社を中心にして、磯並社と小袋石の中間の斜面を僅かに削平し、北側に小石祠一基、南側に小石祠二基がみられる。昭和55年代までは各小石祠に社名札がつけられていたが、今日は失われているので、ここでは決定しないでおく。

上社関係の絵図でよく知られているのは、天正の絵図といわれる權 祝矢島家蔵の絵図があるが、今回は現認できなかった。また「天正のぼろぼろ絵図（伝天正）」と称される神宮寺区蔵の絵図は、写真で『諏訪史2巻後』に載っているし、現認したこともある。さらに上社本宮にも絵図一幅がある。この3枚の絵図の相対的時間的関係は、權祝家蔵絵図を神宮寺区蔵絵図が写したものと言われている。上社蔵絵図も權祝家あるいは神宮寺区蔵絵図の模写だろうといわれている。

絵図の製作年代を天正と伝えているが、神宮寺区蔵絵図、上社蔵絵図とも、權祝家絵図を忠実に模写したものとすると、いづれも天正年間以降の製作とみられる。その主たる根拠は神宮寺宮田渡に、宮川の川筋に囲まれて大祝家が画かれていることから、江戸時代初期つまり、大祝家が前宮から宮田渡に移転以降の製作かと思われる。

神宮寺区蔵絵図によって、磯並社の配置をみると、最上段に小袋石。中段には右（北）から瀬大明神（2間×1間）。次に磯並（2間×3間。2間×2間の2棟）。次に日月神（1間×1間）。次に玉尾明神（3間×2間）。最左端に穂股明神として鳥居だけがみえる。下段とみられる位置には上手に五間廊の1棟、その左に1棟（帝屋とする説あり）あって、下方にはもっとも大きい寄棟の建物（2間×4間）が舞台と記名され画かれている。しかしその絵の下には「今ナシ」の注がある。舞台の左側稍下方に、寄棟（2間×1間）神事屋と記名された1棟もあるが、これも「今ナシ」の注記がある。

上社絵図は見取図であるから、正確な位置は望むべくもない。しかし「大祝職位事書」あるいは「春祭り」「冬祭り」そして「上社花会」をみると、神事、饗膳が行われているから、それに使用されるべき建物が必要である。磯並社、玉尾社、穂股社、瀬社について画かれている建物は、現

存する石祠の上覆屋であったのか、建築物が老朽化して再建されずに石祠に替えたのか、の二通りの考え方が出来る。一方、神事、饗宴に必要な建物としては、下段に位置している。舞台、神事屋は寄棟造りの比較的大形建築物として画かされている。

磯並社の建物を建築させた記録としては、大永4年(1524)「諏訪社上社 同社磯並社宝殿及ビ前宮三之御柱造営料ヲ伊那郡監田殿ニ徵ス」(「御造営日記写」)とあるように、頭役の造営あるいは造営料として徴収し、建築がなされていたものとみられる。

上社の春祭りと花会の記録は、14世紀末から15世紀中頃まで頻繁に出て来る。春祭りの成立期については、上社最大の祭り「一横(祀)の祭り」と同時とみられるが、上社の経済的基盤を支える「大御立座神事」が中心になっている。したがってこの祭りの最終日に行う磯並神事も、「一横の祭り」の発生、成立と無関係ではない。この祭りの成立時期は決めがたいが、しかし水稲農耕地帯を神事巡行(遷神)することからみて、水稲農耕の祭祀の完成期に成立したものと想定したい。一方花会の行われた時期については、もっとも記録が多いのは15世紀中頃であるが、すでに完成されていた行事のようである。伊藤富雄説を宮地博士は紹介して自説を述べているが、「伊藤氏は絵詞以前の古文献に一切所見を欠く点に立脚し、北条氏滅亡の直前か、足利氏の初項(注1333年頃)をもって創始期と推定されている。(中略)その起源が平安盛世期を遡らないだけは確実」(『諏訪史2巻後』)と述べている。

諏訪社に仏教が取りこまれた時期は、容易に決めがたい。しかし仏寺、堂塔が建立された時期というのは、確實に神仏混淆に入った時期として問題はないと思われる。したがって、諏訪社上社に堂塔、仏像を寄進した記録をもってこれにあててみたい。

正応6年(1293)下伊那の豪族、知久敦幸は諏訪社上社に普賢堂を建立(「諏訪市史年表」)。永年2年(1294)僧観海諏訪社上社神宮寺ノ釈迦三尊像ヲ建立シ、是日、供養ノ行フ(「諏訪史料叢書二十九」)。永仁5年(1297)知久敦幸 諏訪社上社神宮寺ニ銅鐘ヲ寄進ス(「諏訪史料叢書二十九」)。延慶元年(1308) 是日 諏訪上社神宮寺五重塔露盤成ル(「諏訪教育会蔵」) 以上の記録からすると、13世紀末に諏訪社上社に仏教関係の収録が集中しており、また下社においても大祝金判満貞が正安2年(1300)に鎌倉長寺住持、一山一寧を講じて慈雲寺を開創している。このことから上社・下社とも13世紀末にいたり、長く拒否してきた仏教を公認したものとみられる。

14世紀末頃から記録にあらわれる、大祝即位式に十三所社參・花祭り、花会は、多くの場合、「例の如く」とあって、この当時すでに例式化していたものとみられるから、これらの神事、行事はさかのばって開始されていたものとみられる。したがって上社の仏教関係の行事のはじまりは、13世紀前半頃に想定されよう。磯並社における神事もこの時期に行われた可能性が強いとみられる。

## 第VII章 結語

磯並社は今日一般人にはほとんど忘れられた存在で、これは磯並社が諏訪神社の社地であって管理、神事は神社で行っているが、往時の神事が失われたためである。磯並社の神事にはかつて頭役が定められ、大宮（本宮）の宮舞頭、神宮寺普賢堂の御堂舞頭、前宮の前宮頭、そして磯並頭と、大宮、前宮、神宮寺に並ぶ重要な祭祀の場とされていた。古図あるいは頭役の記録によても判るように、磯並社には建造物、ことに神事屋と舞台の存在がうかがえる。そしてそこにおいては、頭役によって神事が行われ、饗膳が行われていた。

今回の発掘調査の結果、遺跡から考察されることは、もっとも広い平坦面である基壇状遺構1と、そこに発見された建物址および建物址の長軸に並行する、つまり東南前面に発見されたかわらけ溜り、また建物址前面に発見された4段の階段状遺構がある。これらの遺構を総合的に考察すると、東南部に4段の階段をもつ基壇が造成され、そこには3間×2間の建物が建てられていた。この建物の東南前面にあるかわらけ溜りと称した遺構から、土器の出土はもっと多く、集積状況は基壇底部に崩れる状況がうかがえ、順次廻棄したとみられる。また建物址の出土品をみると、もっとも多い、手捏ねかわらけ（I群）はかわらけ溜りに多くみられ、建物址内には少ない。また鉄釘の発見も基壇状遺構1に集中する。この建物址は、遺物の出土状況から、建物がかわらけを使用するための建造物であったことは確実で、古図にみる神事屋に相当する建物址かも知れない。

磯並遺跡の年代については、出土したかわらけから考察がなされている。手捏ねかわらけ（I群）は、13世紀中項から末項とみられる。この項は諏訪社上社が仏教を受容した時期で磯並社の神事、つまり花会の初まりと合致するかも知れない。また、II群A10類の擬似高台かわらけは平安末から中世初頭に比定されているが、出土層位の観察からしても、手捏ねかわらけI群より下層からの発見である。これら二群の土器から基壇形成時は12世紀中項からと考えられ、諏訪地方の平安末期の祭祀の一端を示すもので、もしかすると仏教受容前の原始信仰祭祀に用いたものかも知れない。

磯並社の神事のうち、花会の記録は延徳2年（1490）以降みられなくなる。花会が退転したものか、記録を欠いたかは不明である。しかし、天正古図には「今ハナシ」の符がついているから、江戸時代の初め頃には建物は失われており、花会は退転したかも知れない。しかし大祝即位式における十三社参の儀は、「天保12年における賴式（大祝）を最後とし、その後明治維新にあって全く廃絶するに至った」（宮地直一『諏訪史2巻後』）とされるから、江戸時代は磯並神事の衰退期であった。

磯並遺跡の調査は、諏訪地方における茅野市御社宮司遺跡、同市高部遺跡、また霧ヶ峰旧御射山

遺跡の調査を経過して平安末から中世にかけての歴史考古学上の大きい成果をあげた。

最後に、磯並遺跡調査団長にあって、調査をまっとうした故宮坂虎次氏が本報告書の完成をまたずに逝去されたことは、調査団員一同心からの哀悼の意を表し故宮坂虎次氏の志を本報告書に長くとどめたい。

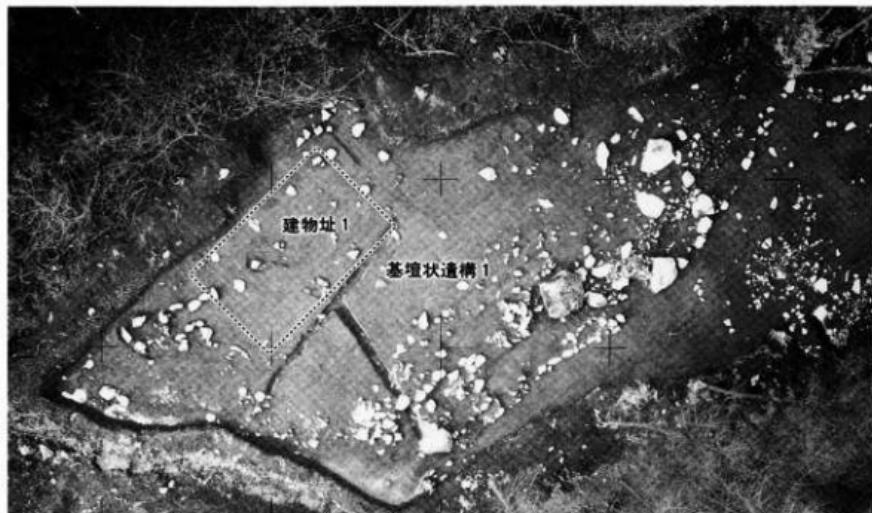
# 図 版



1 遺跡近景（南方方向から）



2 調査区全景（北方向から）



3 調査区航空写真（基壇状遺構 1）



4 調査区航空写真（基壇状遺構 2）



5 基壇状遺構 1 全景



6 碓石をもつ建物址（北東方向から）



7 基壇状遺構 1 斜面部の状態（北方向から）



8 基壇状遺構 1 斜面部の状態（東南方向から）



9 基壇状遺構 1 斜面部葺石の状態



10 基壇状遺構 1 斜面部の大石と裾部の石列 1



11 階段状遺構（東方向から）



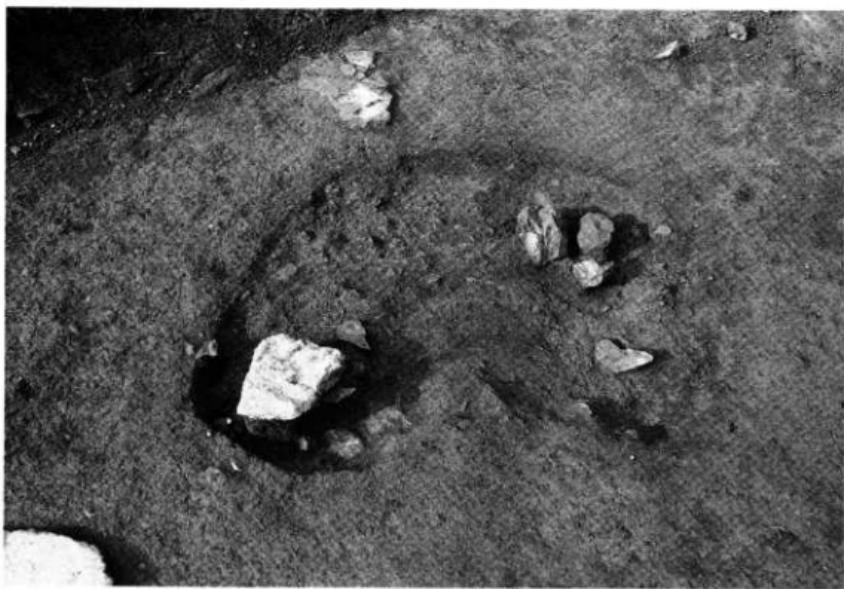
12 階段状遺構（西方向から）



13 基壇肩部のかわらけ溜り



14 かわらけ溜りのかわらけ出土状態



15 土坑 1



16 石組み状遺構 1



17 基壇状遺構 2 全景（北西方向から）



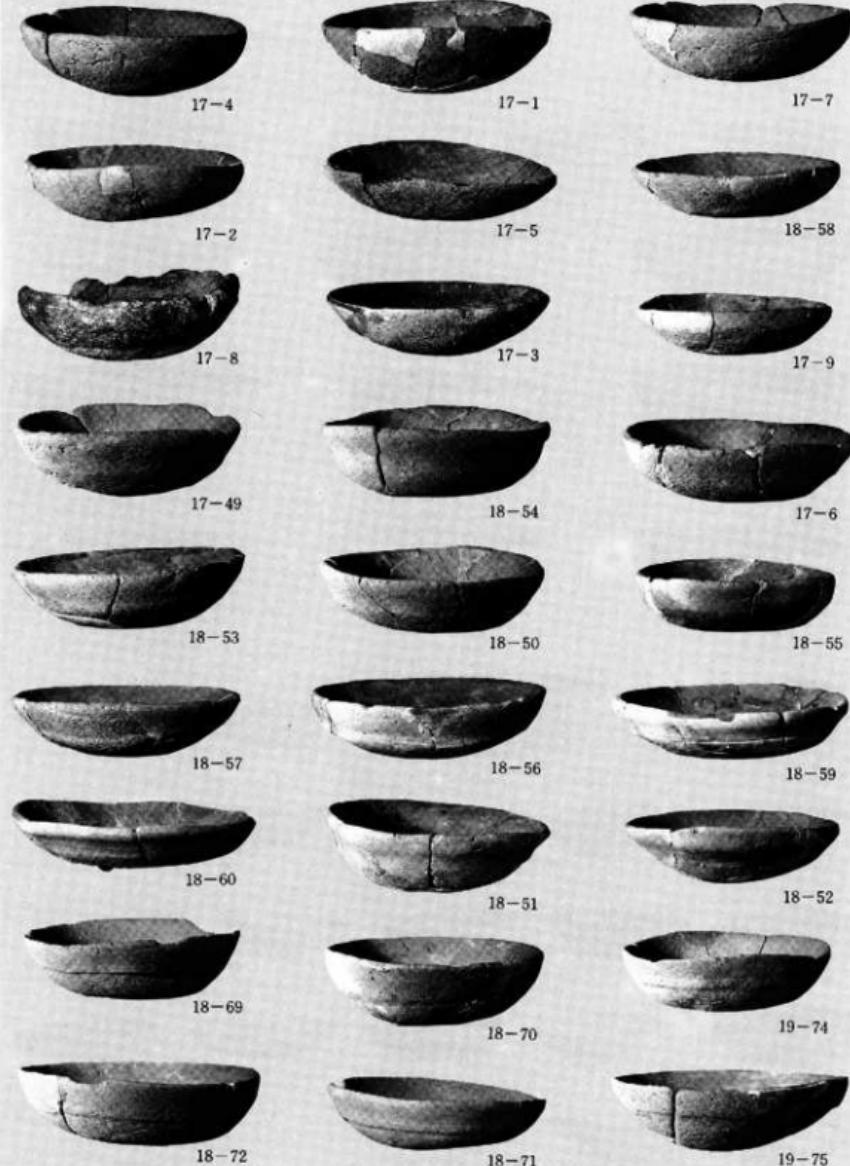
18 集石 1

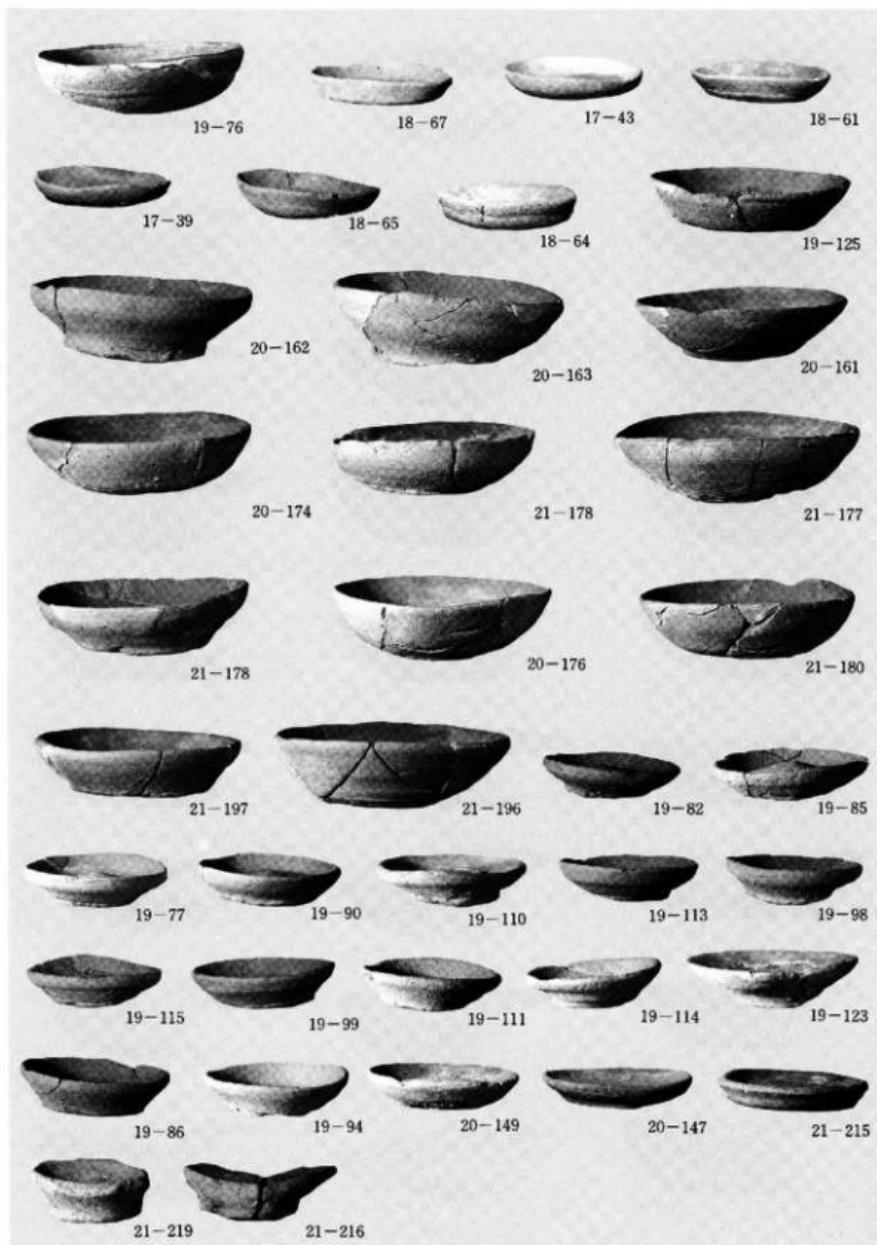


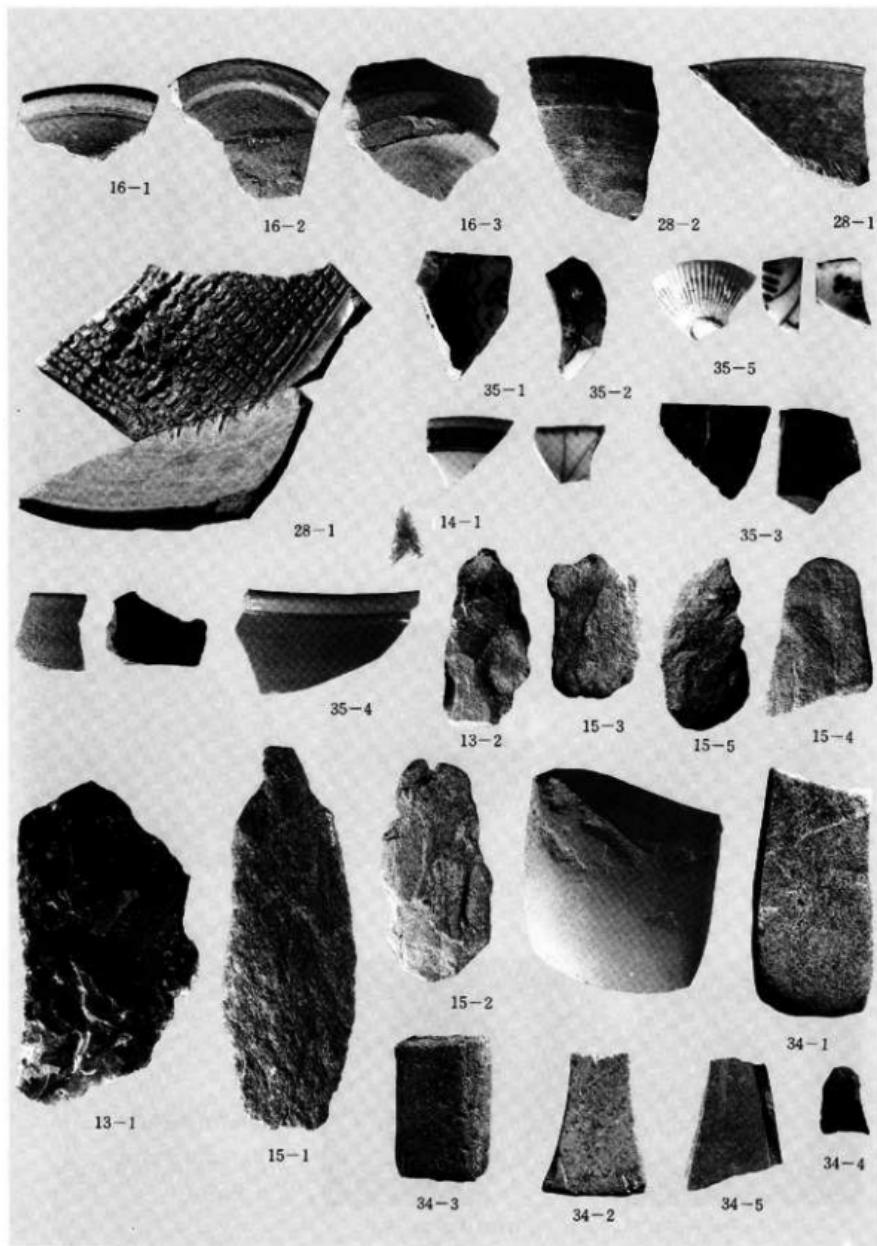
19 石列5全景（東方向から）



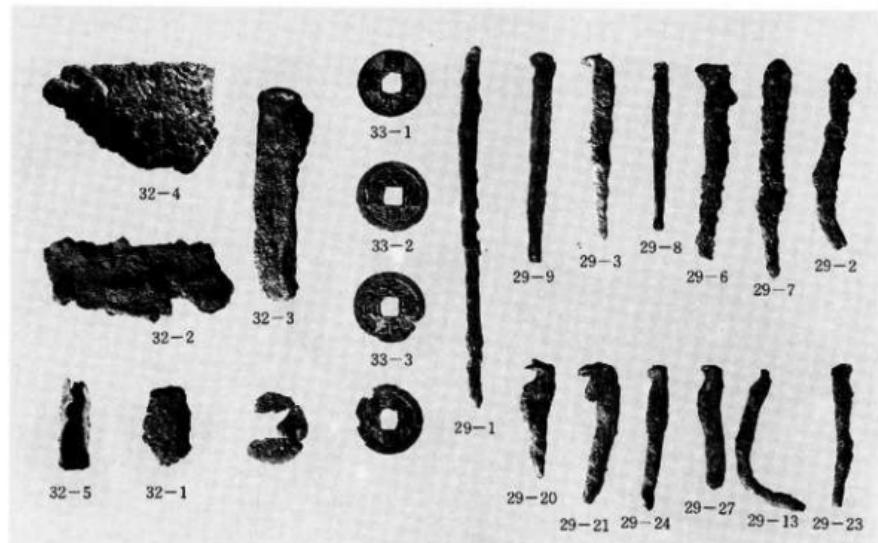
20 石列5近景



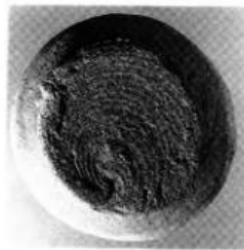




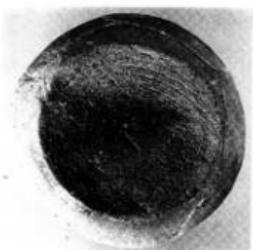
出土土器・石器 (1 / 3)



出土鉄製品・銭貨 (1/2)



1. II群B 1類(19-82)



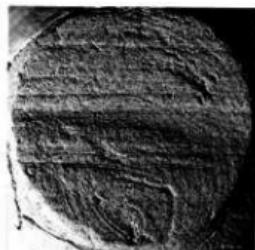
2. II群B 2類(20-159)



3. II群B 9類(21-215)



4. II群A 4類(20-173)

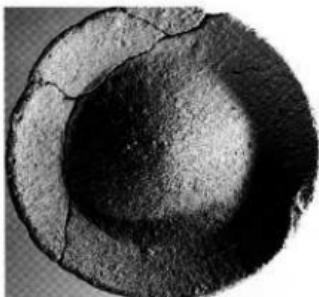


5. II群A 3類(20-163)

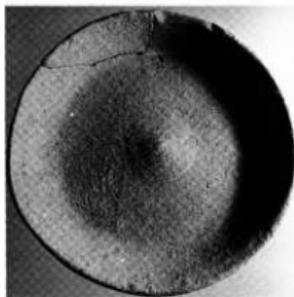
1. 底部外周縁圧痕

2. 4.5. スノコ状圧痕

3. 篦状圧痕



1. II群B 1類(19-85)



2. II群B 1類(19-90)



3. II群A 10類(21-216)



4. II群B 3類(20-170)



5. I群A 3類(18-73)



6. I群A 1類(17-4)



7. I群A 3類(18-69)

1. ~3. 内底面突起

4. 内底面突起ナデ

5. 刷毛状工具による暗文状ナデ

6. 口縁部外縁の横ナデ

7. 内面の横ナデ整形

---

## 機並遺跡

— 静香苑進入道路第II期工事に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告 —

---

昭和62年3月21日 印刷

昭和62年3月24日 発行

編集  
発行  
茅野市教育委員会  
印刷  
長野県茅野市東原2丁目6番地1  
長野県茅野市中越293柴崎第1ビル  
はおづき書籍株式会社

---

